

茨城県教育財団文化財調査報告第375集

# 作野谷南遺跡

一般県道矢畑横倉新田線道路整備  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成25年3月

茨城県筑西土木事務所  
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第375集

# さく の や みなみ 作野谷南遺跡

一般県道矢畑横倉新田線道路整備  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 25 年 3 月

茨城県筑西土木事務所  
公益財団法人茨城県教育財団



## 序

茨城県では、県土の均衡ある発展を念頭におきながら地域の特性を生かした振興を図るために、一般国道や主要地方道などの広域的な交通ネットワークの整備を推進しています。

その一環として茨城県筑西土木事務所は、結城市作野谷地区において、一般県道矢畑横倉新田線道路整備事業を計画しました。しかしながら、その事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である作野谷南遺跡が所在し、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が茨城県筑西土木事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成23年10月から11月までの2か月間にわたりこれを実施しました。

本書は、作野谷南遺跡の調査の成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、委託者であります茨城県筑西土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、結城市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、深く感謝申し上げます。

平成25年 3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 鈴木 欣一



# 例 言

- 1 本書は、茨城県筑西土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団（現 公益財団法人茨城県教育財団）が平成 23 年度に発掘調査を実施した、茨城県結城市結城字作野谷 466 番地ほかに所在する作野谷南遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。  
調査 平成 23 年 10 月 1 日～11 月 30 日  
整理 平成 24 年 10 月 1 日～12 月 31 日
- 3 発掘調査は、調査課長檉村宣行のもと、以下の者が担当した。  
首席調査員兼班長 稲田義弘  
首席調査員 寺内久永  
主任調査員 櫻井完介
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長原信田正夫のもと、首席調査員寺内久永が担当した。
- 5 栃木県小山市の遺跡については、小山市教育委員会から資料を送付していただいた。

# 凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = + 30,960 \text{ m}$ 、 $Y = + 1,280 \text{ m}$ の交点を基準点 (A 1 a1) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C…、西から東へ 1, 2, 3…とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c…j, 西から東へ 1, 2, 3…0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SD - 溝跡 SE - 井戸跡 SK - 土坑  
PG - ピット群 P - 柱穴  
遺物 M - 金属製品 Q - 石器 TP - 拓本記録土器

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土・施釉		炉・火床面		
	黒色処理		煤・油煙		
●	土器	□	石器	△	金属製品

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量で記述した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記については、次のとおりである。

(1) 現存値は ( ) を、推定値は [ ] を付して示した。計測値の単位は m, cm, g で示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 建物跡・竪穴遺構の「主軸」は、最長の軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

7 今回の報告分で、調査段階での遺構名を変更したもの及び欠番にしたものは以下のとおりである。

変更 SI 1 → 第 1 号建物跡 SI 2 → 第 1 号竪穴遺構 SI 3 → 第 2 号建物跡 SK11 → 第 1 号墓坑  
SK13 → 第 2 号墓坑 SK15 → 第 3 号墓坑 SK22 → 第 4 号墓坑 SK27 → 第 5 号墓坑 SK30 → 第 6 号墓坑  
SK33 → 第 7 号墓坑 SK34 → 第 8 号墓坑 SK35 → 第 9 号墓坑 SK42 → 第 10 号墓坑  
SK32 → 第 1 号火葬施設 SX 1 → SK43 PG 4 (P 8 ~ 13) → SK44 ~ 49  
欠番 SK 3 · 20 · 31

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
概 要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	10
1 中世の遺構と遺物	10
(1) 建物跡	10
(2) 竪穴遺構	16
(3) 井戸跡	19
(4) 炉跡	29
(5) 墓坑	30
(6) 墓坑の可能性のある土坑	35
(7) 火葬施設	39
2 その他の遺構と遺物	40
(1) 土坑	40
(2) 溝跡	46
(3) ピット群	48
(4) 遺構外出土遺物	56
第4節 まとめ	59
写真図版	PL 1～PL10
抄 録	



# さくのやみなみ 作野谷南遺跡の概要

## 遺跡の位置と調査の目的

作野谷南遺跡は、結城市の北西部に位置し、鬼怒川と西仁連川に挟まれた南北に細長く延びる標高約 34 m の台地に立地しています。一般県道矢畑横倉新田線道路整備事業にともない、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、茨城県教育財団が平成 23 年度に 1,420㎡について発掘調査を行いました。



## 調査の内容

調査区域は、台地西部の西仁連川とその流域の水田地帯を望む平坦地に位置しています。調査の結果、中世の建物跡、竪穴遺構、井戸跡、墓坑、炉跡、土坑、溝跡、ピット群などが確認できました。主な出土遺物は、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、石器、銭貨などです。



調査区全景（西上空から）



調査区西部完掘状況



第1号竪穴遺構遺物出土状況



第1号井戸跡完掘状況



出土遺物

## 調査の結果

室町時代の集落跡を確認しました。建物跡・竪穴遺構の近くに井戸があり、とうみょうざら 灯明皿やないしなべ 内耳鍋、とこなめさんおわがめ 常滑産大甕、せきせいほち 石製鉢などが出土していることから、日常的な生活空間であったと考えられます。また、こせとへいし 古瀬戸瓶子やけびょう 花瓶、中国産のせいじわん 青磁碗などの破片も出土しているので、有力者の存在をうかがうことができます。

調査区域西部を南北に走る現在の道路は、「結城街道」「鎌倉街道」と呼ばれており、ゆうきじょう 結城城からさしま 猿島郡を通り、むさし 武蔵国を経て鎌倉に至る中世以来の幹線道路と伝えられています。古文書には「鎌倉大道」と記されており、遺跡の南側には、「屋敷付」、さらに南側 3.5km には「大道」という地名が残っています。遺跡周辺には、社や石塔、塚などが残る中世的な景観も見られ、当遺跡は、街道沿いに営まれた宿場であったと考えられます。

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

平成22年6月22日、茨城県筑西土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般県道矢畑横倉新田線道路整備事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成22年10月25日に現地踏査を、平成22年11月19・30日に試掘調査を実施し、作野谷南遺跡の所在を確認した。平成23年1月7日、茨城県教育委員会教育長は茨城県筑西土木事務所長あてに、事業地内に作野谷南遺跡が存在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

平成23年2月16日、茨城県筑西土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成23年3月14日、茨城県筑西土木事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成23年3月15日、茨城県筑西土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般県道矢畑横倉新田線道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成23年3月22日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県筑西土木事務所長あてに、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、あわせて調査機関として、財団法人茨城県教育財団（平成24年4月から公益財団法人茨城県教育財団）を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県筑西土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成23年10月1日から11月30日まで発掘調査を実施した。

## 第2節 調査経過

作野谷南遺跡の調査は、平成23年10月1日から11月30日までの2か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

期間 工程	10月			11月		
調査準備 表土除去 遺構確認	■					
遺構調査		■	■	■	■	
遺物洗浄 注記 写真整理		■	■	■	■	
補足調査 撤収						■

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

作野谷南遺跡は茨城県結城市結城字作野谷 466 番地ほかに所在している。

結城市は茨城県の西部に位置し、市の東部を鬼怒川、西部を西仁連川がそれぞれ南流しており、西仁連川を挟んで栃木県と接している。市域は南北に長く、地形は、平坦な台地と河川によって形成された大小の谷や低地に大別できる。台地は、結城台地と呼ばれ、常総台地の一部に含まれている。台地の地質は、下層に砂層・砂礫層である竜ヶ崎砂礫層、その上に常総粘土層、さらに上には関東ローム層が堆積し、表土に至っている。この洪積台地は、標高 24～45m の比較的緩やかな傾斜地形で、おおむね北部から南部へ向かって下っている。台地は、鬼怒川や西仁連川に注ぐ小河川によって樹枝状に開析され、帯状低地の谷戸田が形成されている。これらの小河川が流れ込む鬼怒川・西仁連川流域の沖積低地には、水田地帯が広がっている。

当遺跡は、結城駅から南西に 3km の結城台地の西部に位置しており、標高 32～34m の平坦地から台地縁辺部にかけて立地している。遺跡の北側には、西仁連川に注ぐ小河川が形成した谷戸田が北東に延びており、南側には、ほぼ平坦な土地に宅地や畑地が連なっている。東側は平坦な土地が広がり、谷戸田を挟んで、さらに東側は鬼怒川流域の水田地帯に続いている。西側は、西仁連川流域の水田地帯となっている。

調査前の現況は畑地である。

### 第2節 歴史的環境

結城市には、旧石器時代から近世まで大小約 170 の遺跡が確認されており<sup>1)</sup>、その多くは、市の東部を南流する鬼怒川とその支流の田川、市域の西部を南流する西仁連川に面した洪積台地縁辺部に分布している。また、西仁連川を挟んで対岸の小山市にも多くの遺跡が所在している。ここでは、市域の遺跡を概観するとともに、当遺跡の時期と関連する中世の遺跡について述べることにする。

縄文時代の遺跡は、市域で 68 か所確認されている<sup>2)</sup>。遺跡の北側 2km には小田林遺跡<sup>3)</sup>〈51〉が所在し、発掘調査によって縄文時代の早期や前期の遺構と遺物が確認されている。小田林遺跡を含め、西仁連川左岸には、本田遺跡<sup>4)</sup>〈54〉、南原遺跡〈44〉、しもはらきた遺跡〈45〉、しもはらみなみ遺跡〈40〉、みずふか遺跡〈38〉、なかそね遺跡〈21〉等が、右岸の小山市域には、よこくらみやのうちの遺跡〈26〉、よこくらとだて遺跡〈28〉、よこくら遺跡〈36〉、よこくらまつやま遺跡〈37〉等が所在し、西仁連川流域の遺跡群ととらえることができる。

弥生時代の遺跡は、当遺跡周辺での確認数は 12 遺跡あり、石堂東遺跡〈15〉、横倉宮ノ内遺跡、横倉戸館遺跡、横倉遺跡等が当遺跡近隣に所在している。市域の遺跡では、二軒屋式と呼ばれる栃木県域を中心として出土例の多い弥生時代後期の土器が確認でき、茨城県域の弥生文化との交流を示唆している。

古墳時代の遺跡は、当遺跡の北西側に多数確認されており、西仁連川を挟んで対岸には横倉戸館古墳 7 基〈29～35〉が所在している。本郷遺跡〈22〉、や花市山遺跡〈74〉、が当遺跡の近くに位置し、結城市街地には、くだち公達古墳〈66〉が確認できる。市域最大の古墳は、びつちろうづか備中塚古墳で、その周り約 1km 以内には約 10 基の古墳が点在していたとされている<sup>5)</sup>。

奈良時代の結城市域は下総国に属しており、東は常陸国、北は下野国と接していた<sup>6)</sup>。当遺跡付近は結城郡

の結城郷に属していたとされている。結城郷には、結城廃寺が所在しており、郡の行政官庁としての郡家も置かれていたと推定される。結城廃寺は、1988年から継続して発掘調査が行われ、金堂跡、塔跡、講堂跡などの遺構が確認され、塔心礎や舍利孔蓋、阿弥陀三尊像をはじめとする埴仏群など貴重な遺物が出土している<sup>7)</sup>。また、峯崎遺跡は、多数の掘立柱建物跡や竪穴住居跡が発見され、三彩陶器や緑釉陶器、輸入白磁などが出土しており<sup>8)</sup>、官衙関連遺跡として考えられている。当遺跡の周辺の奈良時代や平安時代の遺跡は、小蓋山北遺跡<sup>こふたやまきた</sup>〈19〉、上成東浦遺跡<sup>かみなるひがしうら</sup>〈20〉、繁昌塚東遺跡<sup>はんじょうづかひがし</sup>〈8〉等があげられ、当遺跡の北東から南東の位置に所在している。

中世の遺跡としては、結城市北部の市街地にその形跡をとどめる結城城跡を始め、城の内遺跡<sup>しろのうち</sup>〈9〉、東持寺境内遺跡<sup>とうじ</sup>、三蔵神社遺跡<sup>さんぞうじんじや</sup>〈76〉等が確認されている。結城市の中世の幕開けは、下野国の小山政光を父にもつ、結城朝光の登場によると伝えられている。当遺跡から北東2kmに位置する城の内遺跡(館跡)は、朝光が築いた武士の館とされており、1183年(寿永2)には結城城を築いている。結城城は、1440年(永享12)の結城合戦の折に一度落城しているが、結城成朝による旧領の回復から、その後の水野氏の支配まで存続していた<sup>9)</sup>。

東持寺境内遺跡は、朝光の子重光が山河氏という別家を立てた際の館跡と伝えられている。館跡は、古代の結城廃寺の南東側で、東に鬼怒川を望む台地の縁辺部に位置している。このあたりは、結城郡衙の推定地とも言われており、古代から中世のはじめにかけて結城郡の中核部であったと考えられている<sup>10)</sup>。

当遺跡の南西2.5kmに所在する三蔵神社遺跡は、土塁や池などが現在でも確認できる中世館跡である。この遺跡の近くを走る現代の道路は鎌倉街道と伝えられており、海道東や屋敷尻、屋敷付などの地名は当時の名残ととらえられる。中世史料の「山河貞重寄進状案」<sup>11)</sup>には、「鎌倉大道」との記載があり、三蔵神社遺跡から南へ約1kmの武井地区にある「大道」という地名は、当時の街道を彷彿とさせる。鎌倉街道は当遺跡の西部を結城城に向かって走っていたと伝えられ、屋敷付という地名も近くにある。このように当遺跡の周辺には、中世の遺跡や当時の面影を今に伝える景観や地名がよく残っている。

※ 文中の〈 〉内の番号は、第1図及び表1中の該当遺跡番号と同じである。

## 註

- 1) 結城市史編さん委員会『結城市史』第四巻 結城市 1977年3月
- 2) 結城の歴史編さん委員会『結城の歴史』結城市 1995年3月
- 3) 和田雄次 中沢時宗 桜井一美「一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書2(結城地区) 本田遺跡 善長寺遺跡 小田林遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第51集 1989年3月
- 4) 註3に同じ
- 5) 註1に同じ
- 6) 秋本吉徳『常陸国風土記』講談社 2001年10月
- 7) 結城市教育委員会『結城廃寺』結城市 1999年3月
- 8) 山武考古学研究所編「峯崎遺跡」『結城市文化財調査報告書』第7集 結城市教育委員会 1996年3月
- 9) 児玉幸多 坪井清足『日本城郭体系』第4巻 新人物往来社 1979年11月
- 10) 註1に同じ
- 11) 結城市史編さん委員会『結城市史』第一巻 結城市 1977年3月

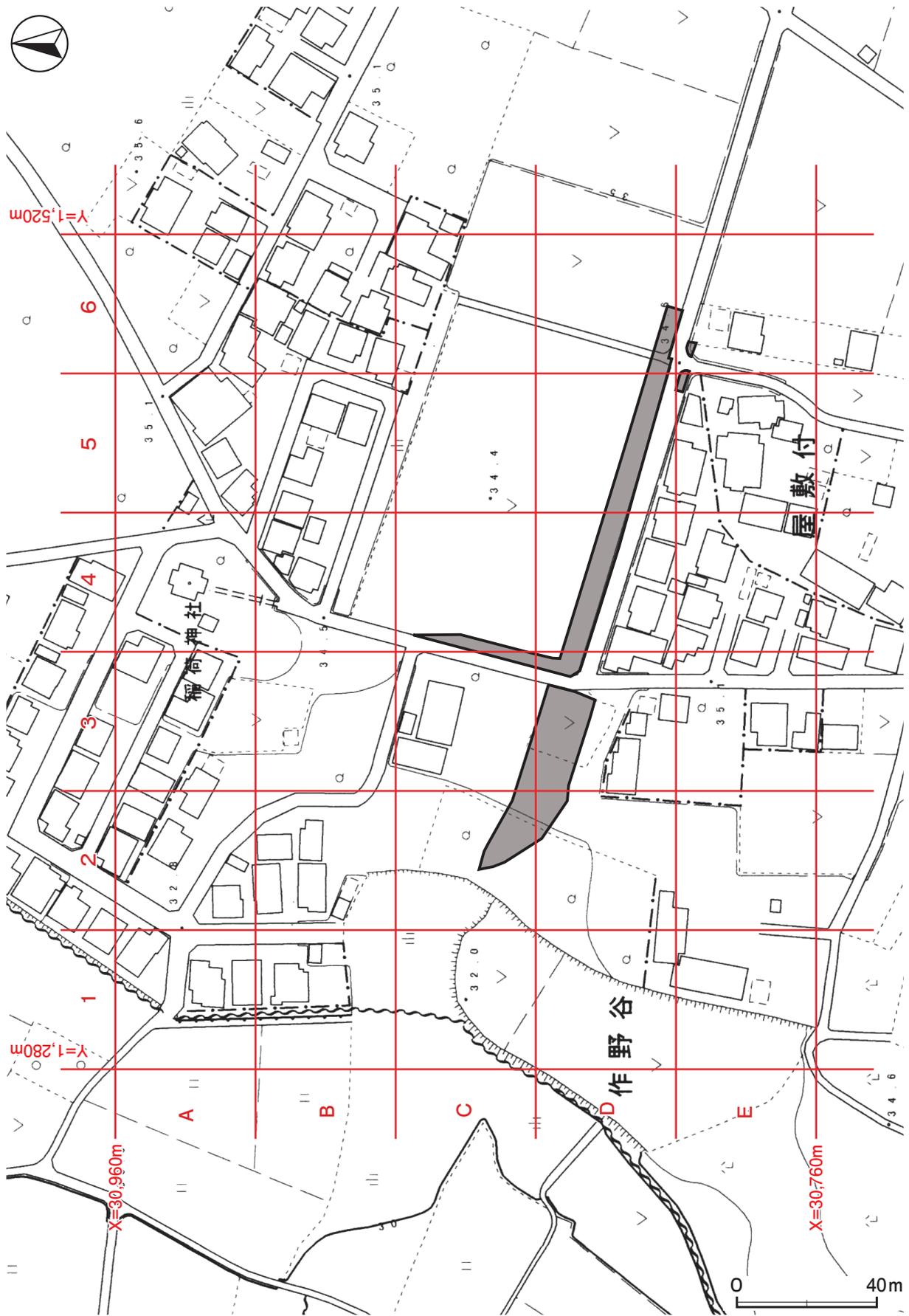
## 参考資料

- 茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』茨城県 2001年3月  
栃木県小山市教育委員会『小山市遺跡分布図・地名表』栃木県小山市 1997年



表1 作野谷南遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代							
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世
①	作野谷南遺跡						○		40	下原南遺跡		○		○			
2	作野谷遺跡				○				41	仁軒寺遺跡				○			
3	久保遺跡						○		42	黒田向遺跡				○			
4	西繁昌塚南遺跡		○						43	善長寺遺跡				○	○		
5	繁昌塚古墳				○				44	南原遺跡		○		○			
6	天神山塚古墳				○				45	下原北遺跡		○					
7	下山遺跡				○				46	下原中遺跡				○			
8	繁昌塚東遺跡					○			47	塚越遺跡		○					
9	城の内遺跡						○		48	黒田前遺跡		○		○			
10	房山北遺跡		○						49	西繁昌塚遺跡				○			
11	城の内南遺跡		○						50	新田東遺跡		○	○	○		○	
12	房山南遺跡					○	○		51	小田林遺跡		○		○			
13	沼尻向遺跡		○						52	六反田遺跡				○			
14	谷向遺跡		○						53	溜北遺跡					○		
15	石堂東遺跡			○	○				54	本田遺跡		○		○			
16	石堂北遺跡		○						55	中久喜遺跡		○	○	○	○	○	
17	石堂西遺跡				○				56	中久喜城跡						○	
18	小蓋山南遺跡				○				57	本田B遺跡					○		
19	小蓋山北遺跡					○			58	本田北遺跡						○	
20	上成東浦遺跡					○			59	上海道遺跡					○		
21	中曾根遺跡		○		○	○			60	上の宮遺跡					○	○	
22	本郷遺跡				○				61	立の山遺跡					○		
23	堂塚古墳				○				62	長塚東遺跡					○	○	
24	田間東道北遺跡		○	○	○	○	○		63	五本木遺跡						○	
25	横倉本郷遺跡		○	○	○	○			64	逆井遺跡					○	○	
26	横倉宮ノ内遺跡		○	○	○	○	○	○	65	公達遺跡						○	
27	横倉宮ノ内西遺跡		○			○			66	公達古墳				○			
28	横倉戸館遺跡		○	○	○	○	○	○	67	貉塚遺跡					○	○	
29	横倉戸館1号墳				○				68	中台遺跡					○		
30	横倉戸館2号墳				○				69	百野遺跡		○					
31	横倉戸館3号墳				○				70	狐塚遺跡				○			
32	横倉戸館4号墳				○				71	井筋向遺跡					○		
33	横倉戸館5号墳				○				72	田間東浦遺跡					○		
34	横倉戸館6号墳				○				73	薬師堂山遺跡				○			
35	横倉戸館7号墳				○				74	花市山遺跡				○			
36	横倉遺跡		○	○	○	○	○	○	75	権現東遺跡		○				○	
37	横倉松山遺跡		○	○	○	○	○	○	76	三蔵神社遺跡		○	○	○	○	○	
38	水深遺跡		○		○				77	下原遺跡		○	○	○		○	
39	大日山遺跡				○				78	香取前遺跡		○	○	○	○	○	



第2図 作野谷南遺跡調査区設定図（結城市都市計画図 2,500 分の 1 から作成）

# 第3章 調査の成果

## 第1節 調査の概要

作野谷南遺跡は、結城市の西部に位置し、結城台地の西端に所在している。遺跡は、西仁連川をのぞむ台地の平坦部に位置しており、範囲は東西約240m、南北約80mほどである。調査区域は遺跡の北西部に位置していると想定され、東西約161m、南北約58mの細長い範囲である。地形は、標高約34mの平坦地が東部から中央部、西部にかけて続き、西部で西仁連川に面した斜面地となる。西端部は、沖積低地に接する急斜面となっている。調査面積は1,420㎡で、調査前の現況は畑地である。

調査の結果、建物跡2棟（室町時代）、竪穴遺構1基（室町時代）、井戸跡10基（室町時代・中世）、炉跡2基（室町時代）、墓坑10基（室町時代・中世）、墓坑の可能性のある土坑8基（中世）、火葬施設1基（中世）、土坑27基（時期不明）、溝跡2条（時期不明）、ピット群5か所（時期不明）を確認した。

遺物は、遺物コンテナ（60×40×20cm）に4箱出土している。主な遺物は、土師質土器（小皿・皿・内耳鍋）、瓦質土器（内耳鍋・播鉢・香炉）、陶器（花瓶・播鉢・瓶子・甕）、磁器（碗）、石器（砥石・鉢）、鉄製品（釘）、銭貨などである。

## 第2節 基本層序

調査区南部（D3d5）にテストピットを設定し、基本土層（第3図）の観察を行った。以下、観察結果から層序を説明する。

第1層は黒褐色を呈する耕作土層である。層厚は12～14cmである。

第2層は暗褐色を呈するローム層への漸移層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は35～54cmである。

第3層は褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は5～19cmである。

第4層は暗褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強く、層厚は17～35cmである。

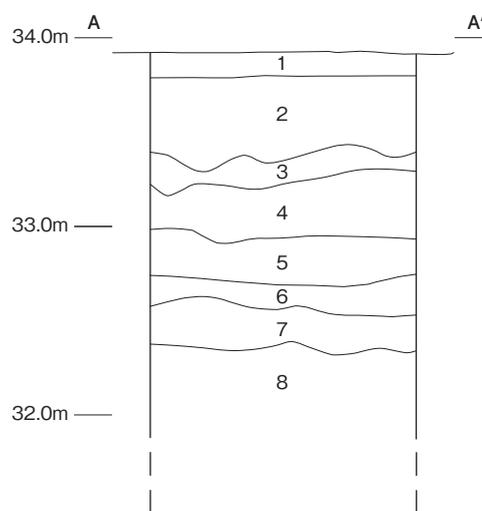
第5層は褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強く、層厚は17～25cmである。

第6層は褐色を呈するハードローム層で、鹿沼パミスを中量含んでいる。粘性・締まりともに強く、層厚は9～21cmである。

第7層は褐色を呈するハードローム層で、鹿沼パミスを微量含んでいる。粘性・締まりともに強く、層厚は17～28cmである。

第8層はにぶい褐色を呈する粘土層で、粘性・締まりともに強い。層厚は44cm以上で、さらに下層は未掘のため本来の層厚は不明である。

遺構は、第2層上面で確認できた。



第3図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

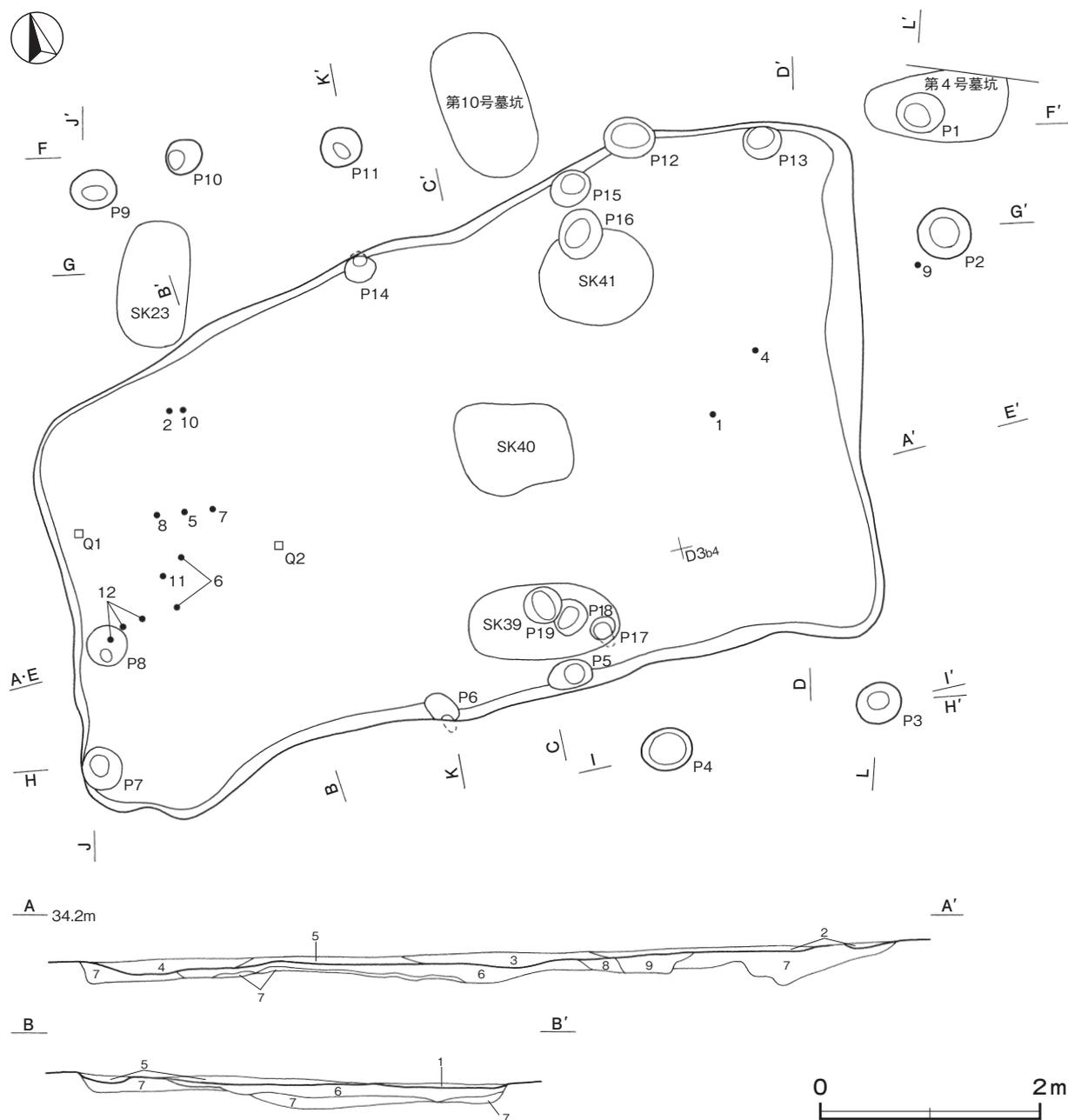
#### 1 中世の遺構と遺物

当時代の遺構は、建物跡2棟、竪穴遺構1基、井戸跡10基、炉跡2基、墓坑10基、墓坑の可能性のある土坑8基、火葬施設1基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

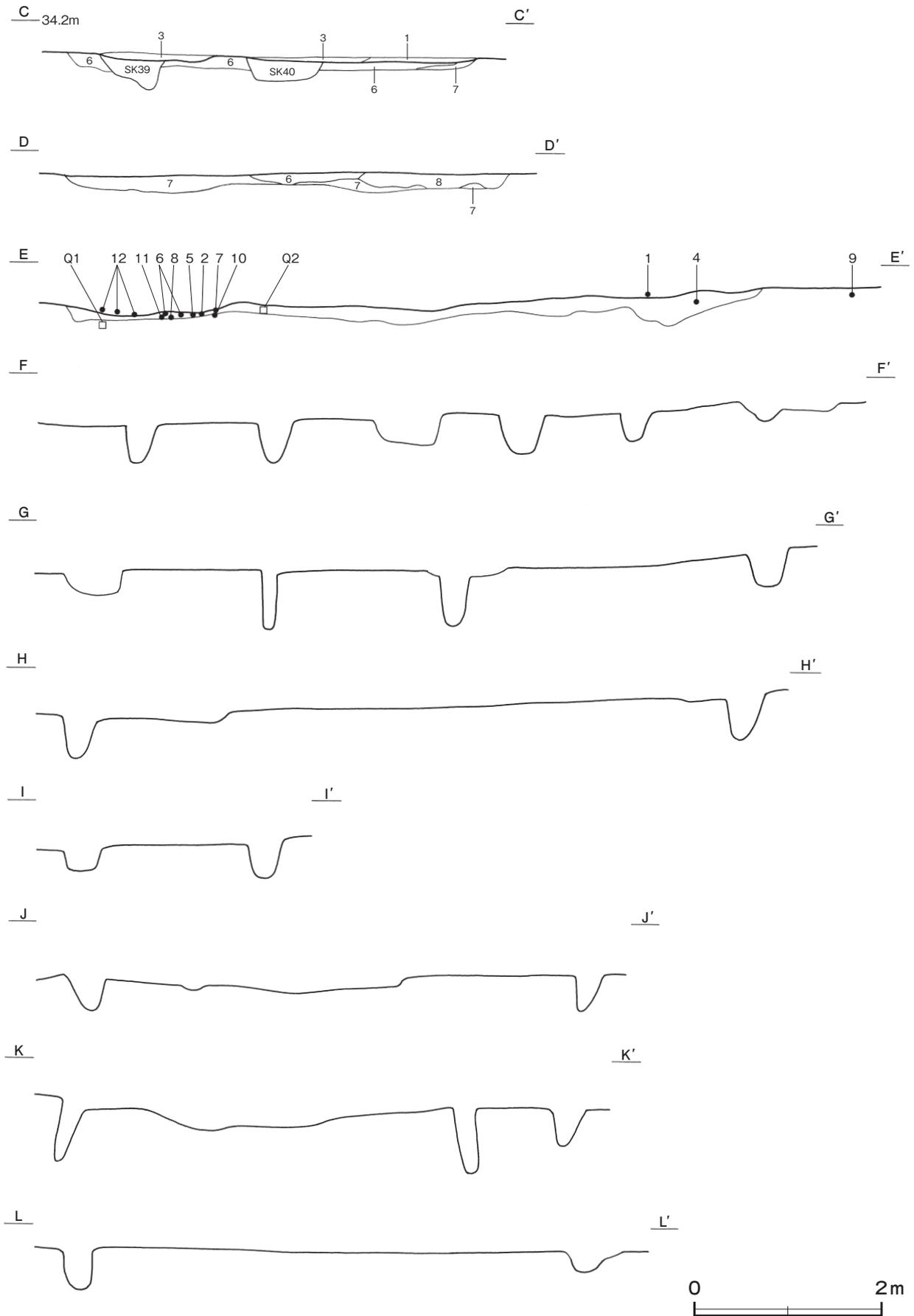
##### (1) 建物跡

##### 第1号建物跡 (SI 1) (第4～7図)

**位置** 調査区西部のD 3 a3区、標高34 mほどの台地平坦部に位置している。



第4図 第1号建物跡実測図(1)



第5图 第1号建物跡実測図(2)

**確認状況** 遺構確認面で、暗褐色土を主体とした硬化面を有する平坦な面と柱穴 19 か所を確認した。

**重複関係** 第 4 号墓坑に掘り込まれている。第 39～41 号土坑は本跡の床面下で確認した。第 10 号墓坑、第 23 号土坑は、本跡と同じ標高で確認したが、新旧関係は不明である。

**規模と形状** 暗褐色土の範囲は、東西 7.7m、南北 4.9m の不整長方形で、長軸方向は N - 78° - E である。

**床** ほぼ平坦な締まった面が見られた。地山を 20cm ほど掘り込んだ後に、暗褐色土や黒褐色土を埋土して構築している。

**ピット** 19 か所。床面を取り囲むようにほぼ方形に配列されている。深さは、27～60cm である。

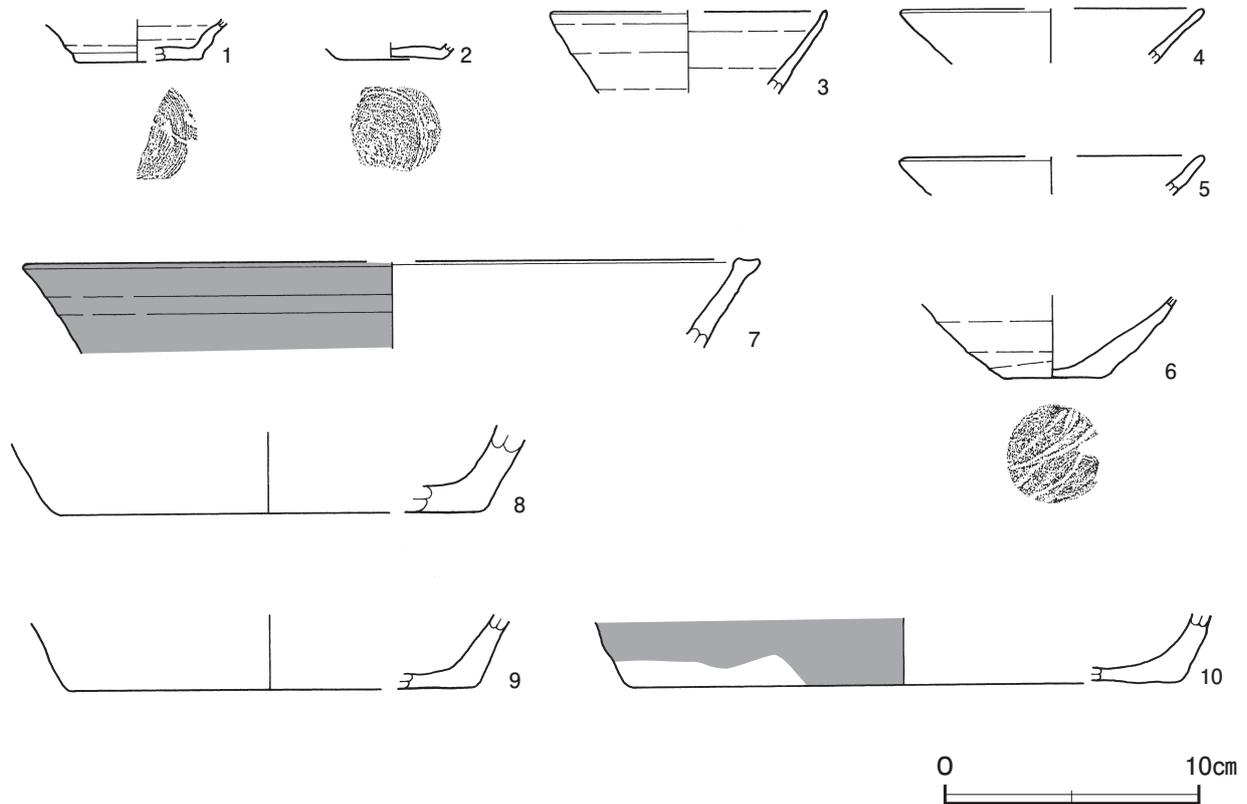
**覆土** 5 層に分層できる。第 1～5 層は床面上に堆積した覆土であるが層厚が薄く、堆積状況は不明である。第 6～9 層は、床面の構築土である。

**土層解説**

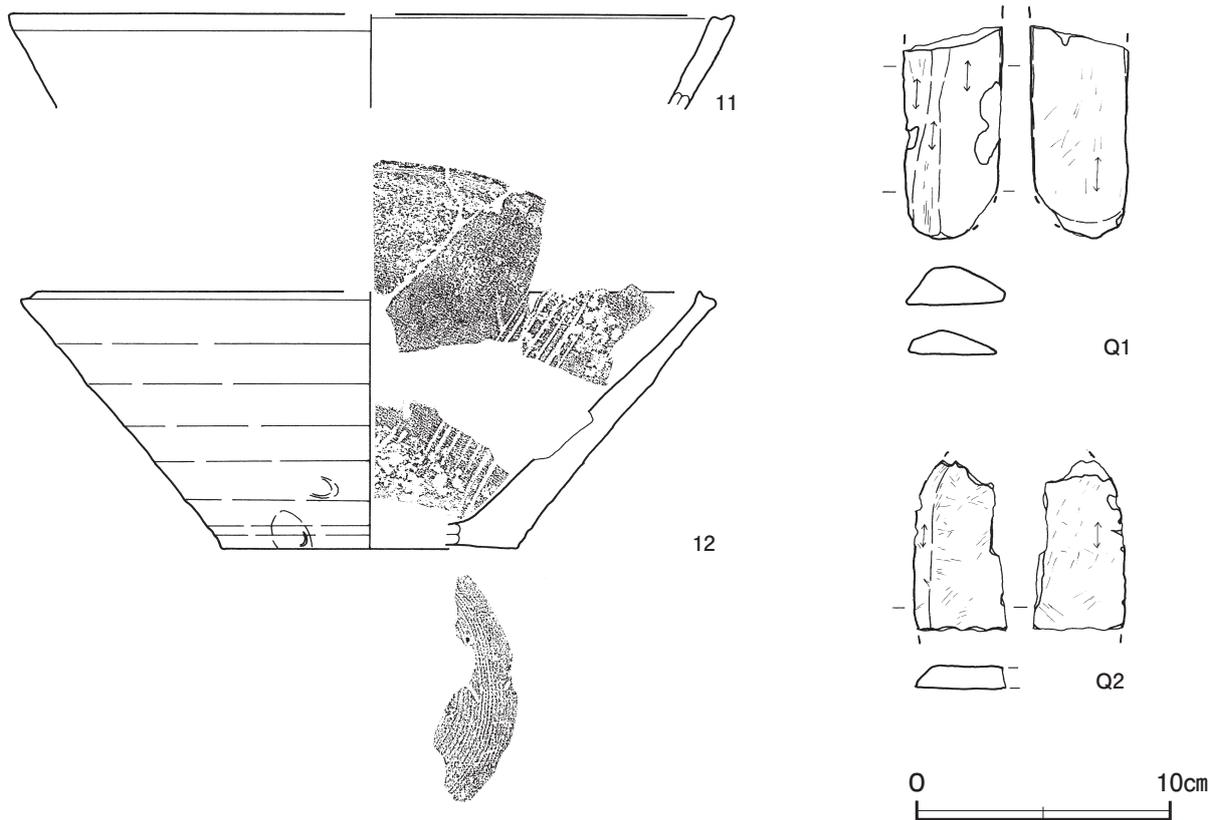
- |       |           |        |                |
|-------|-----------|--------|----------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量   | 6 暗褐色  | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 褐色  | ローム粒子中量   | 7 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量   |
| 3 灰褐色 | ローム粒子微量   | 8 黒褐色  | ローム粒子・焼土粒子微量   |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量 | 9 黒褐色  | ローム粒子微量        |
| 5 暗褐色 | ロームブロック少量 |        |                |

**遺物出土状況** 土師質土器片 67 点（皿 27、内耳鍋 40）、瓦質土器片 5 点（内耳鍋 1、播鉢 4）、石器 2 点（砥石）が西部の床面とその構築土を中心として出土している。4 は東部の床面の構築土中、1 は東部の床面、7・12 は西部の床面からそれぞれ出土している。2・5・6・8・10・11 は西部の床面の構築土中から出土しており、6・12 はそれぞれの破片が接合したものである。

**所見** 床面とピットの存在、床面で土師質土器を中心とした土器が出土していることから、生活空間であったととらえられる。時期は、出土土器から 15 世紀後半と考えられる。



第 6 図 第 1 号建物跡出土遺物実測図（1）



第7図 第1号建物跡出土遺物実測図(2)

第1号建物跡出土遺物観察表(第6・7図)

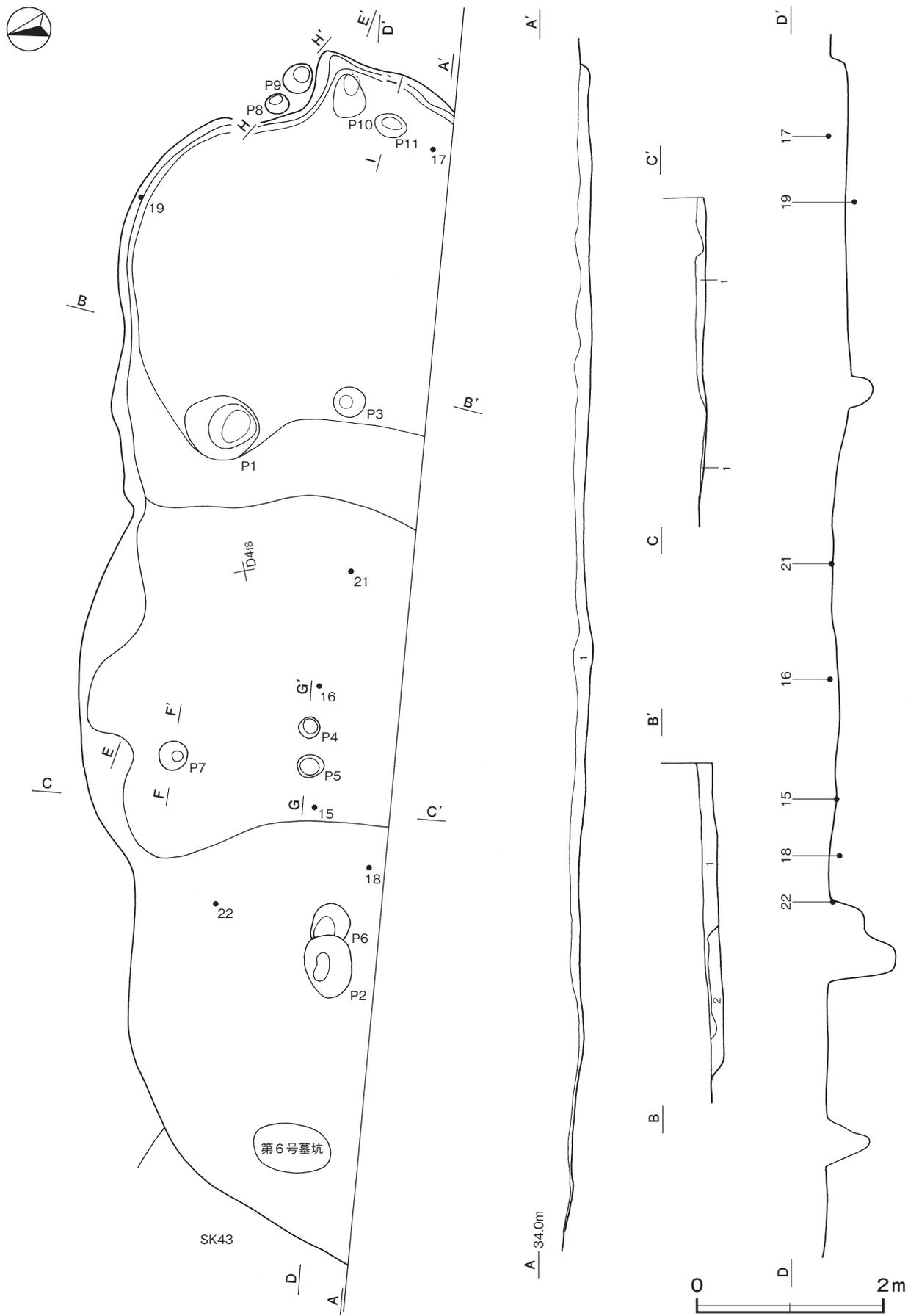
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師質土器	小皿	-	(1.7)	[5.0]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	床面	5%
2	土師質土器	小皿	-	(0.6)	[4.2]	長石・石英	浅黄橙	普通	底部回転糸切り	床構築土	5%
3	土師質土器	皿	[10.7]	(3.3)	-	長石・石英・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	外・内面ロクロナデ	覆土中	5%
4	土師質土器	皿	[11.8]	(2.2)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	外・内面ロクロナデ	床構築土	5%
5	土師質土器	皿	[11.7]	(1.5)	-	長石・石英・黒色粒子	灰黄	普通	外・内面ロクロナデ	床構築土	5%
6	土師質土器	皿	-	(3.3)	3.6	長石・石英・雲母・黒色粒子	浅黄	普通	底部内面指頭痕 底部回転糸切り 板目状圧痕	床構築土	70% PL 7
7	土師質土器	内耳鍋	[29.0]	(3.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	外・内面ナデ 外面煤付着	床面	5%
8	土師質土器	内耳鍋	-	(3.3)	[16.8]	長石・石英・雲母・黒色粒子・赤色粒子	明赤褐	普通	外面ナデ	床構築土	5%
9	土師質土器	内耳鍋	-	(3.0)	[16.0]	長石・石英・雲母・赤色粒子	赤褐	普通	外面ナデ	床面	5%
10	土師質土器	内耳鍋	-	(2.7)	[21.4]	石英・細礫	にぶい褐	普通	外・内面ナデ 外面煤付着	床構築土	5%
11	瓦質土器	内耳鍋	[28.6]	(3.7)	-	長石・石英	灰黄	普通	外・内面ナデ	床構築土	5%
12	瓦質土器	播鉢	[26.2]	(10.2)	[11.6]	長石・石英	黒褐	普通	7条1単位の播目 底部回転糸切り 底部・体部外面指頭痕	床面	10% PL 8

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	砥石	(8.5)	3.9	1.6	(50.3)	凝灰岩	砥面5面 中央部から先端部にかけて薄くなる	床構築土	PL 9
Q 2	砥石	(6.8)	(3.7)	1.3	(42.5)	凝灰岩	砥面2面 刃部による切痕有	床構築土	PL 9

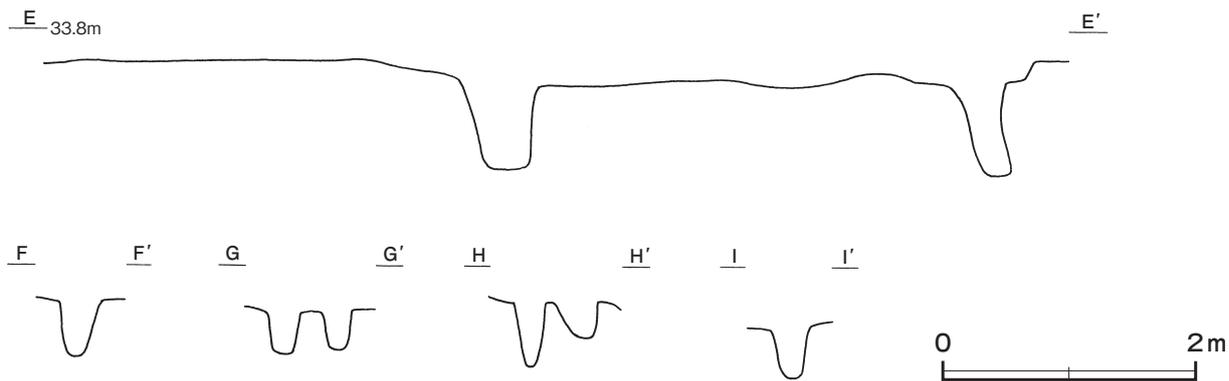
第2号建物跡 (SI 3) (第8～11図)

位置 調査区西部のD 4f8区、標高34mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第43号土坑を掘り込み、第6号墓坑に掘り込まれている。



第8图 第2号建物迹实测图(1)



第9図 第2号建物跡実測図(2)

**規模と形状** 南部が調査区域外に伸びているため、東西軸 12.6 mで、南北軸 3.6 mしか確認できなかった。掘り込みは浅い不整長方形で、確認できたピットから、軸方向は  $N - 90^\circ$  または  $N - 0^\circ$  と推定される。

**床** ほぼ平坦で締まりがあり、西部から東部にわずかに傾斜している。

**ピット** 11か所。P 1は 66cm, P 2は 77cm の深さで、規模や配列から主柱穴に相当する。P 3～P 9は、深さ 30～54cm で補助的な柱穴と考えられる。P 10は 77cm, P 11は 38cm で、性格は不明である。ピットの配列は南側の調査区域外に伸びると考えられる。

**覆土** 2層に分層できる。層厚が薄いため堆積状況は不明である。

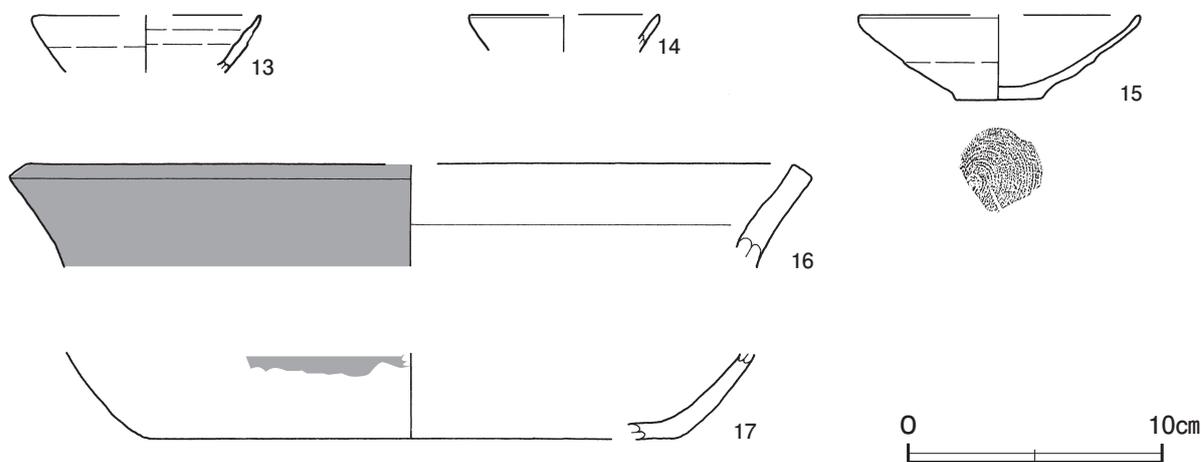
**土層解説**

1 にぶい褐色 ロームブロック中量

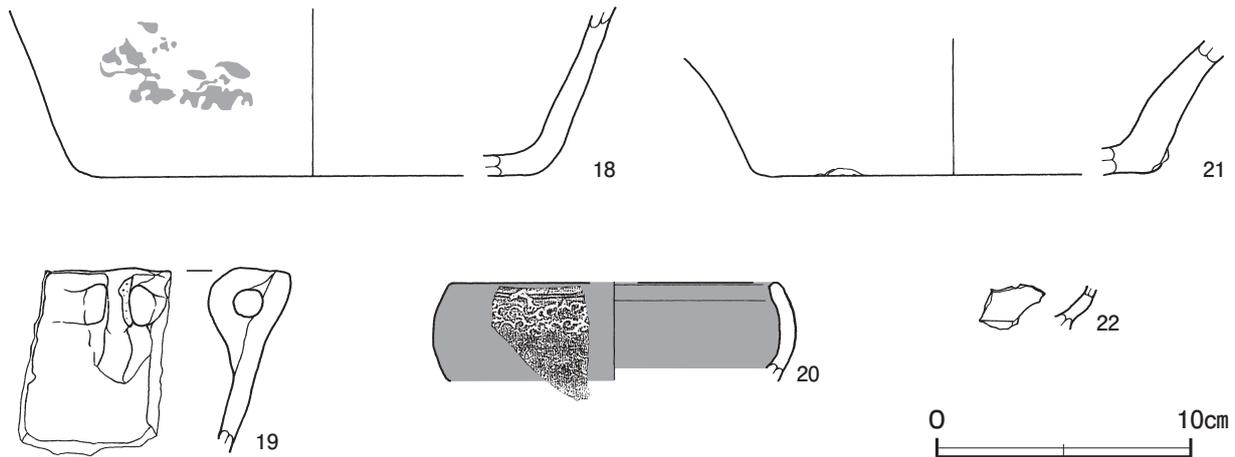
2 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師質土器片 41 点 (小皿 2, 皿 4, 内耳鍋 35), 瓦質土器片 2 点 (内耳鍋, 香炉), 陶器片 1 点 (甕), 磁器片 1 点 (青磁碗) が中央部から西部にかけての覆土中から出土している。19 は東部, 21 は中央部, 15・18・22 は西部の床面から出土している。16 は中央部の覆土下層, 17 は東部の覆土上層からそれぞれ出土している。

**所見** 生活面の痕跡とピットの存在, 床面で土師質土器を中心とした器類が出土していることから、建物跡と判断した。ピットの配列から、調査区域外に建物跡が伸びていることが推定できる。時期は、出土土器から 15 世紀後半と考えられる。



第10図 第2号建物跡出土遺物実測図(1)



第11図 第2号建物跡出土遺物実測図(2)

第2号建物跡出土遺物観察表(第10・11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
13	土師質土器	小皿	[8.8]	(2.3)	-	長石・石英・赤色粒子	浅黄	普通	外・内面ロクロナデ	覆土中	5%
14	土師質土器	小皿	[7.4]	(1.5)	-	長石	にぶい橙	普通	外・内面ロクロナデ	覆土中	5%
15	土師質土器	皿	[10.8]	3.4	3.4	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	床面	5% PL 7
16	土師質土器	内耳鍋	[30.0]	(4.2)	-	長石・石英・雲母	明褐	普通	外・内面ナデ 外面煤付着	覆土下層	5%
17	土師質土器	内耳鍋	-	(3.4)	[21.0]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外面下端ヘラナデ 外面煤付着	覆土上層	5%
18	土師質土器	内耳鍋	-	(6.7)	[17.0]	長石・石英・雲母・細礫	褐灰	普通	外面煤付着	床面	5%
19	瓦質土器	内耳鍋	-	(7.3)	-	長石・雲母	灰	普通	外面煤付着	床面	10% PL 8
20	瓦質土器	香炉	[13.0]	(3.9)	-	長石・石英	浅黄	普通	外面唐草状の文様 外・内面黒色処理	覆土中	5% PL 8

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	焼成	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
21	陶器	甕	-	(5.5)	[16.0]	にぶい赤褐	良好	-	底部に指頭痕	常滑産	床面	5% PL 8
22	磁器	碗	-	(1.8)	-	灰白・緑灰	良好	青磁	貫入有	中国産	床面	5% PL 8

表2 中世の建物跡一覧表

番号	位置	平面形	主軸方向	規模		壁高 (cm)	床面	柱穴	覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係(古→新)
				長軸×短軸 (m)								
1	D3a3	不整長方形	N-78°-E	(7.7×4.9)		-	平坦	19	不明	土師質土器, 瓦質土器, 石器	15世紀	SK39~41→本跡→第4号墓坑 第10号墓坑・SK23と新旧不明
2	B4f8	不整長方形	N-90°または N-0°	(12.6×3.6)		-	平坦	11	不明	土師質土器, 瓦質土器, 陶器, 磁器	15世紀	SK43→本跡→第6号墓坑

(2) 竪穴遺構

第1号竪穴遺構 (SI 2) (第12・13図)

**位置** 調査区東部のD5g1区, 標高34mほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第7号墓坑, 第3号ピット群のP25に掘り込まれている。

**規模と形状** 南部が調査区域外に延びているため, 東西軸7.30mで, 南北軸2.70mしか確認できなかった。東西軸方向は, N-74°-Wで, 方形または長方形を基本とした形状であると推定できる。壁高は44cmで, ならだかに立ち上がっている。

床 東部はほぼ平坦で、西部の張り出し部は20cmほどの段差が認められる。張り出し部は、東西、南北ともに1.80mほどの長さである。

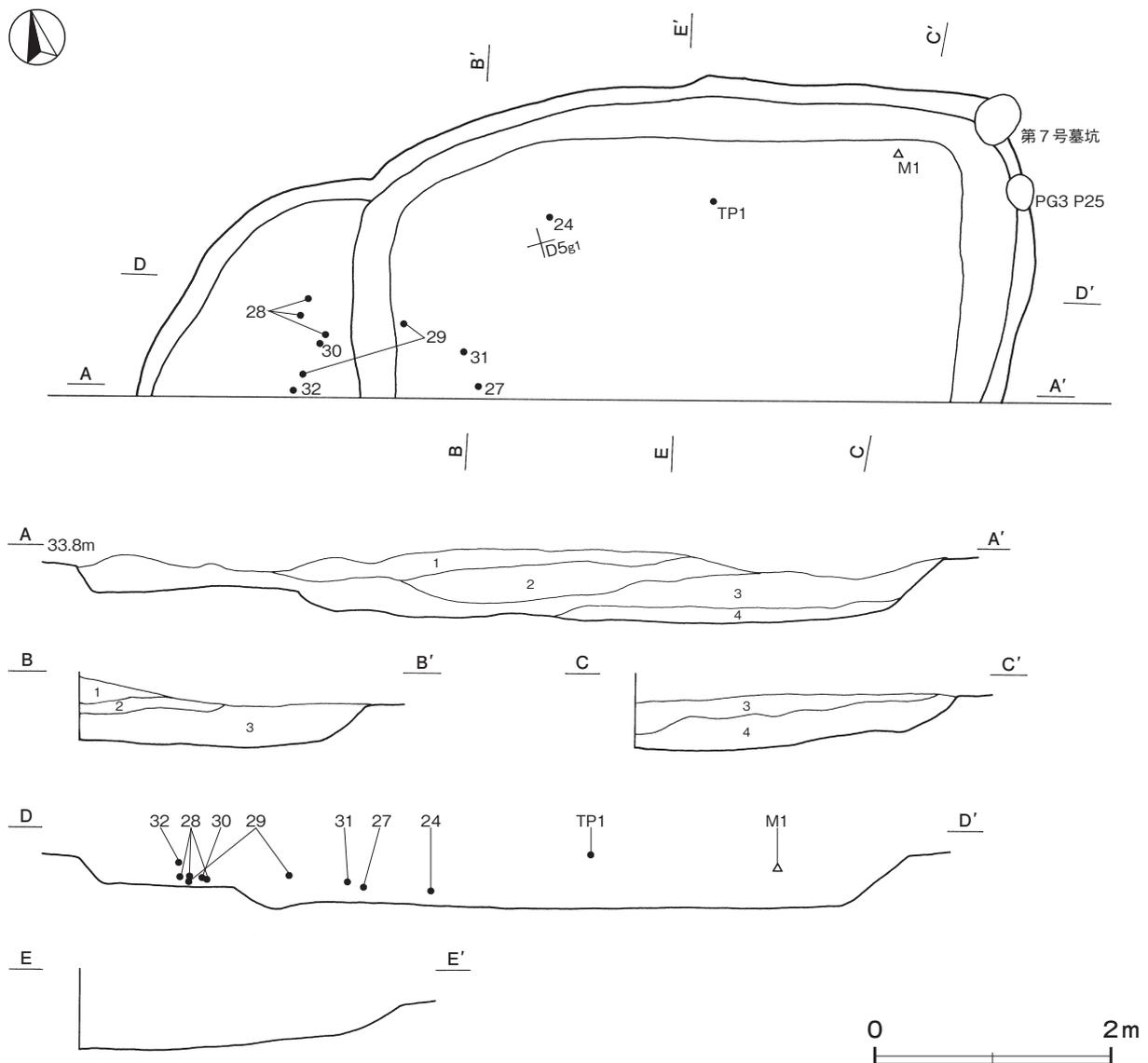
覆土 4層に分層できる。不規則に堆積している状況から、埋め戻されている。

土層解説

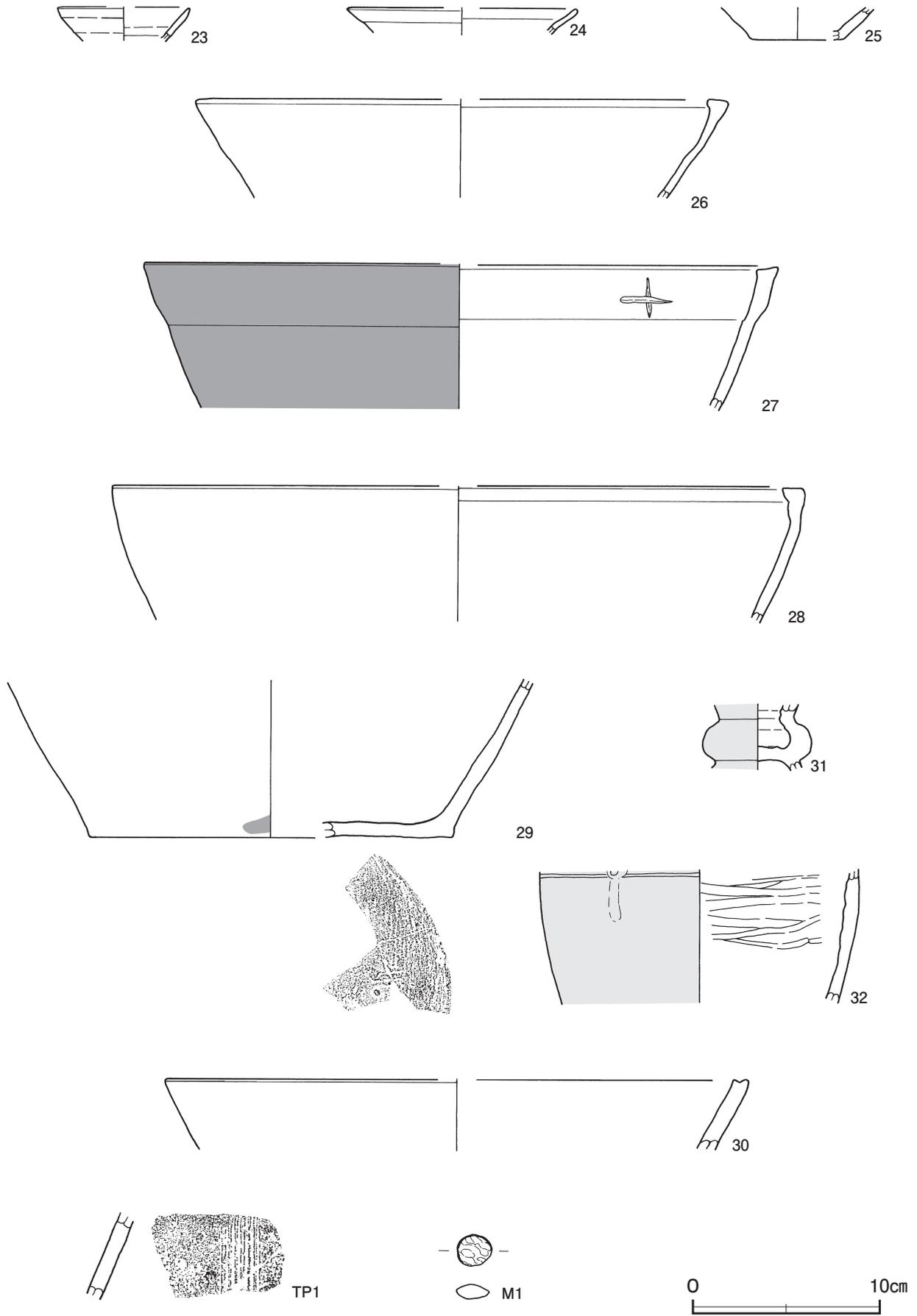
- |                       |                   |
|-----------------------|-------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量  | 3 にぶい褐色 ロームブロック中量 |
| 2 灰褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 4 にぶい褐色 ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師質土器片77点(皿7, 内耳鍋68, 鉢2), 瓦質土器片1点(内耳鍋), 陶器片3点(花瓶1, 瓶類2), 金属製品1点(不明), 自然遺物1点(馬歯)が覆土中層から下層にかけて出土している。また, 中礫22点も出土しており, 火や熱を受けたもの5点を含んでいる。さらに, 流れ込んだ縄文土器片1点も出土している。27・30・31は西部の覆土下層, 32は覆土上層, 24は中央部の覆土下層, TP1は覆土上層, M1は東部の覆土上層からそれぞれ出土している。28・29は西部の覆土下層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。なお, 馬歯は, エナメル質が残存するだけであった。

所見 時期は, 出土土器から15世紀後半と考えられる。



第12図 第1号竖穴遺構実測図



第 13 图 第 1 号竖穴遺構出土遺物実測図

第 1 号竪穴遺構出土遺物観察表 (第 13 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
23	土師質土器	小皿	[7.0]	(1.9)	-	長石・石英・黒色粒子	橙	普通	外・内面ロクロナデ	覆土中	5%
24	土師質土器	皿	[12.0]	(1.4)	-	長石・石英・黒色粒子	浅黄	普通	外・内面ロクロナデ	覆土下層	5%
25	土師質土器	皿	-	(1.8)	[5.0]	長石・石英・黒色粒子	灰黄褐	普通	底部回転糸切り	覆土中	5%
26	土師質土器	内耳鍋	[28.4]	(5.4)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	外・内面ナデ	覆土中	5%
27	土師質土器	内耳鍋	[33.8]	(7.8)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	外・内面ナデ 内面ヘラ書き「+」 外面煤付着	覆土下層	5%
28	土師質土器	内耳鍋	[37.0]	(7.3)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	外面ナデ	覆土下層	5%
29	土師質土器	内耳鍋	-	(8.6)	[19.4]	長石・石英・雲母	橙	普通	底部板目状圧痕 外面煤付着	覆土下層	10% PL 7
30	瓦質土器	内耳鍋	[31.2]	(3.8)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	外・内面ナデ	覆土下層	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	焼成	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
31	陶器	花瓶	-	(3.6)	-	浅黄・オリブ黄	良好	灰釉	釉は漬け掛け	瀬戸・美濃系	覆土下層	30% PL 8
32	陶器	瓶	-	(7.2)	-	灰白・オリブ灰	良好	灰釉	釉は漬け掛け 三筋文様一部残存	瀬戸・美濃系	覆土上層	5% PL 8

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1	瓦質土器	播鉢	長石・石英	灰	7条1単位の播目	覆土上層	PL 8

番号	器種	径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	不明	1.78	0.78	12.1	鉛	算盤玉状	覆土上層	PL10

(3) 井戸跡

第 1 号井戸跡 (第 14・15 図)

位置 調査区東部の D 5 i0 区, 標高 34 m の台地平坦部に位置している。

規模と形状 確認面は長径 2.08 m, 短径 1.93 m の円形である。確認面から深さ 66 cm までは傾斜し, 以下は径 1.18 m の円筒状となる漏斗状である。深さ 112 cm で湧水が確認され, 116 cm まで掘り下げた時点で調査を断念した。

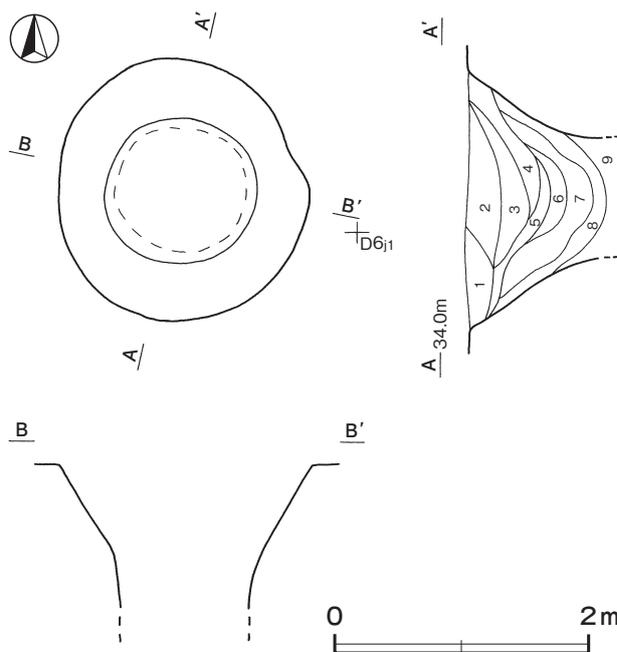
覆土 9層に分層できる。周囲から土砂が流れ込んだ様相から, 自然堆積である。

土層解説

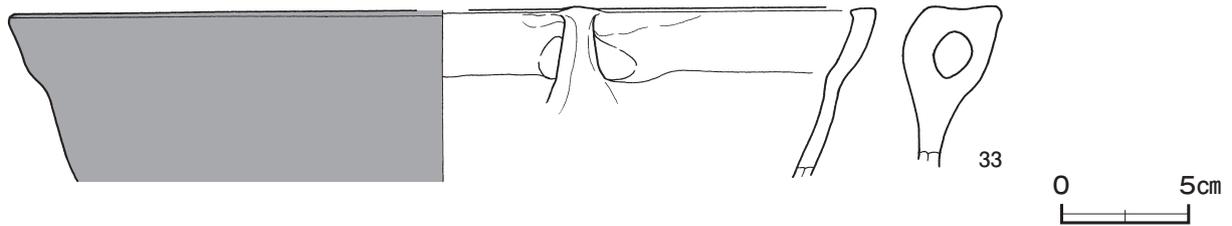
- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 褐色 ロームブロック中量
- 6 極暗褐色 ローム粒子微量
- 7 暗褐色 ロームブロック中量
- 8 褐色 ローム粒子多量
- 9 褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 土師質土器片 1 点 (内耳鍋) が出土している。33 は覆土上層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から中世と考えられる。



第 14 図 第 1 号井戸跡実測図



第15図 第1号井戸跡出土遺物実測図

第1号井戸跡出土遺物観察表（第15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
33	土師質土器	内耳鍋	[34.0]	(6.8)	-	長石・石英・雲母・細礫	にぶい黄橙	普通	外面煤付着	覆土上層	5% PL 8

第2号井戸跡（第16図）

位置 調査区東部のD5i9区、標高34mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.30m、短径1.02mの楕円形で、長径方向はN-34°-Wである。円筒状に掘り込まれており、深さ93cmで湧水を確認したため、以下の調査を断念した。

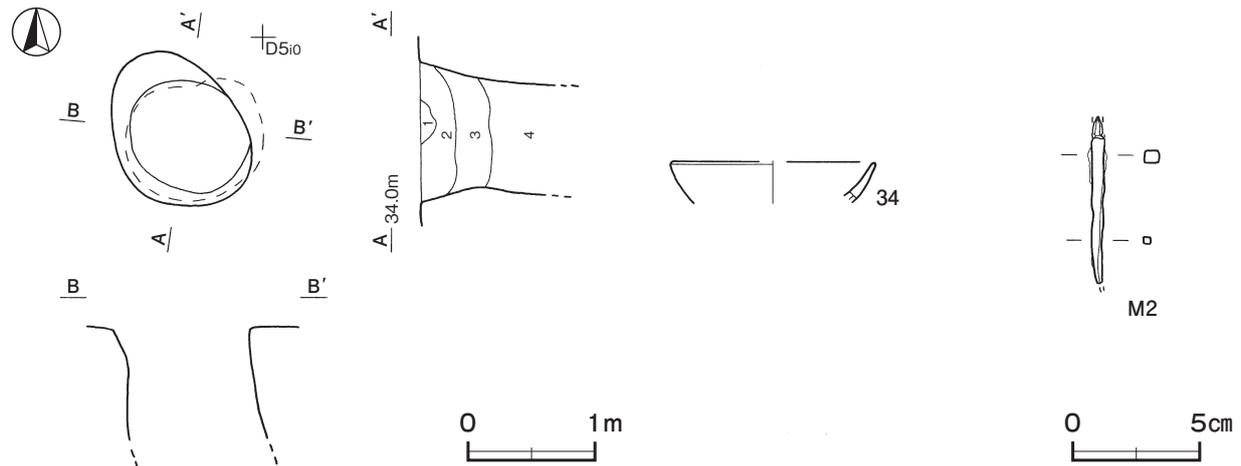
覆土 4層に分層できる。ロームブロックが不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- |                 |                  |
|-----------------|------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック中量 | 3 極暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量 | 4 黒褐色 ローム粒子少量    |

遺物出土状況 土師質土器片3点（小皿1，内耳鍋2），鉄製品1点（釘）が出土している。34・M2は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から中世と考えられる。



第16図 第2号井戸跡・出土遺物実測図

第2号井戸跡出土遺物観察表（第16図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
34	土師質土器	小皿	[8.0]	(1.7)	-	長石・石英・黒色粒子・赤色粒子	浅黄橙	普通	外・内面口クロナデ	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M2	釘	(6.68)	0.59	0.56	(2.8)	鉄	断面方形 頭部・先端部欠損	覆土中	PL10

### 第3号井戸跡 (第17・18図)

**位置** 調査区東部のD5h6, 標高34mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 径0.81mの円形で, 円筒状に掘り込まれており, 深さは177cmである。西側に長径2.60m, 短径1.76m, 深さ10cmほどの不定形の浅い掘り込みを確認した。

**覆土** 6層に分層できる。周囲から土砂が流れ込んだ様相から, 自然堆積である。

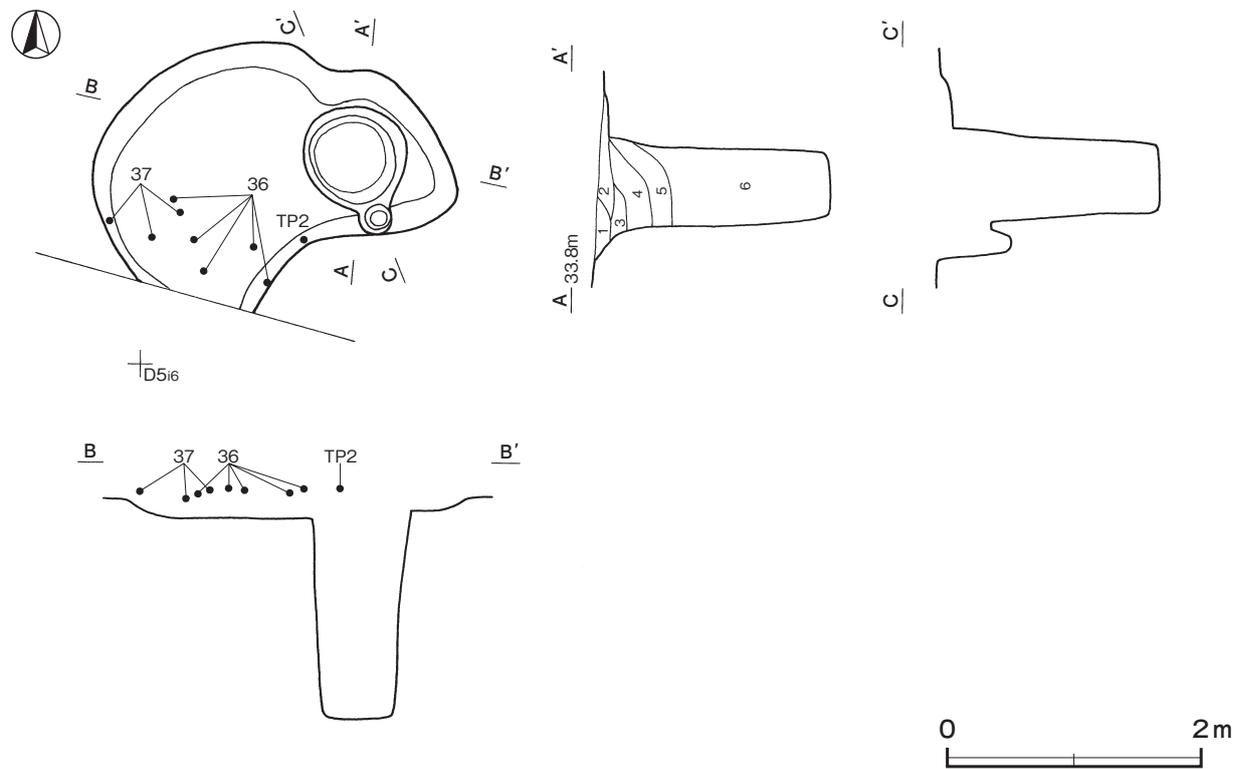
#### 土層解説

- |       |           |       |           |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量   | 4 黒褐色 | ローム粒子微量   |
| 2 暗褐色 | ローム粒子微量   | 5 褐色  | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック微量 |

**遺物出土状況** 土師質土器片17点(皿1, 内耳鍋13, 播鉢3), 瓦質土器片3点(内耳鍋)が出土している。

TP2は覆土上層から出土している。36・37は覆土上層で出土した破片がそれぞれ接合したものである。

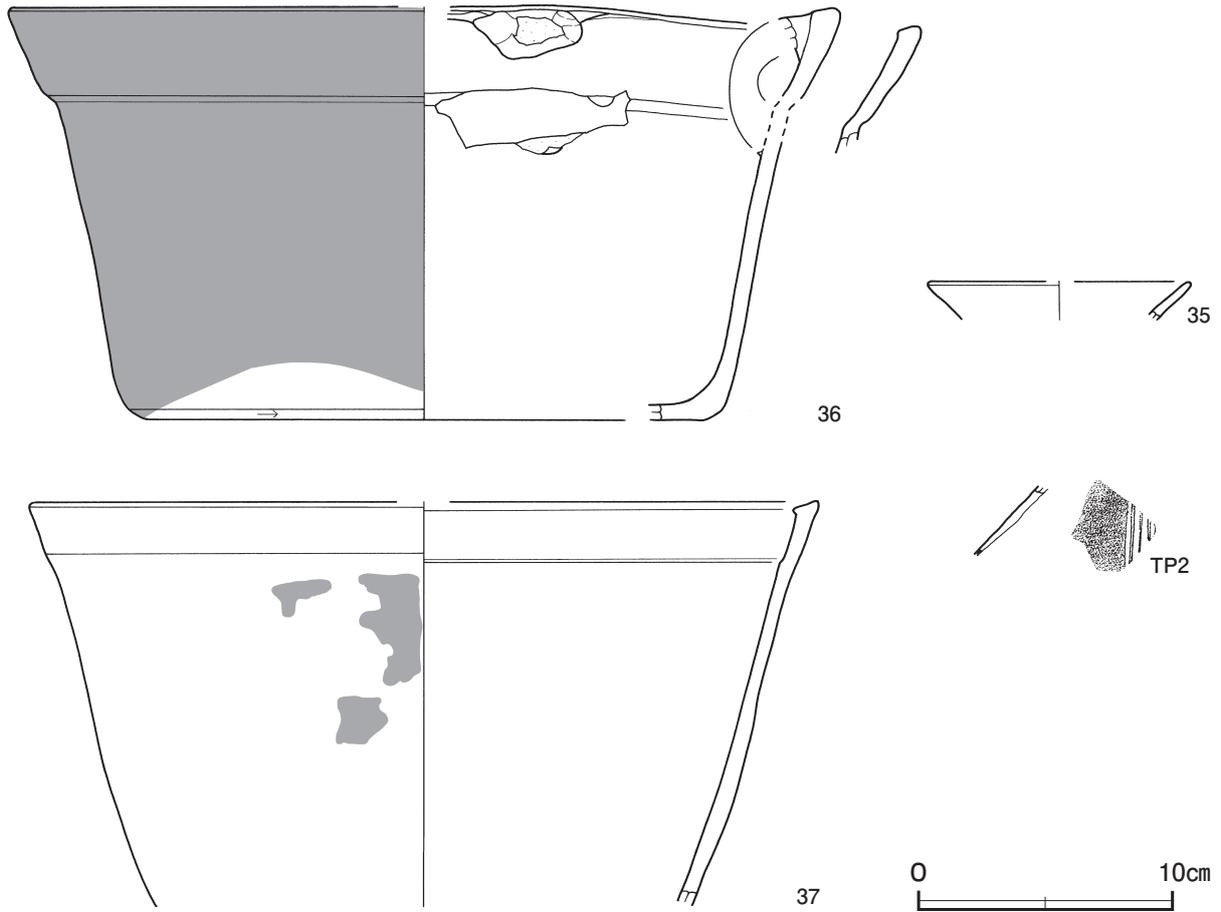
**所見** 時期は, 出土土器から15世紀代と考えられる。不定形の浅い掘り込みは, 井戸の周囲の一部を一段掘り下げたもので, 井戸に伴う施設と考えられる。



第17図 第3号井戸跡実測図

### 第3号井戸跡出土遺物観察表 (第18図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
35	土師質土器	皿	[10.4]	(1.6)	-	長石・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	外・内面口クロナデ	覆土中	5%
36	土師質土器	内耳鍋	[32.5]	16.4	[22.0]	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外・内面ナデ 底部下端ヘラ削り 外面煤付着	覆土上層	30% PL 7
37	土師質土器	内耳鍋	[31.0]	(16.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	外面煤付着	覆土上層	5%
番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考				
TP2	土師質土器	播鉢	長石・石英・細礫	にぶい黄橙	播目4条残存 外面剥離	覆土上層					

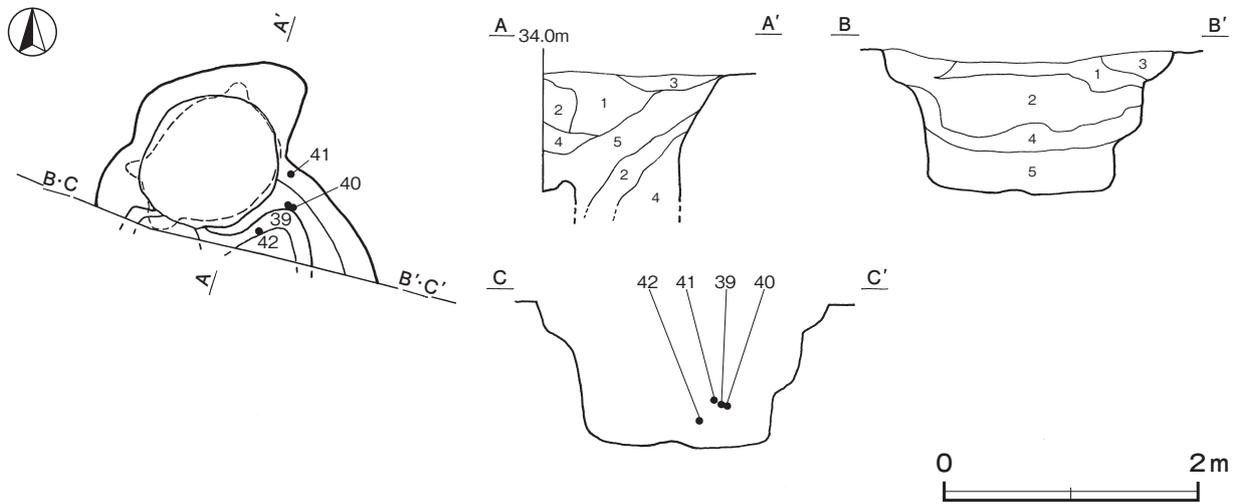


第18図 第3号井戸跡出土遺物実測図

第4号井戸跡 (第19・20図)

位置 調査区中央部のD 5h4区, 標高34mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.13m, 短径1.03mの円形である。円筒状に掘り込まれており, 深さ100cmで湧水を確認したため以下の調査を断念した。南東部に東西軸60cm以上, 南北軸48cm以上で, 深さ90cmの長方形と推定できる掘り込みを確認した。



第19図 第4号井戸跡実測図

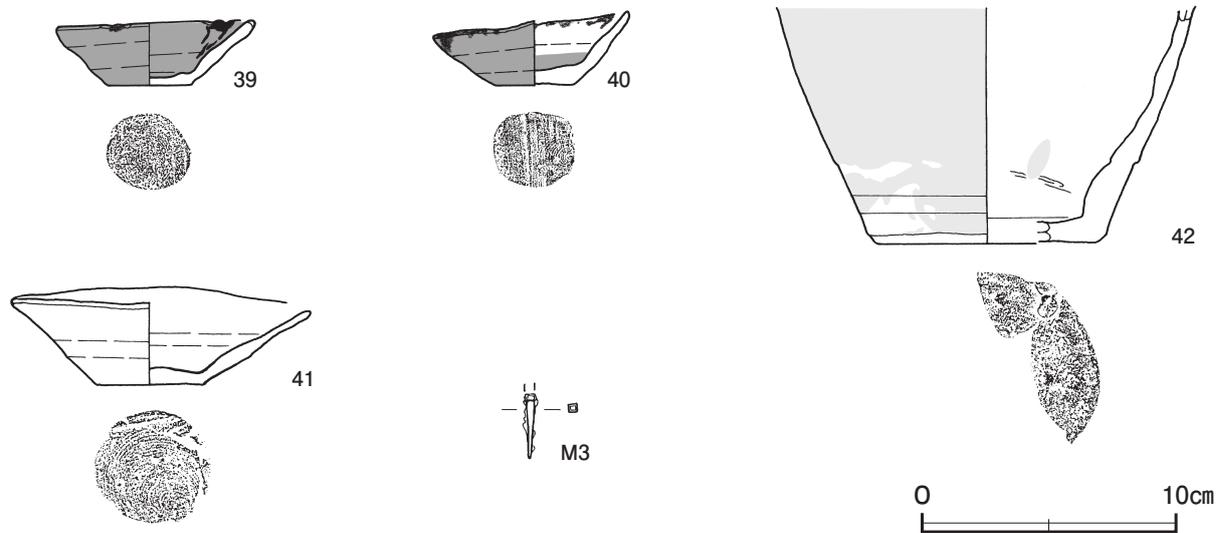
**覆土** 5層に分層できる。ロームブロック，焼土粒子，炭化粒子が不規則に混じる堆積状況から，埋め戻されている。

**土層解説**

- |       |              |       |                  |
|-------|--------------|-------|------------------|
| 1 褐色  | ローム粒子・粘土粒子少量 | 4 褐色  | ロームブロック中量，焼土粒子微量 |
| 2 黒色  | ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 灰褐色 | ローム粒子少量          |
| 3 黒褐色 | ローム粒子微量      |       |                  |

**遺物出土状況** 土師質土器片6点（小皿2，皿1，内耳鍋3），瓦質土器片1点（内耳鍋），陶器片1点（瓶子），鉄製品1点（釘）が出土している。39～42は，深さ80～100cmの南東部の覆土下層から出土している。

**所見** 時期は，出土土器から15世紀後半と考えられる。南東側の掘り込みは，井戸の周囲の一部を一段掘り下げたもので，井戸に伴う施設と考えられる。



第20図 第4号井戸跡出土遺物実測図

第4号井戸跡出土遺物観察表（第20図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
39	土師質土器	小皿	7.6	2.6	3.3	長石・石英・雲母	灰黄	普通	底部回転糸切り 板目状圧痕 外・内面煤附着 口縁部油煙附着 灯明皿	覆土下層	100% PL 7
40	土師質土器	小皿	7.7	3.0	3.1	長石・石英	黒褐	普通	底部回転糸切り 板目状圧痕 外・内面煤附着 口縁部油煙附着 灯明皿	覆土下層	100% PL 7
41	土師質土器	皿	11.7	3.9	4.3	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	外・内面クロナデ 底部回転糸切り	覆土下層	95% PL 7
42	陶器	瓶子	-	(9.4)	[8.6]	にぶい黄橙・オリブ黄	良好	灰釉	釉は漬け掛け 文様・特徴	瀬戸・美濃系, 15世紀	覆土下層 5% PL 8
M3	釘		(2.60)	0.35	0.35	(0.6)	鉄	断面方形	頭部・上半部欠損	覆土中	PL10

第5号井戸跡（第21図）

**位置** 調査区中央部のD5g4区，標高34mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 径1.50mの円形で，円筒状に掘り込まれている。確認面から深さ90cmで湧水が確認され，102cmまで掘り下げた時点で調査を断念した。南西側に，長軸1.38m，短軸0.89mで，深さ10～20cmの隅丸長方形の掘り込みを確認した。

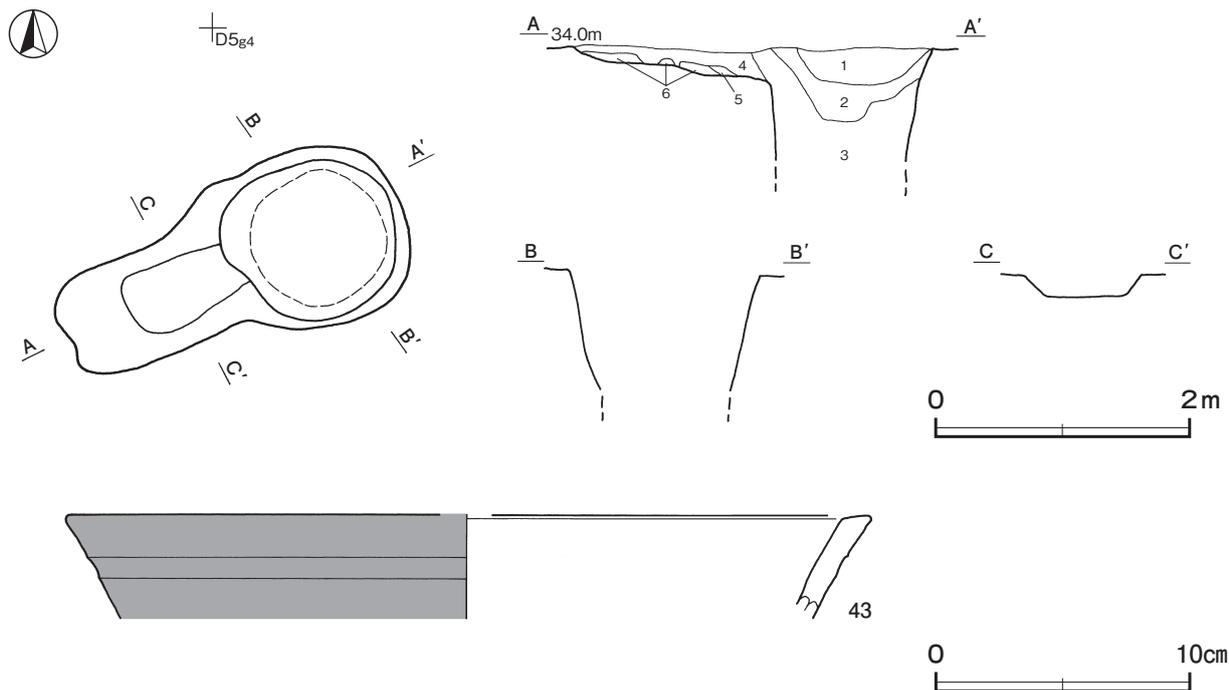
**覆土** 6層に分層できる。周囲から土砂が流れ込んだ様相から、自然堆積である。

**土層解説**

- |         |           |       |           |
|---------|-----------|-------|-----------|
| 1 濃い黄褐色 | ローム粒子微量   | 4 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色   | ローム粒子少量   | 5 暗褐色 | ローム粒子少量   |
| 3 黒褐色   | ロームブロック中量 | 6 褐色  | ロームブロック多量 |

**遺物出土状況** 土師質土器片2点（内耳鍋）が出土している。43は覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から中世と考えられる。南西側の掘り込みは、井戸の周囲の一部を一段掘り下げた井戸に伴う施設と考えられる。

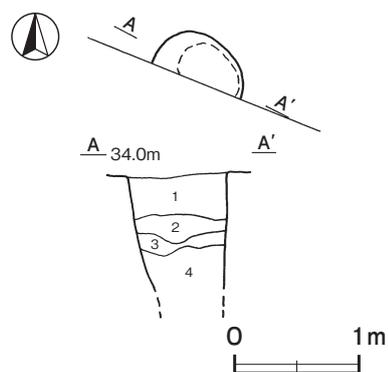


第21図 第5号井戸跡・出土遺物実測図

第5号井戸跡出土遺物観察表（第21図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
43	土師質土器	内耳鍋	[31.8]	(41)	-	長石・石英・雲母・細礫	にぶい橙	普通	外・内面ナデ 外面煤付着	覆土中	5%

第6号井戸跡（第22図）



**位置** 調査区中央部のD5g2区、標高34mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 南西部が調査区域外へ延びているため、長径0.78mで、短径は0.39mしか確認できなかった。円形と推定され、確認できた部分では円筒状に掘り込まれている。深さ82cmで湧水が確認され、98cmまで掘り下げた時点で調査を断念した。

**覆土** 4層に分層できる。周囲から土砂が流れ込んだ堆積状況から、自然堆積である。

第22図 第6号井戸跡実測図

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量

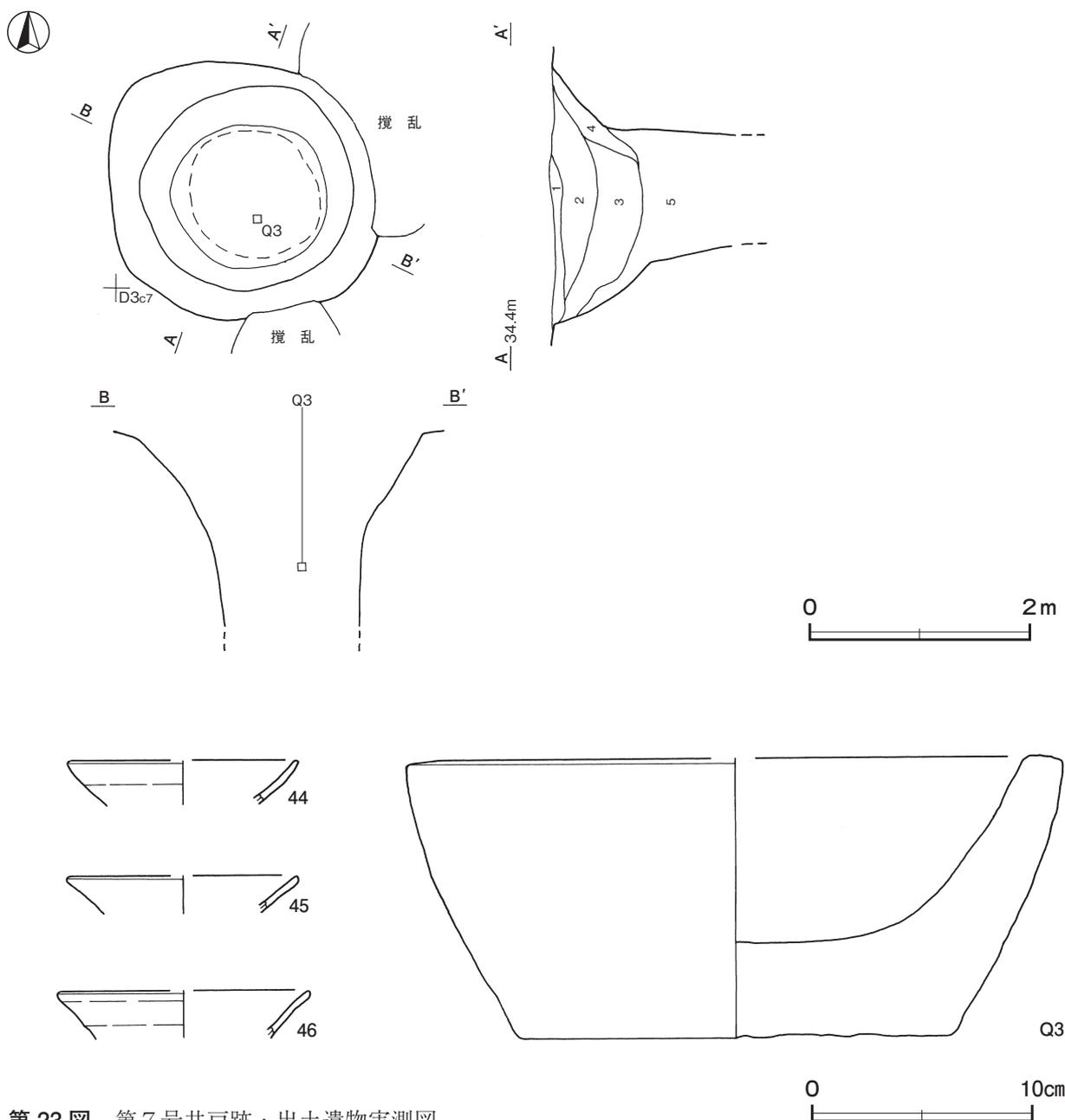
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ローム粒子・鹿沼パミス粒子微量

所見 黒褐色土を主体とした覆土が、近接した第8号井戸跡の覆土と類似しており、同時期に埋没した可能性があることから、時期は中世と考えられる。

第7号井戸跡 (第23図)

位置 調査区西部のD3b7区、標高34mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径2.69m、短径2.38mの楕円形で、長径方向はN-56°-Wである。北東部と南部が攪乱を受けている。確認面から深さ100cmまでは傾斜し、その下部は径1.36mの円筒状となる漏斗状である。深さ180cmまで調査を行ったが崩落の危険があるため以下の調査を断念した。湧水はさらに低いと予想される。



第23図 第7号井戸跡・出土遺物実測図

**覆土** 5層に分層できる。周囲から土砂が流れ込んだ様相から、自然堆積である。

**土層解説**

- |       |           |       |           |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量 | 4 褐色  | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量   | 5 灰褐色 | ローム粒子少量   |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 |       |           |

**遺物出土状況** 土師質土器片7点（小皿2，皿3，内耳鍋2），石器1点（鉢）が出土している。44～46は覆土中から，Q3は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は，出土土器から15世紀代と考えられる。

**第7号井戸跡出土遺物観察表（第23図）**

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
44	土師質土器	皿	[10.2]	(2.0)	-	長石・石英	浅黄	普通	外・内面ロクロナデ	覆土中	5%
45	土師質土器	皿	[10.4]	(1.7)	-	長石	にぶい黄橙	普通	外・内面ロクロナデ	覆土中	5%
46	土師質土器	皿	[11.2]	(2.2)	-	長石・石英・黒色粒子・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外・内面ロクロナデ	覆土中	5%

番号	器種	口径	器高	底径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q3	鉢	[29.6]	12.8	[19.7]	(2000.7)	安山岩	内面播痕有	覆土中層	PL10

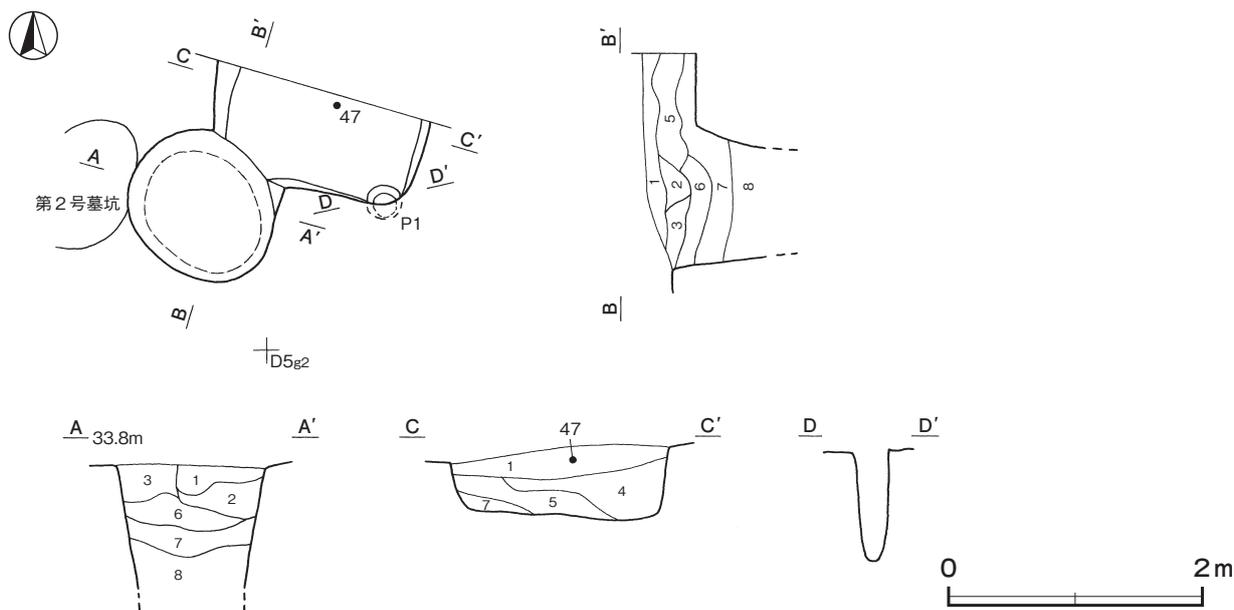
**第8号井戸跡（第24・25図）**

**位置** 調査区中央部のD5fl区，標高34mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第2号墓坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径1.24m，短径1.04mの楕円形で，長径方向はN-39°-Wである。円筒状に掘り込まれており，深さ106cmで湧水を確認したため，以下の調査を断念した。北東側には，東西軸1.74m，残存している南北軸は0.81mで，深さ56cmの方形と推定できる掘り込みを確認した。

**ピット** 径28cm，深さ38cmで，北東側の掘り込みの南東部に確認できた。



**第24図** 第8号井戸跡実測図

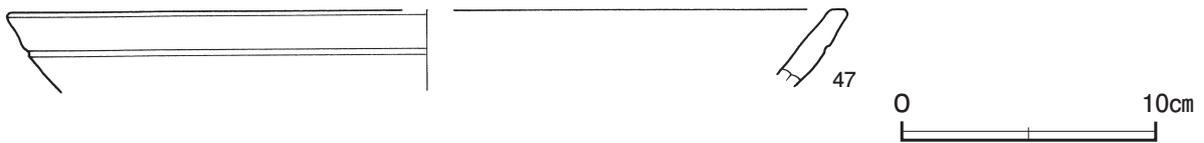
**覆土** 8層に分層できる。ロームブロックが不規則に混じっている堆積状況から、埋め戻されている。

**土層解説**

- |        |                    |       |           |
|--------|--------------------|-------|-----------|
| 1 暗褐色  | ローム粒子・炭化粒子・骨粉微量    | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子少量            | 6 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色  | ローム粒子・骨粉少量, 炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子少量   |
| 4 暗褐色  | ロームブロック少量          | 8 黒褐色 | ロームブロック微量 |

**遺物出土状況** 土師質土器片4点(内耳鍋)が出土している。47は北東部の覆土上層から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から中世と考えられる。北東部の掘り込みは、井戸の周囲の一部を一段掘り下げたもので、井戸に伴う施設と考えられる。なお、覆土上層に骨粉が含まれていたが、墓坑の痕跡は検出できなかった。



第25図 第8号井戸跡出土遺物実測図

第8号井戸跡出土遺物観察表(第25図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
47	土師質土器	内耳鍋	[33.0]	(3.2)	-	長石・石英・雲母	淡黄	普通	外・内面ナデ	覆土上層	5%

第9号井戸跡(第26図)

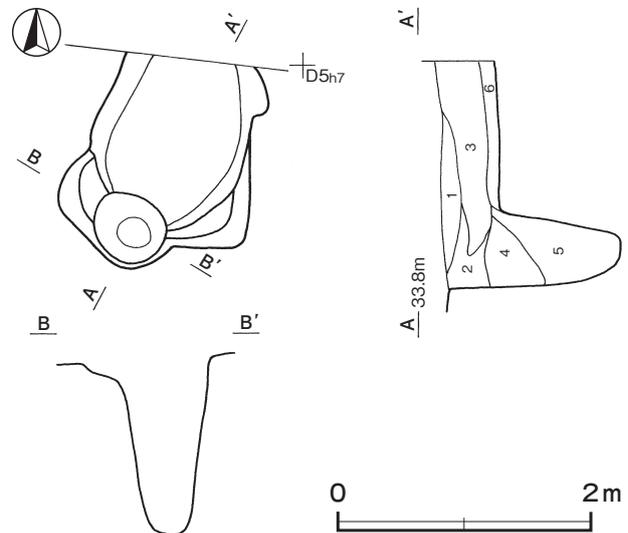
**位置** 調査区東部のD5h6区、標高34mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 径0.70mの円形である。円筒状に掘り込まれており、深さ138cmで、底面は平坦である。北東側には、東西軸1.24m、残存している南北軸1.70mで、深さ50cmほどの方形と推定できる掘り込みを確認した。

**覆土** 6層に分層できる。ロームブロックが不規則に混じっている堆積状況から、埋め戻されている。

**土層解説**

- |         |           |
|---------|-----------|
| 1 褐色    | ローム粒子少量   |
| 2 暗褐色   | ロームブロック少量 |
| 3 明褐色   | ロームブロック中量 |
| 4 黒色    | ロームブロック微量 |
| 5 極暗褐色  | ローム粒子少量   |
| 6 にぶい褐色 | ローム粒子中量   |



第26図 第9号井戸跡実測図

**遺物出土状況** 土師質土器片4点(小皿)が出土している。その他に流れ込んだ縄文土器片1点、弥生土器片1点、土師器片2点が出土している。土師質土器片は細片のため、図示できなかった。

**所見** 第8・10号井戸跡と同様の掘り込みがあり、形状が類似していることから、時期は中世と考えられる。北東部の掘り込みは、井戸の周囲の一部を一段掘り下げているもので、井戸に伴う施設と考えられる。

### 第10号井戸跡 (第27図)

**位置** 調査区中央部のD 4e7区, 標高34mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 径0.76mほどの円形である。円筒状に掘り込まれており, 深さ97cmで, 底面は平坦である。東側に, 東西軸1.17m, 残存している南北軸1.11mで, 深さ40cmほどの方形と推定できる掘り込みと, 南西側に, 長さ1.04m, 幅0.30mで, 深さ30cmほどの溝状の掘り込みを確認した。

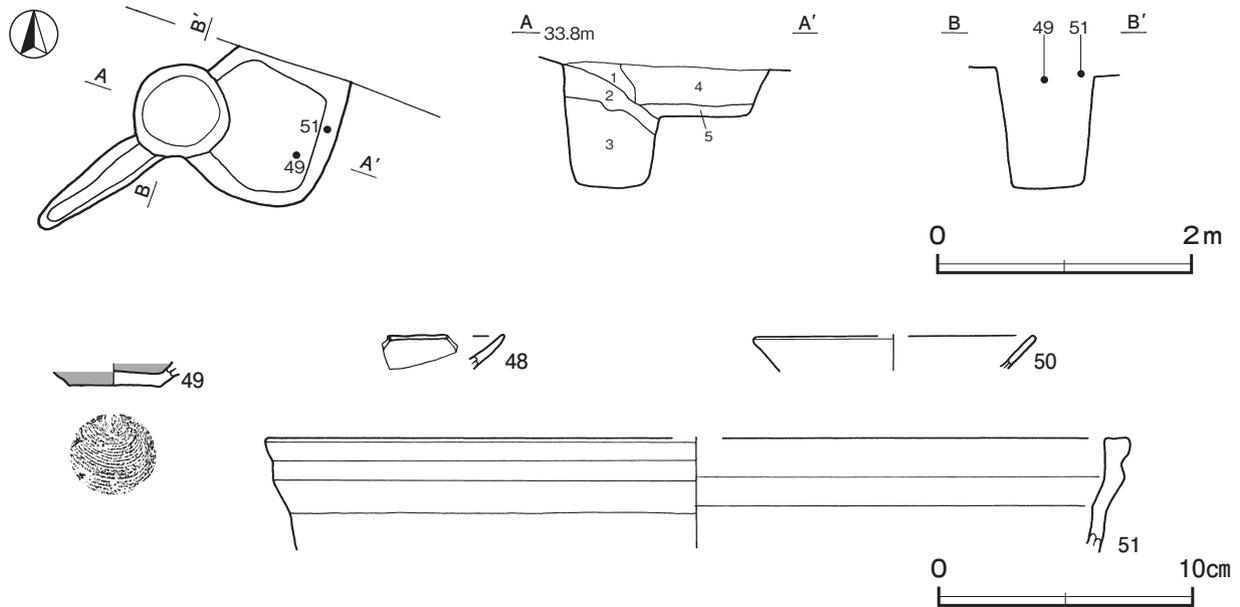
**覆土** 5層に分層できる。ロームブロックが不規則に混じっている堆積状況から, 埋め戻されている。

**土層解説**

- |        |           |       |           |
|--------|-----------|-------|-----------|
| 1 黒褐色  | ローム粒子微量   | 4 暗褐色 | ローム粒子少量   |
| 2 黒色   | ローム粒子微量   | 5 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック少量 |       |           |

**遺物出土状況** 土師質土器片7点(小皿1, 皿2, 内耳鍋4)が出土している。その他に流れ込んだ土師器片1点が出土している。48・50は覆土中から, 49・51は方形の掘り込みの覆土上層からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は, 出土土器から15世紀代と考えられる。北東部の掘り込みは, 井戸の周囲の一部を一段掘り下げているもので, 井戸に伴う施設と考えられる。



第27図 第10号井戸跡・出土遺物実測図

第10号井戸跡出土遺物観察表 (第27図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
48	土師質土器	小皿	-	(14)	-	長石・雲母	黄橙	普通	外・内面ロクロナデ	覆土中	5%
49	土師質土器	小皿	-	(0.9)	3.6	長石・石英	にぶい黄	普通	底部回転糸切り 底部内面油煙付着 外・内面煤付着	覆土上層	30%
50	土師質土器	皿	[11.0]	(1.3)	-	長石・石英	浅黄橙	普通	外・内面ロクロナデ	覆土中	5%
51	土師質土器	内耳鍋	[33.7]	(4.5)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	外・内面ナデ	覆土上層	5%

表3 中世の井戸跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		断面形状	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	D 5 i0	-	円形	2.08 × 1.93	(116)	漏斗状	-	自然	土師質土器	
2	D 5 i9	N - 34° - W	楕円形	1.30 × 1.02	(93)	円筒状	-	人為	土師質土器, 釘	
3	D 5 h6	-	円形	0.81 × 0.81	177	円筒状	平坦	自然	土師質土器, 瓦質土器	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		断面形状	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
4	D 5 h4	-	円形	1.13 × 1.03	(100)	円筒状	-	人為	土師質土器, 陶器, 釘	
5	D 5 g4	-	円形	1.50 × 1.50	(102)	円筒状	-	自然	土師質土器	
6	D 5 g2	-	[円形]	0.78 × (0.39)	(98)	円筒状	-	自然		
7	D 3 b7	N - 56° - W	楕円形	2.69 × 2.38	(180)	漏斗状	-	自然	土師質土器, 石器	
8	D 5 f1	N - 39° - W	楕円形	1.24 × 1.04	(106)	円筒状	-	人為	土師質土器	第2号墓坑→本跡
9	D 5 h6	-	円形	0.70 × 0.70	138	円筒状	平坦	人為	土師質土器	
10	D 4 e7	-	円形	0.77 × 0.76	97	円筒状	平坦	人為	土師質土器	

#### (4) 炉跡

##### 第1号炉跡 (第28図)

**位置** 調査区中央部のD 4 e6区, 標高34mの台地平坦部に位置している。

**確認状況** 遺構確認面で, 炉床面がほぼ露出した状態で, 第2号炉跡とともに確認した。

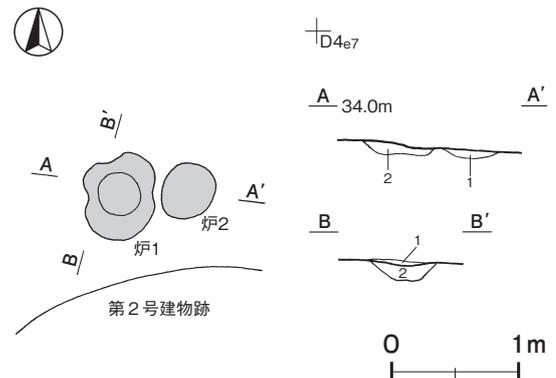
**規模と形状** 長径0.71m, 短径0.58mの不整楕円形で, 長径方向はN - 22° - Eである。炉床部は, 床面を17cm掘りくぼめた部分に焼土を埋土して構築されている。炉床面は平坦で, 火を受けて赤変色している。

**覆土** 単一層である。層厚が薄く堆積状況は不明である。第2層は, 炉床面の構築土である。

##### 土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量

**所見** 第2号建物跡に近接しており, 関連する施設の可能性があることから, 時期は15世紀代と考えられる。



第28図 第1・2号炉跡実測図

##### 第2号炉跡 (第28図)

**位置** 調査区中央部のD 4 e6区, 標高34mの台地平坦部に位置している。

**確認状況** 遺構確認面で, 炉床面が露出した状態で, 第1号炉跡とともに確認した。

**規模と形状** 長径0.46m, 短径0.40mの楕円形で, 長径方向はN - 31° - Eである。炉床部は, 床面を6cm掘りくぼめた部分に焼土を埋土して構築されている。炉床面は平坦で, 火を受けて赤変色している。

**覆土** 覆土は確認できなかった。第1層は, 炉床面の構築土である。

##### 土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子多量, 炭化粒子微量

**所見** 第2号建物跡に近接しており, 関連する施設の可能性があることから, 時期は15世紀代と考えられる。

表4 炉跡一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長軸×短軸 (m)	深さ (cm)					
1	D 4 e6	N - 22° - E	不整楕円形	0.71 × 0.58	2	平坦	-	不明		
2	D 4 e6	N - 31° - E	楕円形	0.46 × 0.40	-	平坦	-	-		

(5) 墓坑

覆土に骨片や骨粉を含む土坑や、副葬品とみられる銭貨が出土した土坑を墓坑としてとらえた。以下、遺構と遺物について記述する。

第1号墓坑 (SK11) (第29図)

**位置** 調査区西部のD3b2区、標高34mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長軸1.11m、短軸0.59mの長方形で、長軸方向はN-44°-Wである。深さは15cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 2層に分層できる。ローム粒子が混じる不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

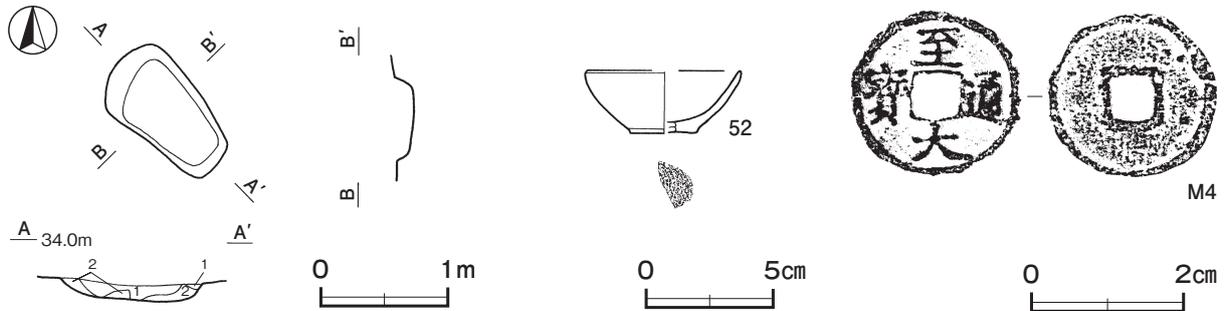
土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量

2 褐色 ローム粒子中量

**遺物出土状況** 土師質土器片1点(小皿)、銭貨1枚が出土している。52・M4は、覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から15世紀以降と考えられる。



第29図 第1号墓坑・出土遺物実測図

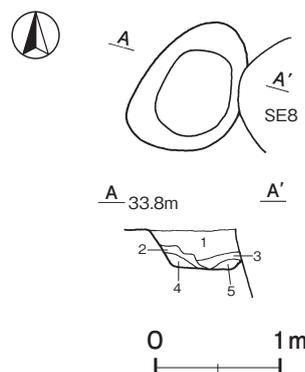
第1号墓坑出土遺物観察表 (第29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
52	土師質土器	小皿	[6.2]	2.5	[2.6]	長石・石英	にぶい橙	普通	外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土中	15% PL 7

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
M4	至大通寶	2.24	0.58	0.16	2.35	1310	銅	真書	覆土中	PL10

第2号墓坑 (SK13) (第30図)



**位置** 調査区中央部のD5f1区、標高34mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第8号井戸に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径1.15m、短径0.82mの楕円形で、長径方向はN-32°-Eである。深さは32cmで、底面は平坦である。壁は、なだらかに立ち上がっている。

**覆土** 5層に分層できる。ロームブロックや骨粉が混じる不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

第30図 第2号墓坑実測図

**土層解説**

- |        |               |       |           |
|--------|---------------|-------|-----------|
| 1 暗褐色  | ローム粒子少量, 骨粉微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 褐色   | ロームブロック中量     | 5 褐色  | ローム粒子中量   |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子少量       |       |           |

**遺物出土状況** 覆土の第1層に骨粉が含まれていたが、微細なため図示できなかった。

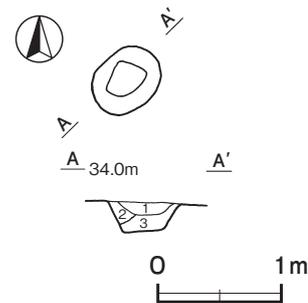
**所見** 時期は、重複関係から中世以降と考えられる。

**第3号墓坑 (SK15) (第31図)**

**位置** 調査区中央部のD 4 e4区, 標高34mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長径0.59m, 短径0.46mの楕円形で, 長径方向はN-42°-Eである。深さは27cmで, 底面は平坦である。壁は, ならかに立ち上がっている。

**覆土** 3層に分層できる。ローム粒子や骨片が混じる不規則な堆積状況から, 埋め戻されている。



第31図 第3号墓坑実測図

**土層解説**

- |       |                       |
|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・骨片少量, 炭化粒子・骨粉微量 |
| 2 褐色  | ローム粒子中量               |
| 3 褐色  | ローム粒子多量               |

**遺物出土状況** 覆土の第1層に骨片や骨粉が含まれていたが、微細なため図示できなかった。

**所見** 第5・6号墓坑に近接し, 規模や形状, 覆土が類似していることから, 時期は中世と考えられる。

**第4号墓坑 (SK22) (第32図)**

**位置** 調査区西部のD 3 a4区, 標高34mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第1号建物跡のP1を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径1.27m, 短径0.66mの不整楕円形で, 長径方向はN-75°-Wである。深さは8cmで, 底面は平坦である。壁は, ならかに立ち上がっている。

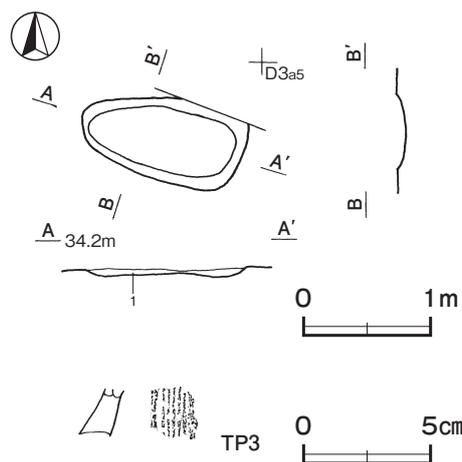
**覆土** 単一層である。層厚が薄い, 骨片や炭化粒子, 焼土粒子が不規則に混じる堆積状況から, 埋め戻されている。

**土層解説**

- |        |                            |
|--------|----------------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子・骨粉少量, 骨片微量 |
|--------|----------------------------|

**遺物出土状況** 土師質土器片1点(播鉢)が覆土中から出土している。覆土の第1層に骨片や骨粉が含まれていたが、微細なため図示できなかった。

**所見** 時期は, 出土土器と重複関係から15世紀後半以降と考えられる。



第32図 第4号墓坑・出土遺物実測図

**第4号墓坑出土遺物観察表 (第32図)**

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP3	土師質土器	播鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	播目6条残存	覆土中	

### 第5号墓坑 (SK27) (第33図)

**位置** 調査区中央部のD 4 e6区, 標高34 mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長径0.55 m, 短径0.32 mの楕円形で, 長径方向はN - 20° - Eである。深さは14cmで, 底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

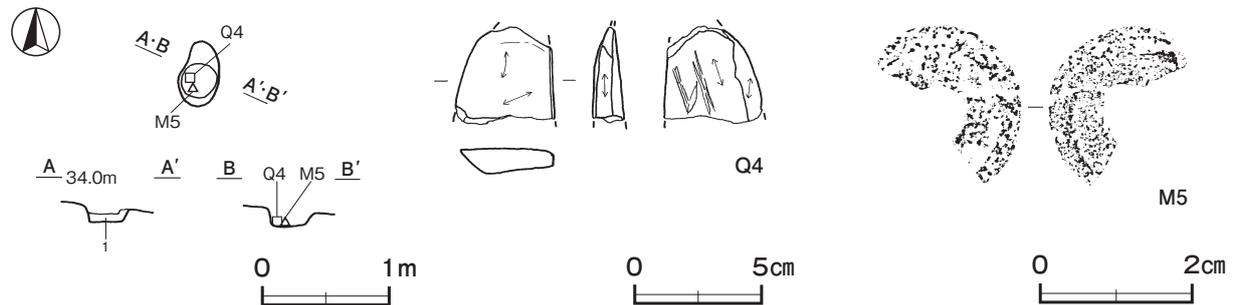
**覆土** 単一層である。層厚が薄い, ローム粒子や骨粉が不規則に混じる堆積状況から, 埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 骨粉微量

**遺物出土状況** 石器1点(砥石), 銭貨1枚が出土している。いずれも, 底面から出土している。

**所見** 時期は, 出土遺物から中世と考えられる。銭貨は埋葬に伴う副葬品と考えられる。



第33図 第5号墓坑・出土遺物実測図

### 第5号墓坑出土遺物観察表 (第33図)

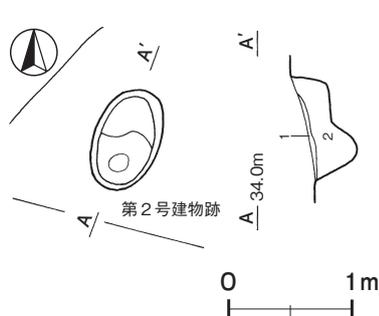
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 4	砥石	(3.8)	3.9	1.3	(20.8)	凝灰岩	砥面4面	底面	PL 9

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
M 5	□□--	2.20	[0.40]	(0.17)	(1.06)	-	銅	紹聖□寶カ	底面	

### 第6号墓坑 (SK30) (第34図)

**位置** 調査区中央部のD 4 e6区, 標高34 mの台地平坦部に位置している。



第34図 第6号墓坑実測図

**重複関係** 第2号建物跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径0.84 m, 短径0.51 mの楕円形で, 長径方向はN - 20° - Eである。底面には段差があり, 北部は深さ28cmで平坦であり, 南部は深さ45cmで皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 2層に分層できる。ロームブロックや骨片等が不規則に混じる堆積状況から, 埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量  
2 極暗褐色 ローム粒子少量, 骨片・骨粉微量

**遺物出土状況** 覆土の第2層に骨片や骨粉が含まれていたが, 微細なため図示できなかった。

**所見** 時期は, 重複関係から15世紀後半以降と考えられる。

**第7号墓坑 (SK33) (第35図)**

**位置** 調査区中央部のD 5 g2区, 標高 34 mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第1号竪穴遺構を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径 0.47 m, 短径 0.33 mの楕円形で, 長径方向はN - 39° - Eである。深さは59cmで, 底面は平坦である。壁は南部が直立しており, その他はなだらかに立ち上がっている。

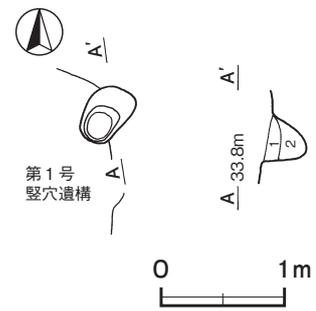
**覆土** 2層に分層できる。ローム粒子や骨粉が不規則に混じる堆積状況から, 埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・骨粉少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子・骨粉微量

**遺物出土状況** 土師質土器片1点(小皿), 銭貨1枚が覆土中から出土しているが, いずれも細片のため図化できなかった。また, 覆土の第1・2層に骨粉が含まれていたが, 微細なため図示できなかった。

**所見** 時期は, 重複関係から15世紀後半以降と考えられる。



第35図 第7号墓坑実測図

**第8号墓坑 (SK34) (第36図)**

**位置** 調査区西部のD 3 b7区, 標高 34 mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 径 0.37 mの円形である。深さは17cmで, 底面は平坦である。壁は, なだらかに立ち上がっている。

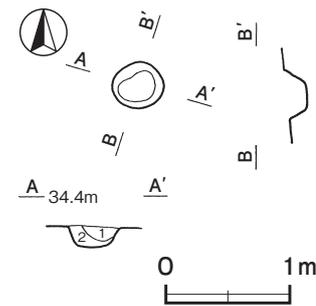
**覆土** 2層に分層できる。ローム粒子, 炭化粒子, 焼土粒子, 骨粉が不規則に混じる堆積状況から, 埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 黒褐色 炭化粒子・骨粉少量, ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 覆土の第1層に骨粉が含まれていたが, 微細なため図示できなかった。

**所見** 西から第10・4・9号墓坑とともに並んでおり, 覆土の状況も類似していることから, 時期は中世と考えられる。



第36図 第8号墓坑実測図

**第9号墓坑 (SK35) (第37図)**

**位置** 調査区西部のD 3 b6区, 標高 34 mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長径 0.32 m, 短径 0.29 mの楕円形で, 長径方向はN - 43° - Eである。深さは40cmで, 底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

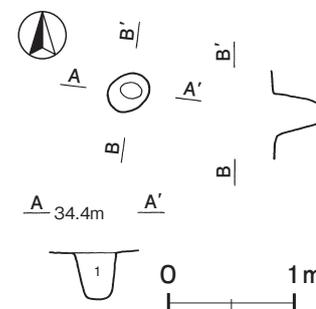
**覆土** 単一層である。ローム粒子や骨粉が不規則に混じる堆積状況から, 埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 黒褐色 炭化粒子少量, ローム粒子・骨粉微量

**遺物出土状況** 覆土の第1層に骨粉が含まれていたが, 微細なため図示できなかった。

**所見** 西から第10・4・8号墓坑とともに並んでおり, 覆土の状況も類似していることから, 時期は中世と考えられる。



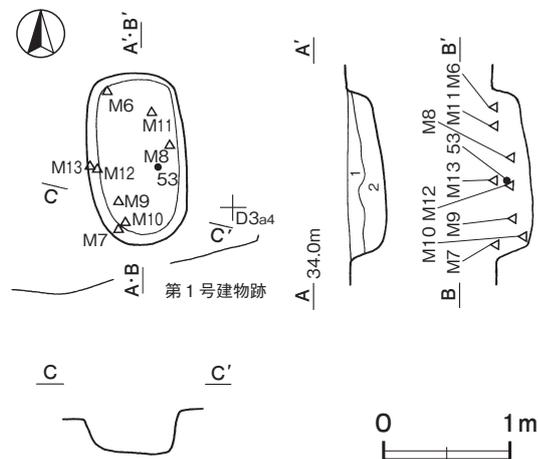
第37図 第9号墓坑実測図

第10号墓坑 (SK42) (第38・39図)

位置 調査区西部のC3j3区、標高34mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号建物跡と同じ標高で確認されたが、新旧関係は不明である。

規模と形状 長径1.38m、短径0.46mの楕円形で、長径方向はN-7°-Wである。深さは30cmで、底面は平坦である。壁は、なだらかに立ち上がっている。



覆土 2層に分層できる。ロームブロックが不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

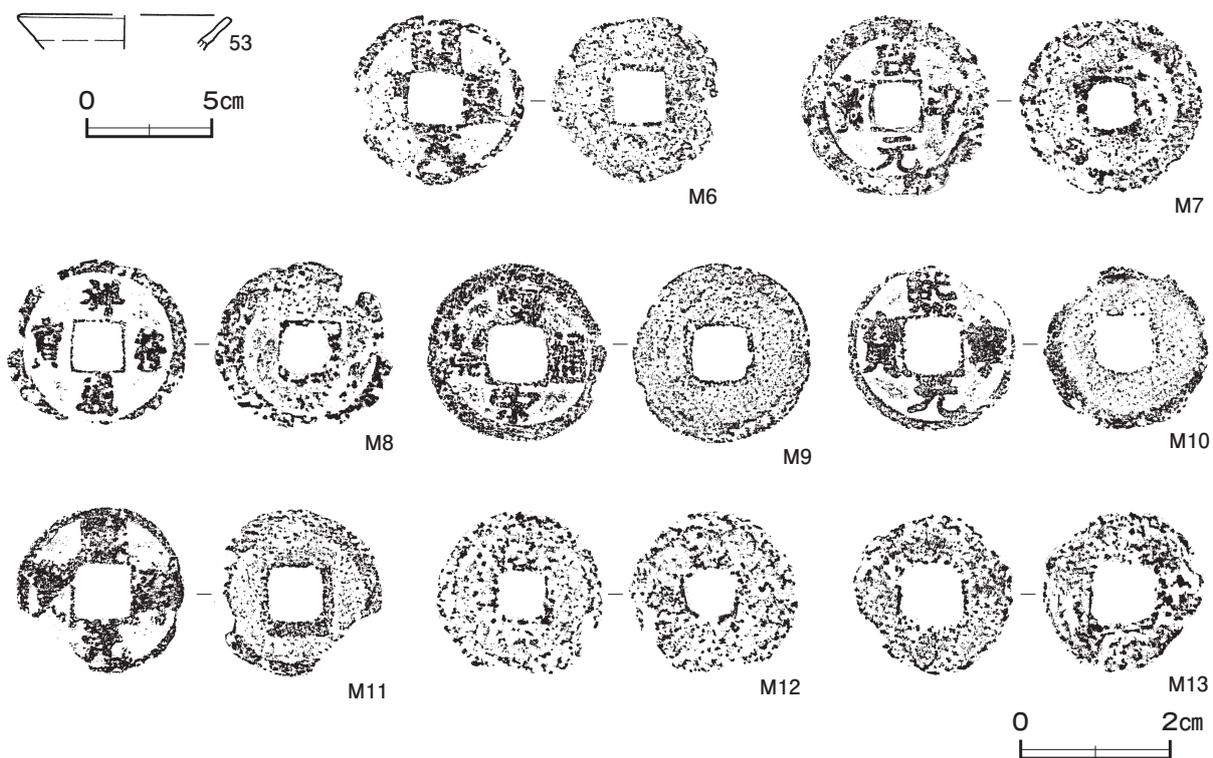
土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、鹿沼パミス粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師質土器片1点(小皿)、銭貨8枚が出土している。M10は覆土下層から、M8・M9・M12は覆土中層から、M6・M7・M11・M13は覆土上層から、53は覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から15世紀後半以降と考えられる。人骨は確認できなかったが、銭貨は埋葬に伴う副葬品とみられ、墓坑と判断した。

第38図 第10号墓坑実測図



第39図 第10号墓坑出土遺物実測図

第10号墓坑出土遺物観察表 (第39図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
53	土師質土器	小皿	[8.4]	(1.4)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外・内面ロクロナデ	覆土中層	5%

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M 6	開元通寶	2.26	0.69	0.15	(1.54)	621	銅	真書	覆土上層	
M 7	咸平元寶	2.45	0.59	0.13	(2.31)	998	銅	真書	覆土上層	PL10
M 8	祥符通寶	2.49	0.64	0.15	(1.98)	1008	銅	真書	覆土中層	PL10
M 9	皇宋通寶	2.42	0.76	0.14	(2.38)	1038	銅	真書	覆土中層	PL10
M 10	熙寧元寶	2.25	0.72	0.12	(1.78)	1068	銅	真書	覆土下層	
M 11	熙寧元寶	2.30	0.70	0.12	(1.71)	1068	銅	真書	覆土上層	PL10
M 12	□□□□	2.28	0.58	0.13	(2.07)	-	銅	表面・背面凹凸なく銭種不明	覆土中層	PL10
M 13	□□□□	2.21	0.81	0.13	(1.27)	-	銅	表面・背面凹凸なく銭種不明	覆土上層	

表5 墓坑一覽表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長軸×短軸 (m)	深さ (cm)					
1	D 3 b2	N - 44° - W	長方形	1.11 × 0.59	15	平坦	外傾	人為	土師質土器, 銭貨	
2	D 5 f1	N - 32° - E	楕円形	1.15 × 0.82	32	平坦	緩斜	人為	骨粉	本跡→SE 8
3	D 4 e4	N - 42° - E	楕円形	0.59 × 0.46	27	平坦	緩斜	人為	骨片, 骨粉	
4	D 3 a4	N - 75° - W	不整楕円形	1.27 × 0.66	8	平坦	緩斜	人為	土師質土器, 骨片, 骨粉	第1号建物跡→本跡
5	D 4 e6	N - 20° - E	楕円形	0.55 × 0.32	14	平坦	外傾	人為	石器, 銭貨, 骨粉	
6	D 4 e6	N - 20° - E	楕円形	0.84 × 0.51	45	有段・皿状	外傾	人為	骨片, 骨粉	第2号建物跡→本跡
7	D 5 g2	N - 39° - E	楕円形	0.47 × 0.33	59	平坦	直立・緩斜	人為	土師質土器, 銭貨, 骨粉	第1号竪穴遺構→本跡
8	D 3 b7	-	円形	0.37 × 0.37	17	平坦	緩斜	人為	骨粉	
9	D 3 b6	N - 43° - E	楕円形	0.32 × 0.29	40	平坦	外傾	人為	骨粉	
10	C 3 j3	N - 7° - W	楕円形	1.38 × 0.46	30	平坦	緩斜	人為	土師質土器, 銭貨	第1号建物跡と新旧不明

(6) 墓坑の可能性のある土坑

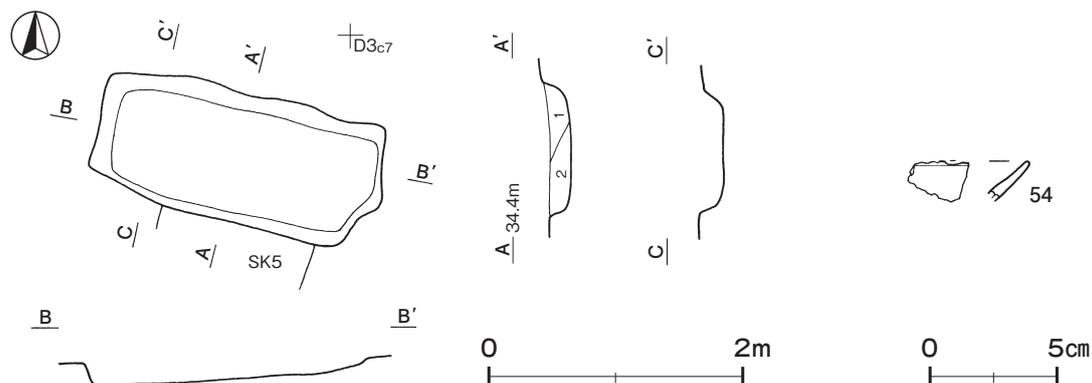
土坑の中で、骨片や副葬品の出土は認められないものの、規模や形状、覆土等から墓坑の可能性のあるものについて、以下に記述する。

第4号土坑 (第40図)

位置 調査区西部のD 3 c6区、標高34mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第5号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.28m、短軸1.04mの長方形で、長軸方向はN - 77° - Wである。深さは17cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。



第40図 第4号土坑・出土遺物実測図

**覆土** 2層に分層できる。ロームブロックが不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 にぶい褐色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 土師質土器片1点（小皿）が覆土中から出土している。

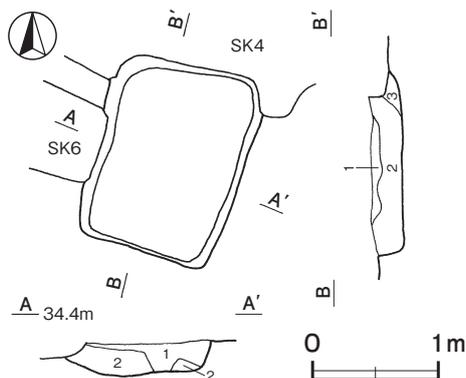
**所見** 時期は、出土土器から中世と考えられる。

第4号土坑出土遺物観察表（第40図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
54	土師質土器	小皿	-	(17)	-	長石・石英	灰白	普通	外・内面ナデ 口縁部剥離	覆土中	5%

**第5号土坑**（第41図）

**位置** 調査区西部のD3c6区、標高34mの台地平坦部に位置している。



**重複関係** 第4・6号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸1.54m、短軸1.20mの長方形で、長軸方向はN-13°-Eである。深さは23cmで、底面は平坦である。壁は、直立している。

**覆土** 3層に分層できる。ロームブロックやローム粒子が混じる不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

**土層解説**

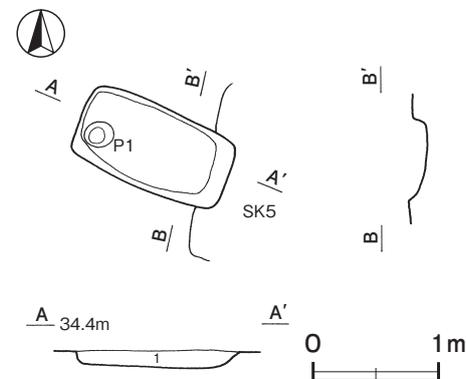
- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 灰褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子少量

第41図 第5号土坑実測図

**所見** 時期は、重複関係から中世と考えられる。

**第6号土坑**（第42図）

**位置** 調査区西部のD3c6区、標高34mの台地平坦部に位置している。



**重複関係** 第5号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸1.10m、短軸0.67mの長方形で、長軸方向はN-67°-Wである。深さは12cmで、底面は平坦である。壁は、直立している。

**ピット** 径23cm、深さ45cmで、西部に確認できた。

**覆土** 単一層である。ローム粒子が不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子微量

第42図 第6号土坑実測図

**所見** 時期は、重複関係から中世と考えられる。

**第8号土坑** (第43図)

**位置** 調査区西部のD3b5区, 標高34mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第5号ピット群のP16に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸1.64m, 短軸0.90mの長方形と推定でき, 長軸方向はN-71°-Wである。深さは17cmで, 底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

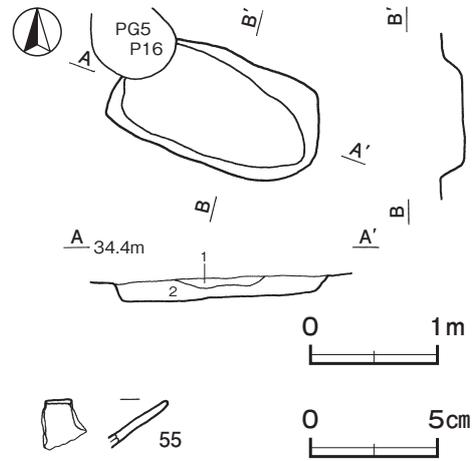
**覆土** 2層に分層できる。ロームブロックやローム粒子が不規則に混じる堆積状況から, 埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 土師質土器片1点(小皿)が覆土中から出土している。

**所見** 時期は, 出土土器から中世と考えられる。



第43図 第8号土坑・出土遺物実測図

第8号土坑出土遺物観察表 (第43図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
55	土師質土器	皿	-	(1.9)	-	長石・雲母	浅黄橙	普通	外・内面ロクロナデ	覆土中	5%

**第9号土坑** (第44図)

**位置** 調査区西部のD3a6区, 標高34mの台地平坦部に位置している。

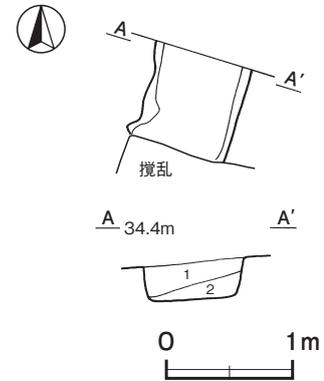
**規模と形状** 北部が調査区域外に延びていることと南部が攪乱を受けているため, 長軸0.74mしか確認できなかった。短軸は0.73mで, 軸の長さから長方形と推定でき, 長軸方向はN-8°-Eである。深さは31cmで, 底面は平坦である。壁は, 直立している。

**覆土** 2層に分層できる。ローム粒子が不規則に混じる堆積状況から, 埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

**所見** 第10号墓坑の東側10mに位置し, 軸線が同じ方向で, 覆土が類似していることから, 時期は中世以降と考えられる。

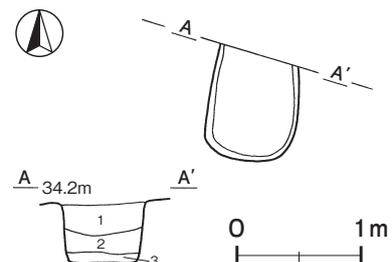


第44図 第9号土坑実測図

**第10号土坑** (第45図)

**位置** 調査区西部のD3a5区, 標高34mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 北部が調査区域外に延びているため長軸は0.89mしか確認できなかった。短軸は0.74mで, 長方形と推定でき, 長軸方向はN-9°-Eである。深さは48cmで, 底面は平坦である。壁は, 直立している。



第45図 第10号土坑実測図

**覆土** 3層に分層できる。ロームブロックやローム粒子が不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

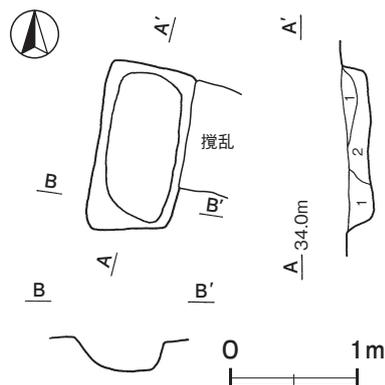
**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

**所見** 第10号墓坑の東側9mに位置し、軸線が同じ方向で、覆土が類似していることから、時期は中世以降と考えられる。

**第12号土坑 (第46図)**

**位置** 調査区西部のD3b2区、標高34mの台地平坦部に位置している。



**規模と形状** 長軸1.31m、短軸0.68mの長方形で、長軸方向はN-14°-Eである。深さは25cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 2層に分層できる。ロームブロックやローム粒子が混じる不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子中量

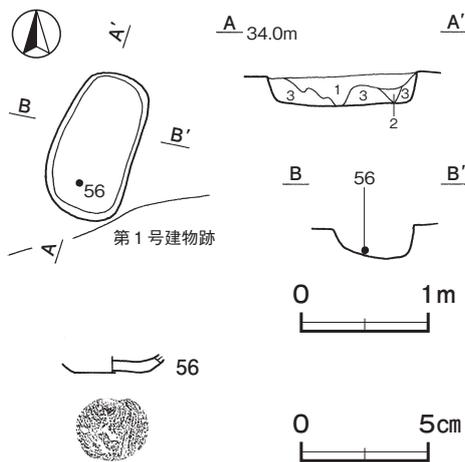
**所見** 第10号墓坑の南側10mに位置し、軸線が同じ方向で、覆土が類似していることから、時期は中世以降と考えられる。

第46図 第12号土坑実測図

**第23号土坑 (第47図)**

**位置** 調査区西部のD3a2区、標高34mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第1号建物跡と同じ標高で確認されているが、新旧関係は不明である。



**規模と形状** 長径1.17m、短径0.64mの楕円形で、長径方向はN-22°-Eである。深さは25cmで、底面は平坦である。東壁は直立し、その他の壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 3層に分層できる。ロームブロックやローム粒子、鹿沼パミスが混じる不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子多量、鹿沼パミスブロック微量

**遺物出土状況** 土師質土器片1点(小皿)が底面から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から中世と考えられる。

第47図 第23号土坑・出土遺物実測図

**第23号土坑出土遺物観察表 (第47図)**

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
56	土師質土器	小皿	-	(0.7)	3.0	長石・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り 底部内面ナデ	底面	20%

表6 墓坑の可能性のある土坑一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長軸×短軸 (m)	深さ (cm)					
4	D 3c6	N - 77° - W	長方形	2.28 × 1.04	17	平坦	外傾	人為	土師質土器	SK 5→本跡
5	D 3c6	N - 13° - E	長方形	1.54 × 1.20	23	平坦	直立	人為		本跡→SK 4・6
6	D 3c6	N - 67° - W	長方形	1.10 × 0.67	12	平坦	直立	人為		SK 5→本跡
8	D 3b5	N - 71° - W	長方形	1.64 × 0.90	17	平坦	外傾	人為	土師質土器	本跡→PG 5
9	D 3a6	N - 8° - E	[長方形]	(0.74) × 0.73	31	平坦	直立	人為		
10	D 3a5	N - 9° - E	[長方形]	(0.89) × 0.74	48	平坦	直立	人為		
12	D 3b2	N - 14° - E	長方形	1.31 × 0.68	25	平坦	外傾	人為		
23	D 3a2	N - 22° - E	楕円形	1.17 × 0.64	25	平坦	外傾・直立	人為	土師質土器	第1号建物跡と 新旧不明

(7) 火葬施設

第1号火葬施設 (SK32) (第48図)

**位置** 調査区東部のD 5h5区, 標高34mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 平面形はT字形で, 主軸方向はN - 111° - Eである。通風溝の規模は, 長さ0.66m, 上幅0.47m, 下幅0.26mである。確認面からの深さは16cmで, 底面は皿状を呈し, 燃烧部に向かって傾斜している。燃烧部は横幅0.95m, 奥行き0.46mの楕円形で, 主軸と直交している。確認面からの深さは23cmで, 底面は中央部が皿状に窪み, 北部と南部はほぼ平坦である。壁は, なだらかに立ち上がっている。

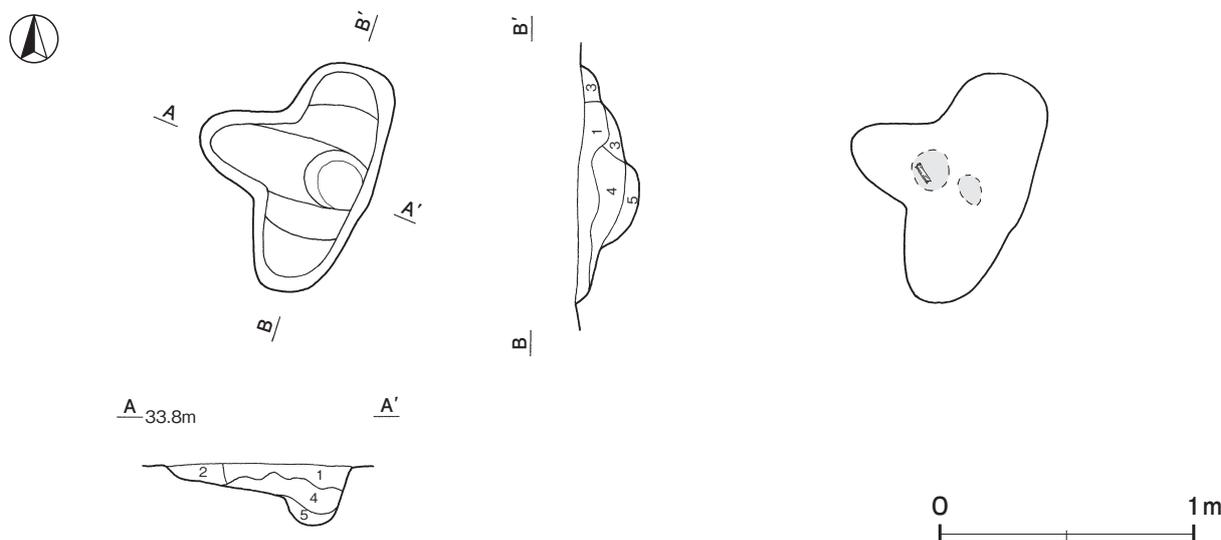
**覆土** 5層に分層できる。焼土粒子や炭化粒子, 骨片が不規則に混じる堆積状況から, 埋め戻されている。

**土層解説**

- |       |                                |       |                              |
|-------|--------------------------------|-------|------------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子少量, 骨粉微量 | 4 黒褐色 | 炭化粒子多量, 焼土ブロック中量, ローム粒子・骨片微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子・骨粉微量        | 5 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量            |
| 3 褐色  | ロームブロック多量                      |       |                              |

**遺物出土状況** 通風溝から骨片, 燃烧室から骨粉が出土している。骨片は17cmほどで部位は確定できなかった。

**所見** T字形の形態と調査区域内に中世の墓坑がみられること, 本跡が葬送にかかわる施設であることから, 時期は中世と考えられる。火葬骨は, 調査区域も含め遺跡の範囲に埋葬されたと推定され, 火葬施設が調査区域外にも存在する可能性がある。



第48図 第1号火葬施設実測図

## 2 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期や性格が明確でない土坑 27 基、溝跡 2 条、ピット群 5 か所を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

### (1) 土坑

時期や性格が明確でない土坑 27 基のうち土坑 4 基については文章と実測図を掲載し、その他の土坑に関しては、規模・形状等を実測図（第 53・54 図）と一覧表で掲載する。

#### 第 7 号土坑（第 49 図）

**位置** 調査区西部の D 5 c5 区、標高 34 m の台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長軸 3.33 m、短軸 1.20 m の不定形で、長軸方向は N - 78° - W である。深さは 22cm で、底面は平坦である。壁は、なだらかに立ち上がっている。南部に径 34cm、深さ 56cm のピット状の掘り込みがある。

**覆土** 2 層に分層できる。ローム粒子が混じる不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

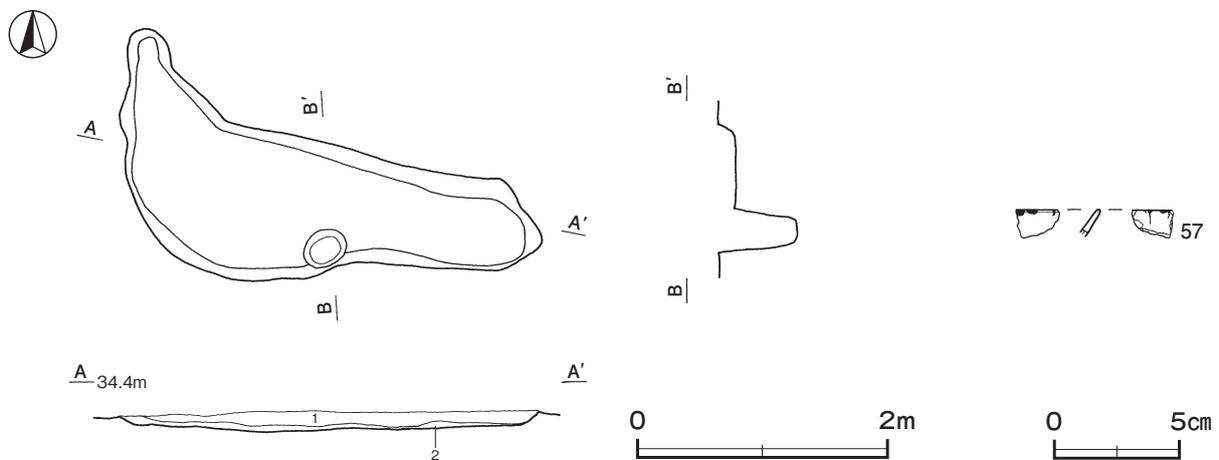
#### 土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

2 褐色 ローム粒子中量

**遺物出土状況** 土師質土器片 1 点（小皿）が覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から中世と考えられるが、性格は不明である。



第 49 図 第 7 号土坑・出土遺物実測図

#### 第 7 号土坑出土遺物観察表（第 49 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
57	土師質土器	小皿	-	(11)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	外・内面ナデ 口縁部油煙付着	覆土中	5%

#### 第 17 号土坑（第 50 図）

**位置** 調査区中央部の D 4 d5 区、標高 34 m の台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長軸 1.79 m、短軸 1.13 m の不定形で、長軸方向は N - 24° - E である。深さは 47cm で、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

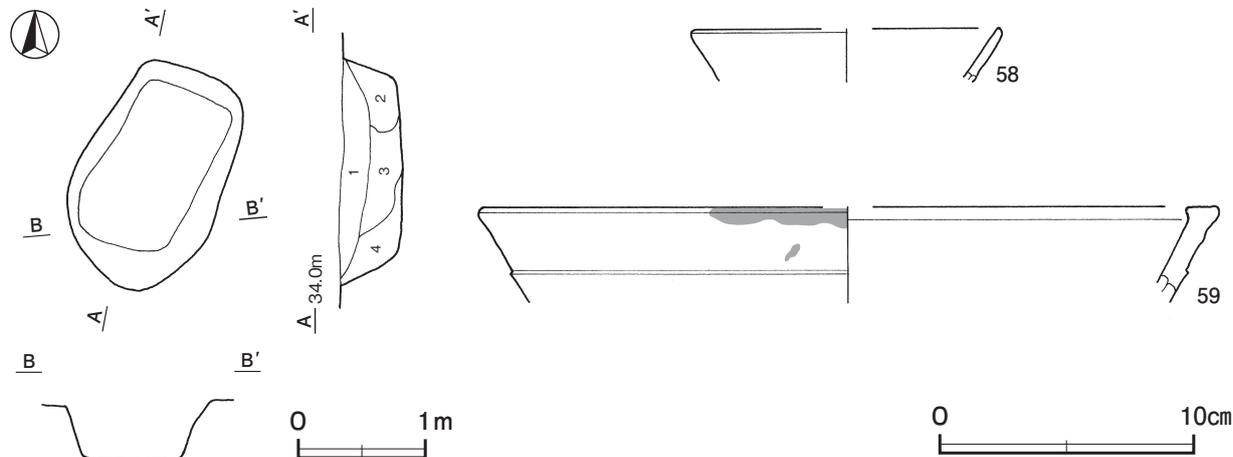
**覆土** 4 層に分層できる。ロームブロックやローム粒子が混じる不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

**土層解説**

- |        |         |       |           |
|--------|---------|-------|-----------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色  | ローム粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |

**遺物出土状況** 土師質土器片 2 点（皿，内耳鍋）が覆土中から出土している。

**所見** 時期は，出土土器から中世と考えられるが，性格は不明である。



第 50 図 第 17 号土坑・出土遺物実測図

第 17 号土坑出土遺物観察表（第 50 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
58	土師質土器	皿	[12.0]	(2.0)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	外・内面口クロナデ	覆土中	5%
59	土師質土器	内耳鍋	[29.0]	(3.8)	-	長石・石英・細礫	明赤褐	普通	外・内面ナデ 口縁部煤付着	覆土中	5%

**第 26 号土坑（第 51 図）**

**位置** 調査区東部の D 5 i 6 区，標高 34 m の台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 南西部が調査区域外へ延びているため，東西軸は 0.88 m で，南北軸は 0.34 m の半円形しか確認できなかった。東西軸方向は N - 73° - W で，楕円形と推定される。深さは 25cm で，底面は皿状である。壁は，なだらかに立ち上がっている。

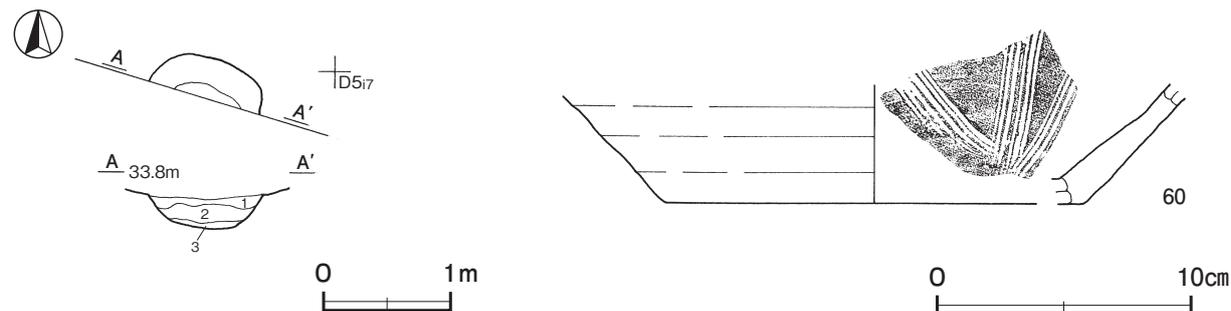
**覆土** 3 層に分層できる。ローム粒子が混じる不規則な堆積状況から，埋め戻されている。

**土層解説**

- |        |         |      |         |
|--------|---------|------|---------|
| 1 暗褐色  | ローム粒子少量 | 3 褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子微量 |      |         |

**遺物出土状況** 陶器片 1 点（播鉢）が覆土中から出土している。

**所見** 時期は，出土土器から中世と考えられるが，性格は不明である。



第 51 図 第 26 号土坑・出土遺物実測図

第 26 号土坑出土遺物観察表 (第 51 図)

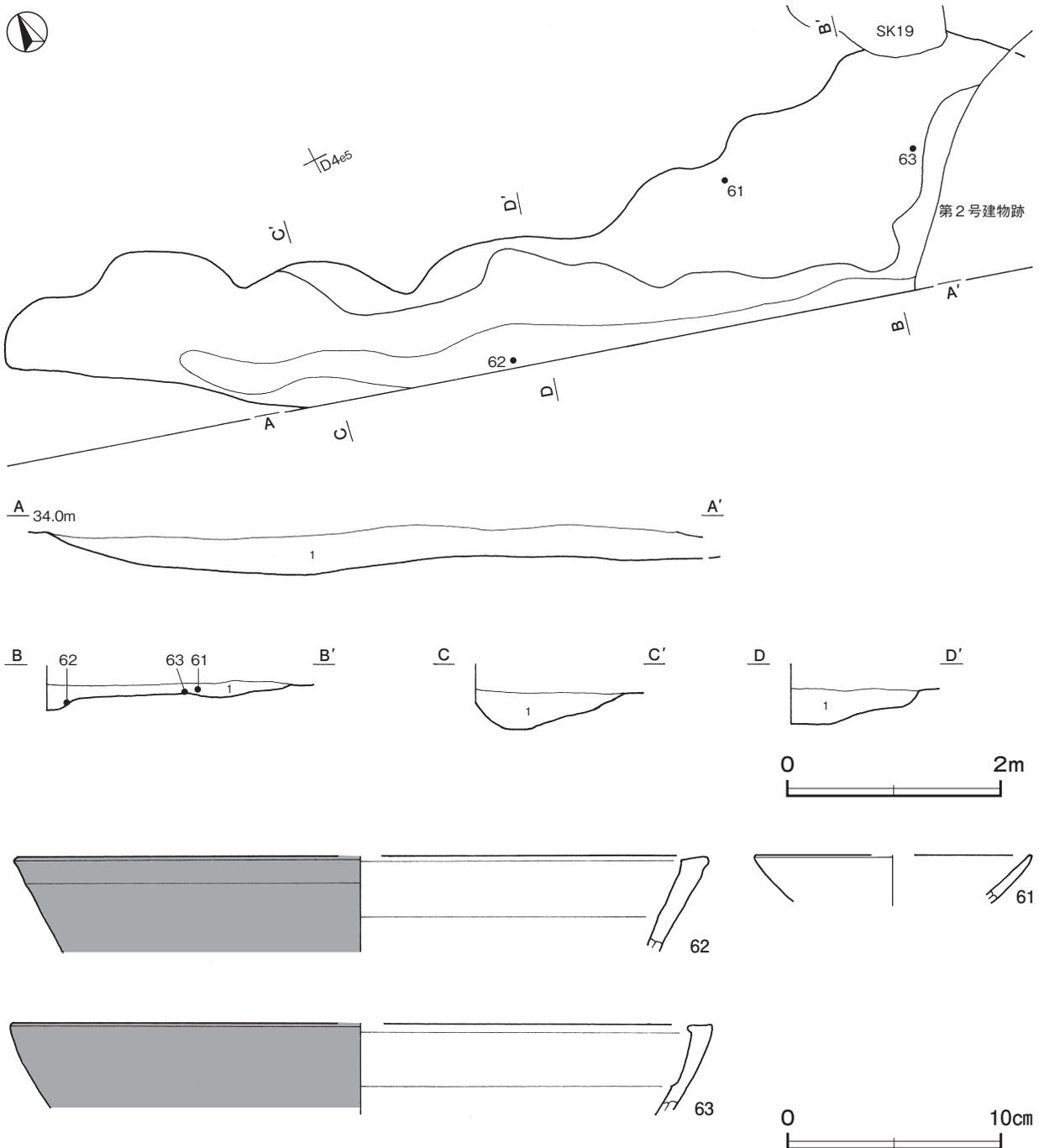
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	焼成	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
60	陶器	播鉢	-	(4.7)	[16.4]	橙・にぶい赤褐	良好	錆釉	6条1単位の播目	瀬戸・美濃系	覆土中	5% PL 8

第 43 号土坑 (SX 1) (第 52 図)

**位置** 調査区東部の D 4 e5 区, 標高 34 m の台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第 2 号建物, 第 19 号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 南部が調査区域外へ延びていることと, 東部が第 2 号建物に掘り込まれているため, 東西軸 8.60 m, 南北軸 2.40 m しか確認できなかった。東西軸方向は N - 73° - W で, 不定形である。深さは 32cm で,



第 52 図 第 43 号土坑・出土遺物実測図

底面はゆるやかな凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。壁は、なだらかに立ち上がっている。

**覆土** 単一層である。ロームブロックが不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

**土層解説**

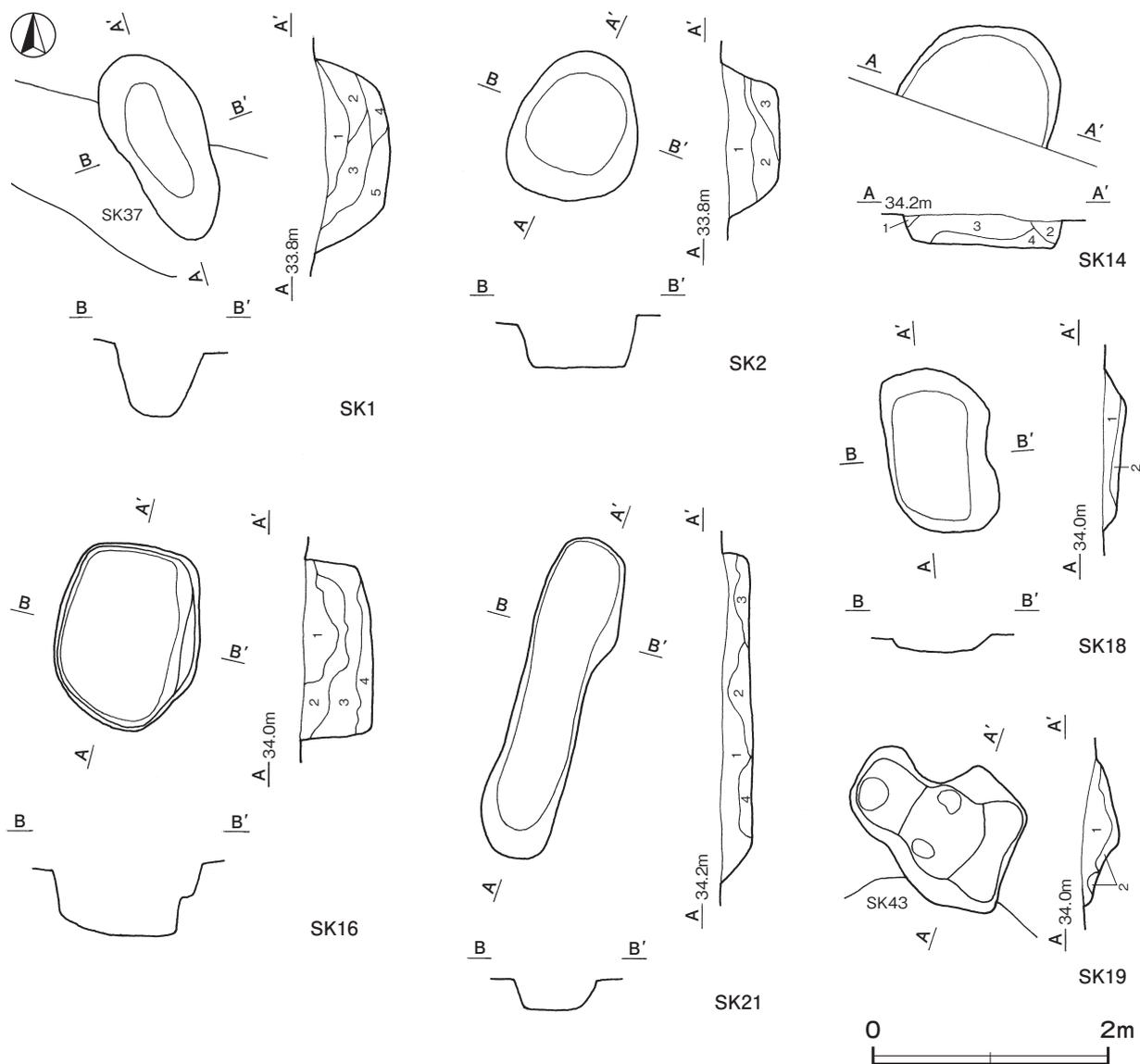
1 にぶい褐色 ロームブロック中量

**遺物出土状況** 土師質土器片 19点（小皿3，皿2，内耳鍋14），瓦質土器片1点（鉢類），鉄製品1点（不明）が出土している。61・63は東部の底面，62は中央部の底面から出土している。

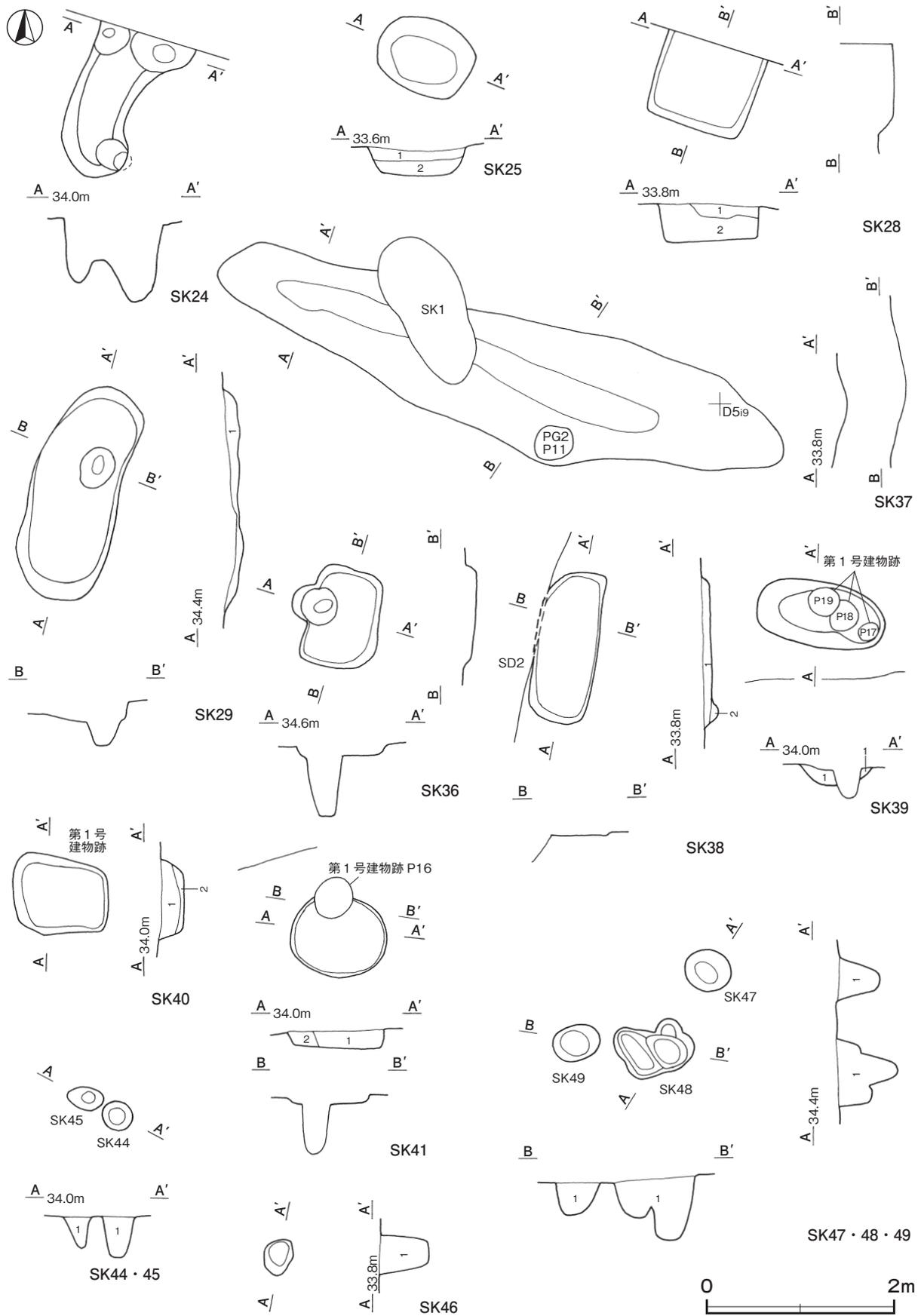
**所見** 時期は，出土土器や重複関係から15世紀代と考えられる。

第43号土坑出土遺物観察表（第52図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
61	土師質土器	皿	[12.8]	(2.3)	-	長石・石英・黒色 粒子・赤色粒子	灰白	普通	外・内面ロロナテ	底面	5%
62	土師質土器	内耳鍋	[32.4]	(4.6)	-	長石・石英・ 雲母・細礫	にぶい黄橙	普通	外・内面ナテ 外面煤付着	底面	5%
63	土師質土器	内耳鍋	[32.8]	(4.3)	-	長石・石英・細礫	明赤褐	普通	外・内面ナテ 外面煤付着	底面	5%



第53図 その他の土坑実測図（1）



第54図 その他の土坑実測図(2)

第1号土坑土層解説

- 1 黒色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 褐色 ローム粒子中量

第2号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック多量
- 3 褐色 ローム粒子少量

第14号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック多量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

第16号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 極暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子微量

第18号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第19号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第21号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ロームブロック多量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

第25号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量

第28号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第29号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量

第38号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量

第39号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量

第40号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量

第41号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量

第44号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量

第45号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量

第46号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量

第47号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量

第48号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量

第49号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量

表7 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	D 5 h8	N - 24° - W	楕円形	1.67 × 0.77	61	平坦	外傾	人為		SK37 →本跡
2	D 5 h6	N - 23° - E	楕円形	1.30 × 1.08	44	外傾	平坦	人為		
7	D 5 c5	N - 78° - W	不定形	3.33 × 1.20	22	平坦	直立・緩斜	人為	土師質土器	
14	D 4 d2	-	[円形]	1.34 × (0.87)	24	平坦	外傾	人為		
16	D 4 d4	N - 15° - E	隅丸長方形	1.56 × 1.21	24 ~ 63	平坦	直立	人為		
17	D 4 d5	N - 24° - E	不定形	1.79 × 1.13	47	平坦	外傾	人為	土師質土器	
18	D 5 e5	N - 7° - W	不整長方形	1.38 × 0.82	17	平坦	緩斜	人為		
19	D 4 e6	N - 25° - E	不定形	1.59 × 1.47	22 ~ 67	凹凸	緩斜	人為		SK43 →本跡
21	D 3 b4	N - 15° - E	不整楕円形	2.80 × 0.56	28	平坦	緩斜	人為		
24	D 4 e7	N - 22° - E	不定形	(1.64) × 1.05	37 ~ 99	凹凸	外傾	人為		
25	D 4 f9	N - 63° - W	楕円形	1.03 × 0.81	31	平坦	緩斜	人為		
26	D 5 i6	N - 73° - W	[楕円形]	0.88 × (0.34)	25	皿状	緩斜	人為	陶器	
28	D 4 e8	N - 19° - E	[長方形]	(0.94) × 1.09	41	平坦	直立	人為		
29	D 3 c5	N - 17° - E	楕円形	2.35 × 0.93	8	皿状	直立・緩斜	人為		

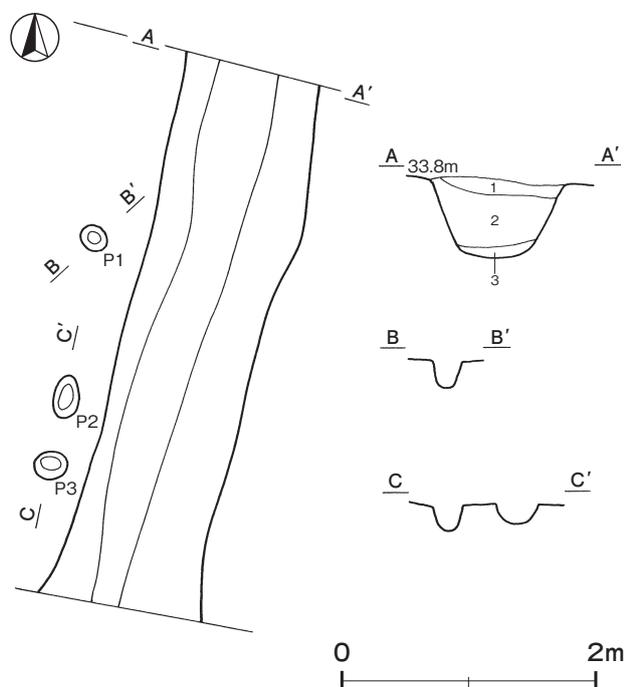
番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
36	D 3 d5	N - 16° - E	不定形	1.21 × 0.94	76	平坦	外傾・緩斜	-		
37	D 5 h8	N - 70° - W	楕円形	6.30 × 1.49	12 ~ 16	皿状	緩斜	-		本跡→SK 1・PG 2
38	D 3 j1	N - 12° - E	楕円形	1.65 × 0.65	9	平坦	緩斜	人為		SD 2と新旧不明
39	D 3 b3	N - 76° - W	楕円形	1.38 × 0.70	37	皿状	緩斜	人為		本跡→第1号建物跡
40	D 3 a3	N - 85° - W	不定形	1.03 × 0.83	24	平坦	緩斜	人為		本跡→第1号建物跡
41	D 3 a3	-	円形	1.01 × 0.94	18	平坦	外傾・緩斜	人為		本跡→第1号建物跡
43	D 4 e5	N - 73° - W	不定形	(8.60 × 2.40)	32	平坦	緩斜	人為	土師質土器	本跡→第2号建物跡・SK19
44	D 4 e6	-	円形	0.32 × 0.30	47	皿状	外傾	人為		
45	D 4 d6	N - 85° - W	楕円形	0.37 × 0.25	33	皿状	外傾	人為		
46	D 4 d4	N - 19° - E	楕円形	0.40 × 0.31	56	皿状	外傾	人為		
47	D 4 c1	N - 68° - W	楕円形	0.50 × 0.45	45	皿状	外傾	人為		
48	D 4 d1	N - 80° - W	不定形	0.83 × 0.59	68	皿状	外傾	人為		
49	D 3 d0	N - 79° - E	楕円形	0.48 × 0.38	37	皿状	外傾	人為		

## (2) 溝跡

### 第1号溝跡 (第55図)

**位置** 調査区東部のD 6 i1 ~ D 6 j1 区, 標高 34 mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 南端と北端が調査区域外へ延びているため, 長さ 4.41 mしか確認できなかった。D 6 j1 から北方向 (N - 14° - E) に直線的に延びており, 上幅 1.04 ~ 1.16 m, 下幅 0.23 ~ 0.53 m, 深さ 63cmである。底面は平坦で, 確認できた範囲での高低差は見られなかった。断面形は逆台形状である。



第55図 第1号溝跡実測図

**ピット** 3か所。P 1 ~ P 3は深さ 17 ~ 22cmで, 西側に直線的に並んでいるが, 本跡に伴うものであるかは不明である。

**覆土** 3層に分層できる。ロームブロックやローム粒子が不規則に混じる堆積状況から, 埋め戻されている。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子多量

**遺物出土状況** 流れ込んだ須恵器片 1点 (高台付坏) が覆土中から出土している。

**所見** 時期は, 不明である。本跡と第2号溝跡は約 127 m離れており, ほぼ並行している。本跡の東側には遺構が少なく, 第2号溝跡の西側には遺構が確認されていないことから, 集落を区画する溝の可能性がある。

## 第2号溝跡 (第56図)

**位置** 調査区西部のC 3j1～D 2c0区, 標高34mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第38号土坑と重複しているが新旧関係は不明である。

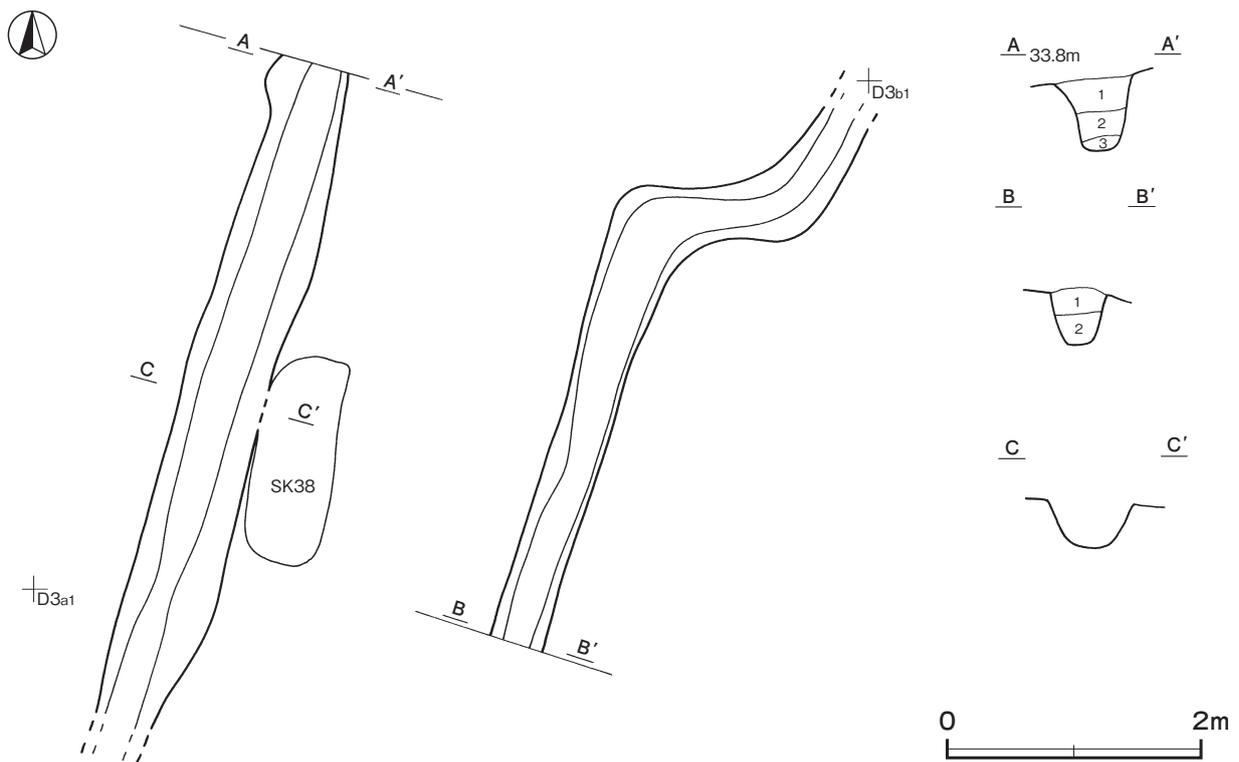
**規模と形状** 中央部が攪乱を受けていることと南端と北端が調査区域外へ延びているため, 調査区域内で推定できる長さは14.08mである。C 3j1区から南方向(N-163°-W)にはほぼ直線的に延び, D 2b0区でクランク状に屈曲し, 再び南方向のD 2c0区に延びている。上幅0.42～0.74m, 下幅0.16～0.40m, 深さ43～58cmである。底面は平坦で, 確認できた範囲での高低差は20cmほどであり, 南に傾斜している。断面形はU字状である。

**覆土** 3層に分層できる。ほぼ均一な堆積状況から, 自然堆積と考えられる。

### 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

**所見** 時期は, 不明である。第1号溝跡と本跡は約127m離れており, ほぼ並行している。本跡の西側には遺構が確認されていないことと, 第1号溝跡の東側には遺構が少ないことから, 集落を区画する溝の可能性はある。



第56図 第2号溝跡実測図

表8 溝跡一覧表

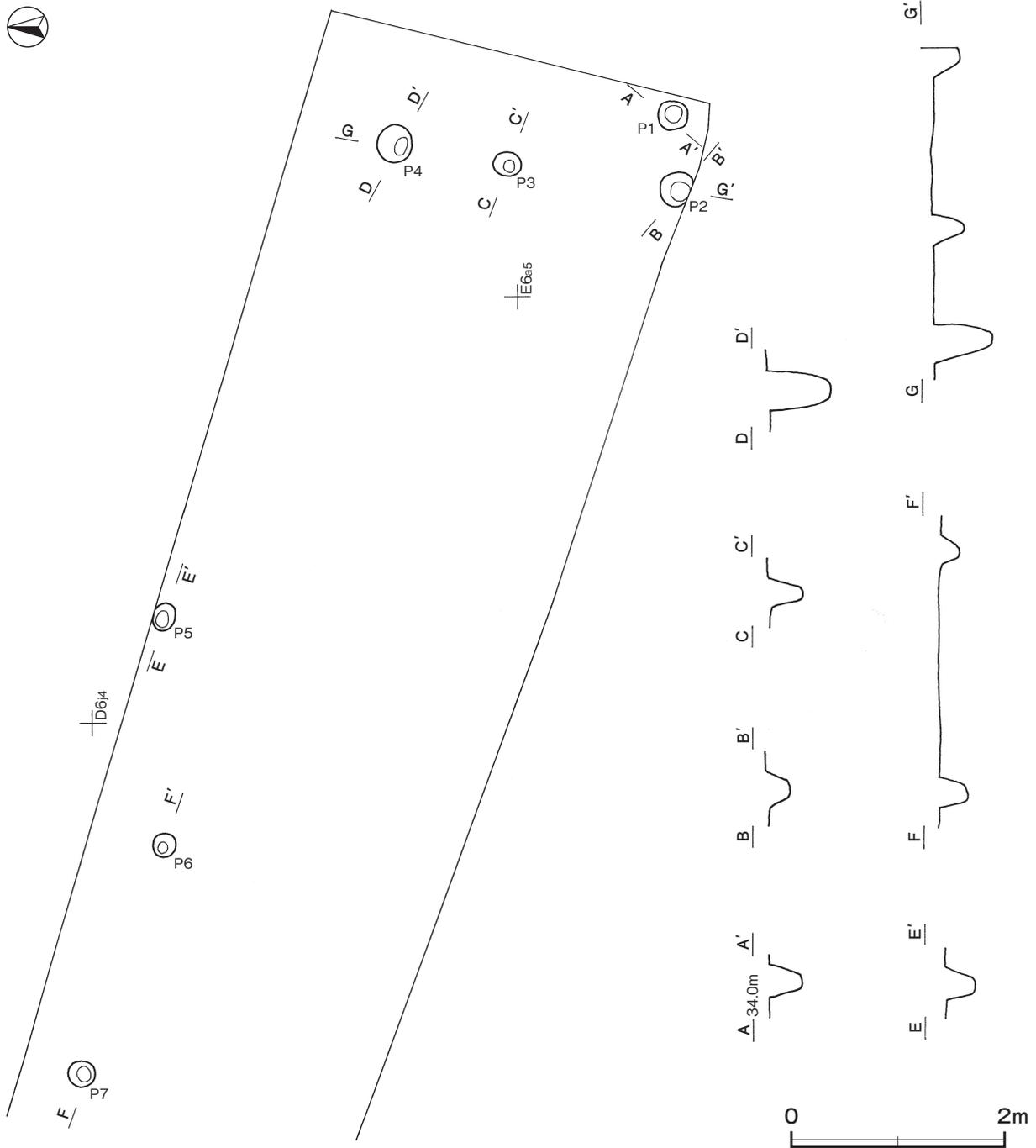
番号	位置	方向	形状	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
1	D6i1～D6j1	N-14°-E	直線	(4.41)	1.04～1.16	0.23～0.53	63	逆台形	外傾	人為	須恵器	
2	C3j1～D2c0	N-163°-W	直線・屈曲	(14.08)	0.42～0.74	0.16～0.40	43～58	U字状	緩斜	自然		SK38と新旧不明

(3) ピット群

ピット群5か所を確認した。いずれも建物跡を想定できる配置ではないので、各ピット群ごとに平面図と計測表を掲載する。

第1号ピット群 (第57図)

調査区東部のD 6 i3 ~ E 6 a5 区の標高 34 m の台地平坦部において、東西 9.2 m、南北 5.4 m の範囲から柱穴状のピット7か所を確認した。平面形は長径 23 ~ 35cm の円形または楕円形で、深さは 17 ~ 58cm である。時期は、不明である。



第57図 第1号ピット群実測図

## ピット計測表

ピット 番号	規 模 (cm)			ピット 番号	規 模 (cm)			ピット 番号	規 模 (cm)		
	長径 (軸)	短径 (軸)	深さ		長径 (軸)	短径 (軸)	深さ		長径 (軸)	短径 (軸)	深さ
1	28	28	37	4	35	34	58	7	25	25	27
2	33	(29)	24	5	28	(20)	28				
3	27	23	31	6	23	20	17				

### 第2号ピット群 (第58図)

調査区東部のD 5h6～D 6il 区の標高34mの台地平坦部において、東西17.0m、南北5.9mの範囲から柱穴状のピット30か所を確認した。平面形は長径24～70cmの円形や楕円形または不定形で、深さは20～71cmである。P 11が第37号土坑を掘り込んでいる。時期は、不明である。

## ピット計測表

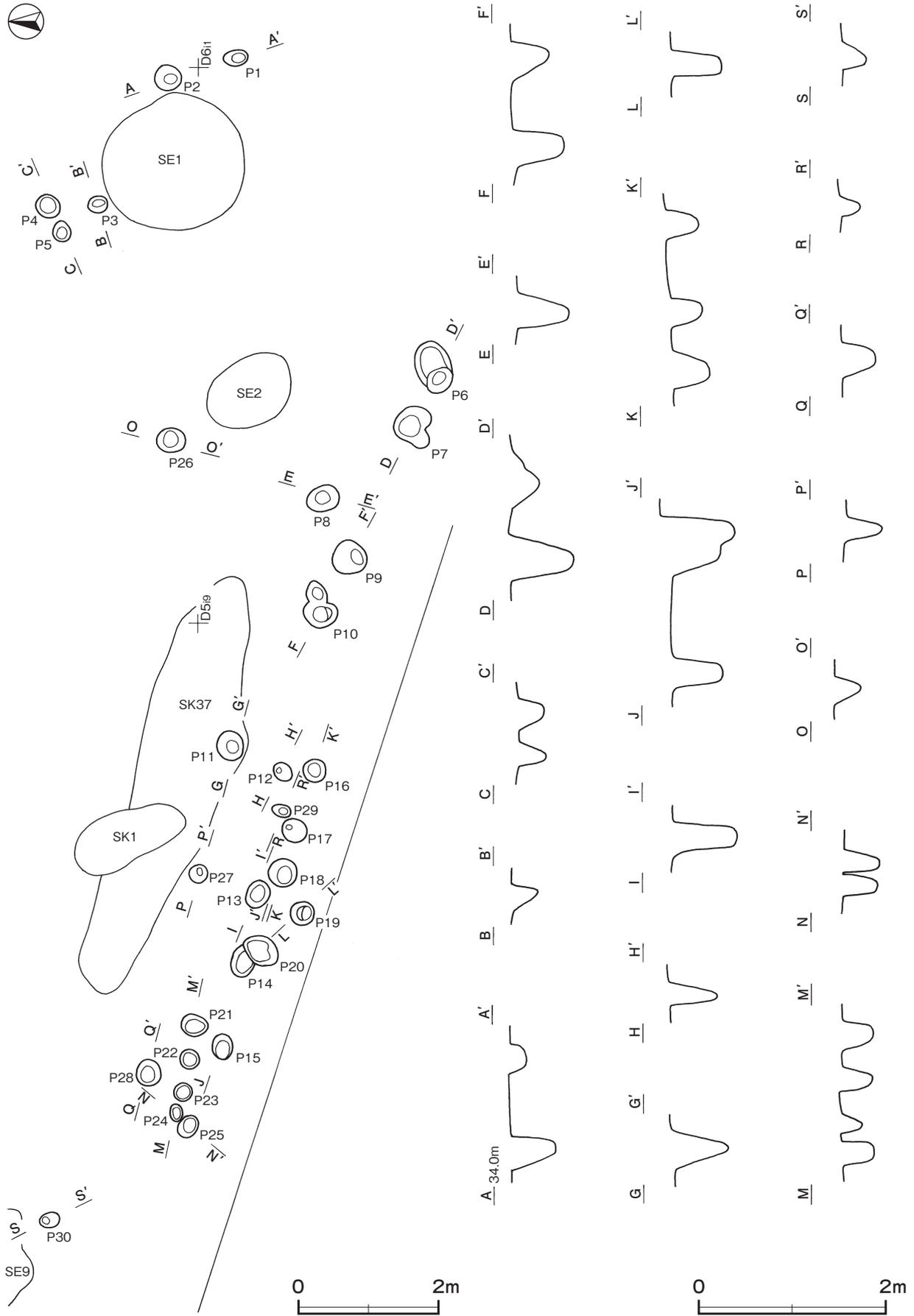
ピット 番号	規 模 (cm)			ピット 番号	規 模 (cm)			ピット 番号	規 模 (cm)		
	長径 (軸)	短径 (軸)	深さ		長径 (軸)	短径 (軸)	深さ		長径 (軸)	短径 (軸)	深さ
1	34	20	20	11	43	38	58	21	37	30	33
2	38	38	51	12	28	22	54	22	28	26	35
3	30	26	27	13	37	31	67	23	26	23	23
4	36	31	32	14	(40)	37	51	24	27	19	36
5	29	24	33	15	36	27	53	25	33	25	38
6	70	49	32	16	32	31	43	26	41	34	30
7	57	51	66	17	34	33	71	27	28	25	42
8	46	37	62	18	39	38	43	28	35	34	38
9	49	47	42	19	32	32	49	29	24	18	27
10	69	46	59	20	52	40	71	30	28	21	33

### 第3号ピット群 (第59・60図)

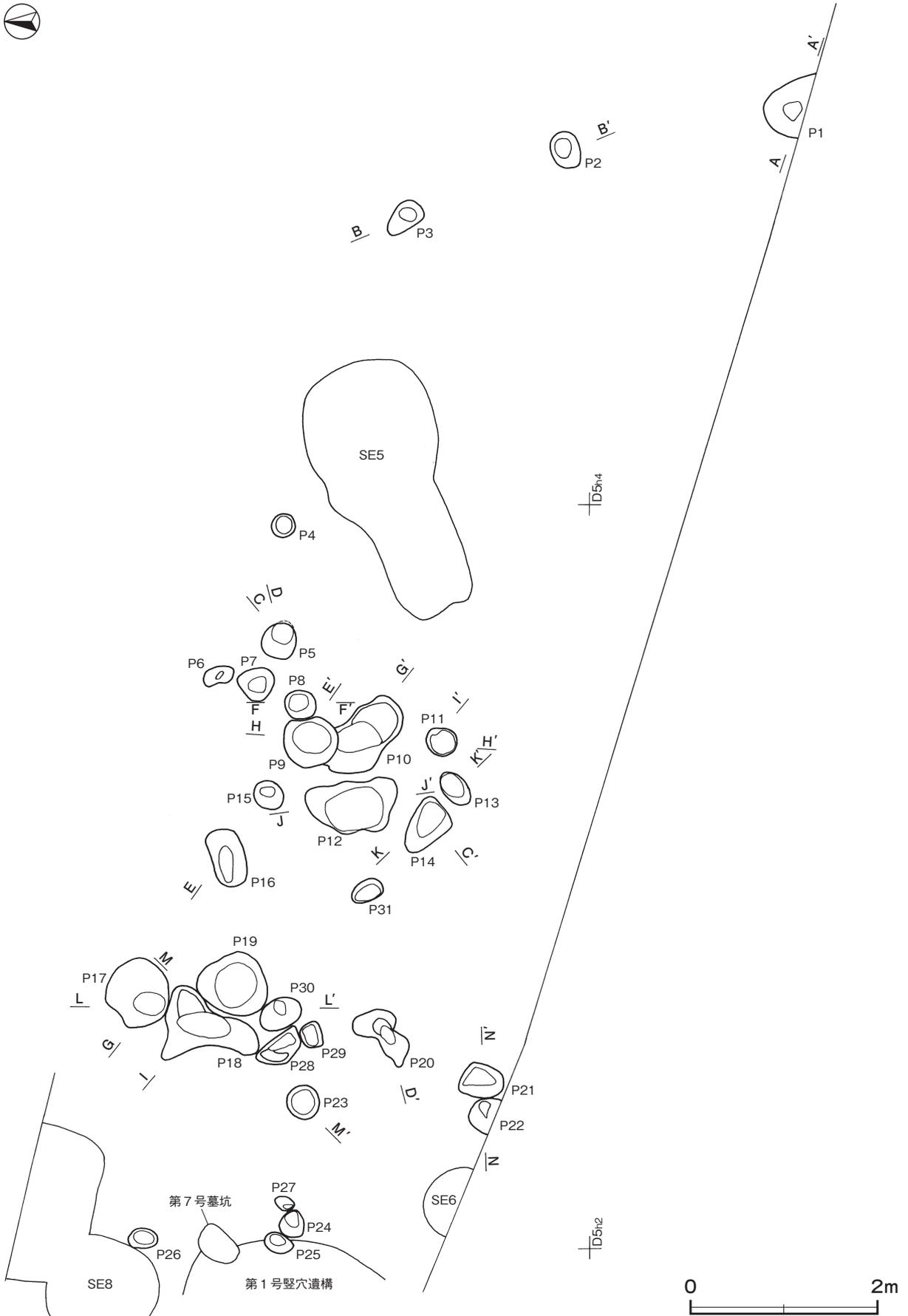
調査区東部のD 5f1～D 5h5 区の標高34mの台地平坦部において、東西12.7m、南北7.3mの範囲から柱穴状のピット31か所を確認した。平面形は長径20～104cmの円形や楕円形または不定形で、深さは15～94cmである。P25は第1号竪穴遺構を掘り込んでいる。P 7からは土師質土器片1点(内耳鍋)、P 18からは土師質土器片1点(皿)が出土しているが、細片のため図示することができなかった。また、P 19からは流れ込んだ須恵器片1点(坏)が出土している。時期は、中世以降と考えられる。

## ピット計測表

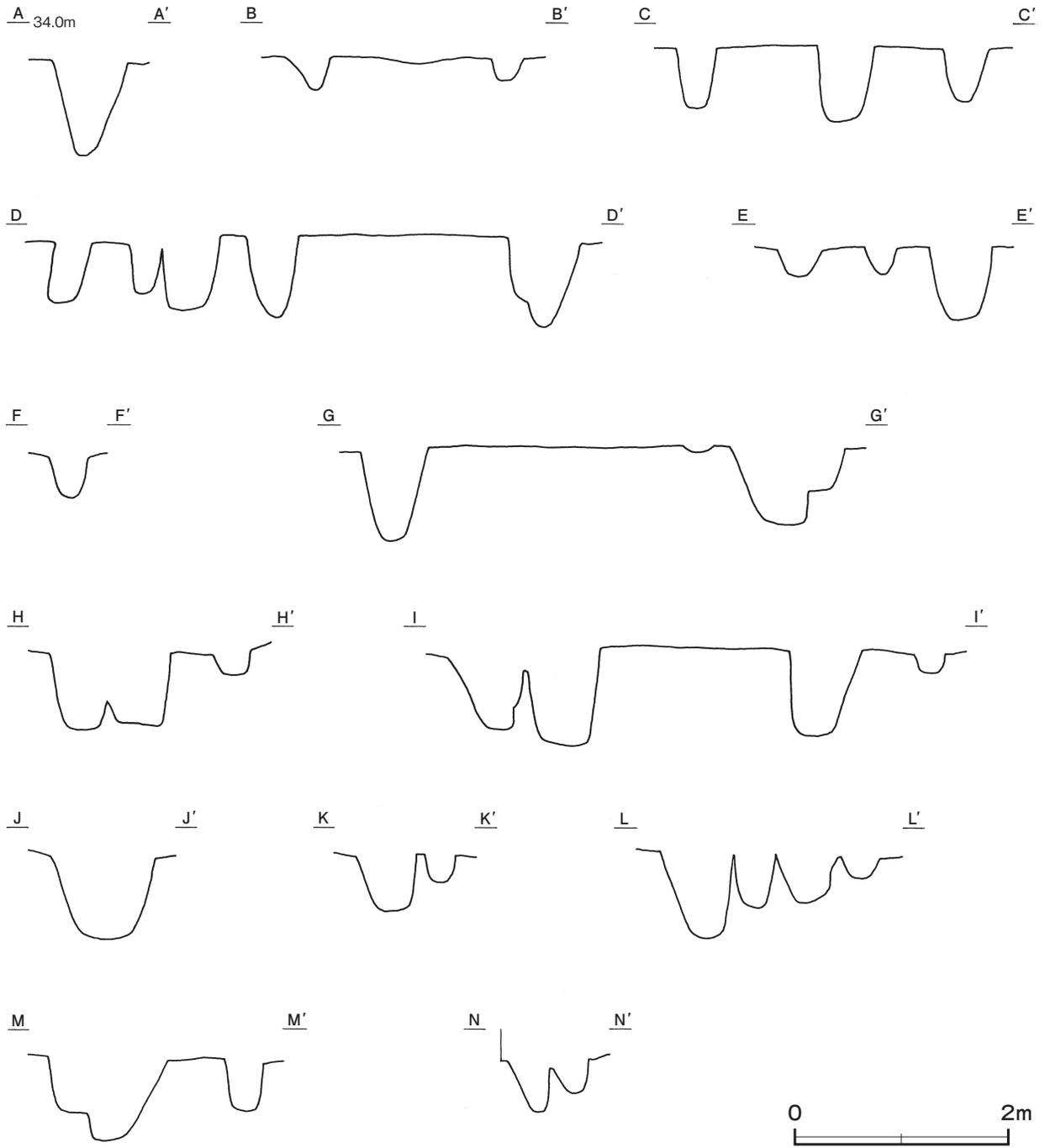
ピット 番号	規 模 (cm)			ピット 番号	規 模 (cm)			ピット 番号	規 模 (cm)		
	長径 (軸)	短径 (軸)	深さ		長径 (軸)	短径 (軸)	深さ		長径 (軸)	短径 (軸)	深さ
1	(60)	61	88	6	32	18	24	11	32	31	22
2	42	30	25	7	38	35	34	12	98	54	84
3	44	29	30	8	33	31	52	13	40	27	21
4	25	24	17	9	57	55	71	14	62	41	50
5	38	37	58	10	102	49	71	15	33	29	26



第58図 第2号ピット群実測図



第 59 図 第 3 号ピット群実測図 (1)



第60図 第3号ピット群実測図(2)

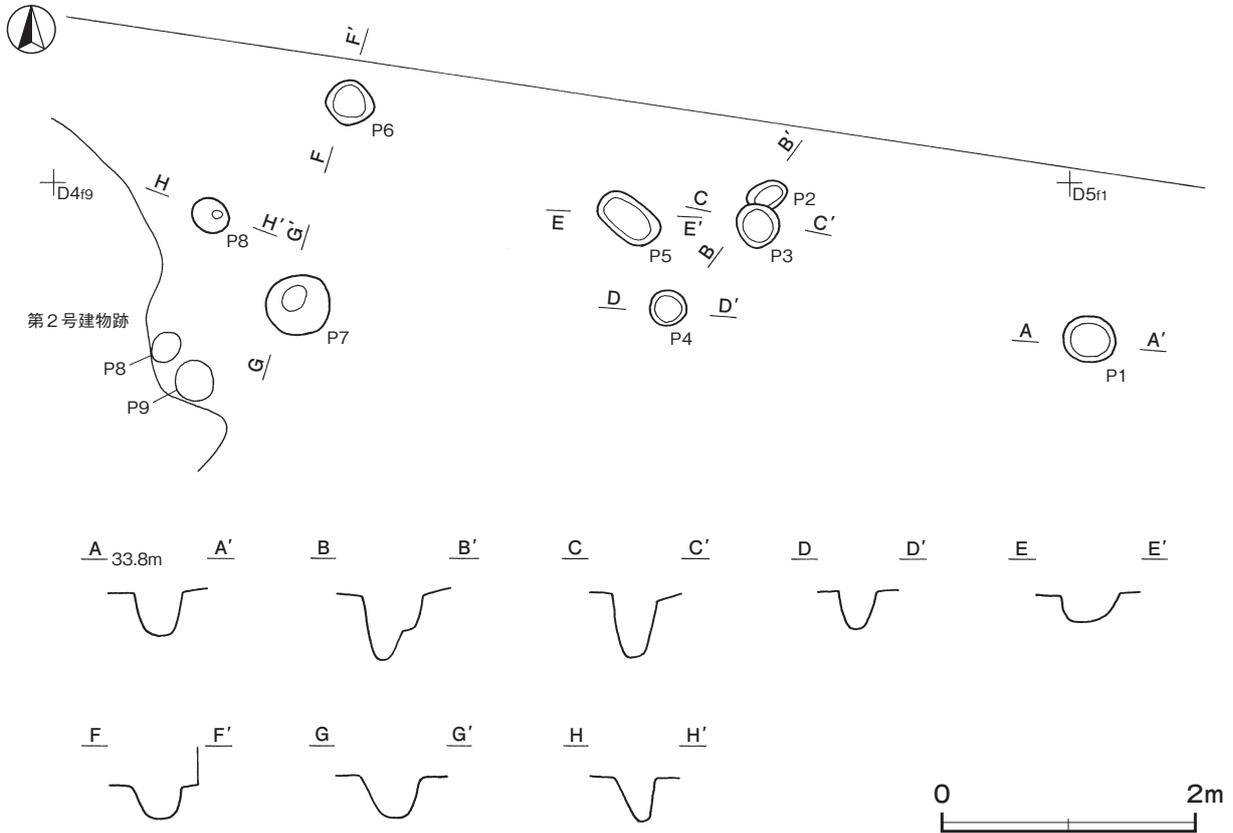
ピット 番号	規 模 (cm)		
	長径 (軸)	短径 (軸)	深さ
16	62	37	26
17	73	67	81
18	104	81	76
19	76	68	94
20	70	33	80
21	47	37	35

ピット 番号	規 模 (cm)		
	長径 (軸)	短径 (軸)	深さ
22	39	(27)	50
23	37	34	48
24	31	26	56
25	31	20	32
26	32	21	29
27	20	19	18

ピット 番号	規 模 (cm)		
	長径 (軸)	短径 (軸)	深さ
28	48	37	31
29	27	23	25
30	46	32	23
31	35	24	15

第4号ピット群 (第61図)

調査区中央部のD 4 e9 ~ D 5 f1 区の標高 34 m の台地平坦部において、東西 7.3 m、南北 2.0 m の範囲から柱穴状のピット 8 か所を確認した。平面形は長径 27 ~ 50cm の円形や楕円形、方形や長方形など様々で、深さは 19 ~ 52cm である。時期は、不明である。



第61図 第4号ピット群実測図

ピット計測表

ピット 番号	規 模 (cm)			ピット 番号	規 模 (cm)			ピット 番号	規 模 (cm)		
	長径 (軸)	短径 (軸)	深さ		長径 (軸)	短径 (軸)	深さ		長径 (軸)	短径 (軸)	深さ
1	41	35	35	4	27	27	30	7	48	48	39
2	33	21	24	5	50	28	19	8	29	26	36
3	34	32	52	6	32	32	26				

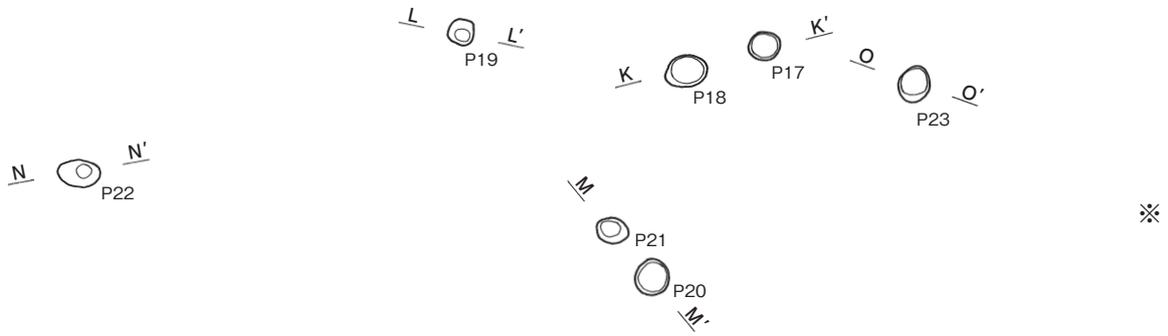
第5号ピット群 (第62・63図)

調査区西部のD 3 b1 ~ D 3 d7 区の標高 34 m の台地平坦部において、東西 23.0 m、南北 6.9 m の範囲から柱穴状のピット 23 か所を確認した。平面形は長径 20 ~ 69cm の円形または楕円形で、深さは 14 ~ 85cm である。P16 は第8号土坑を掘り込んでいる。時期は、不明である。

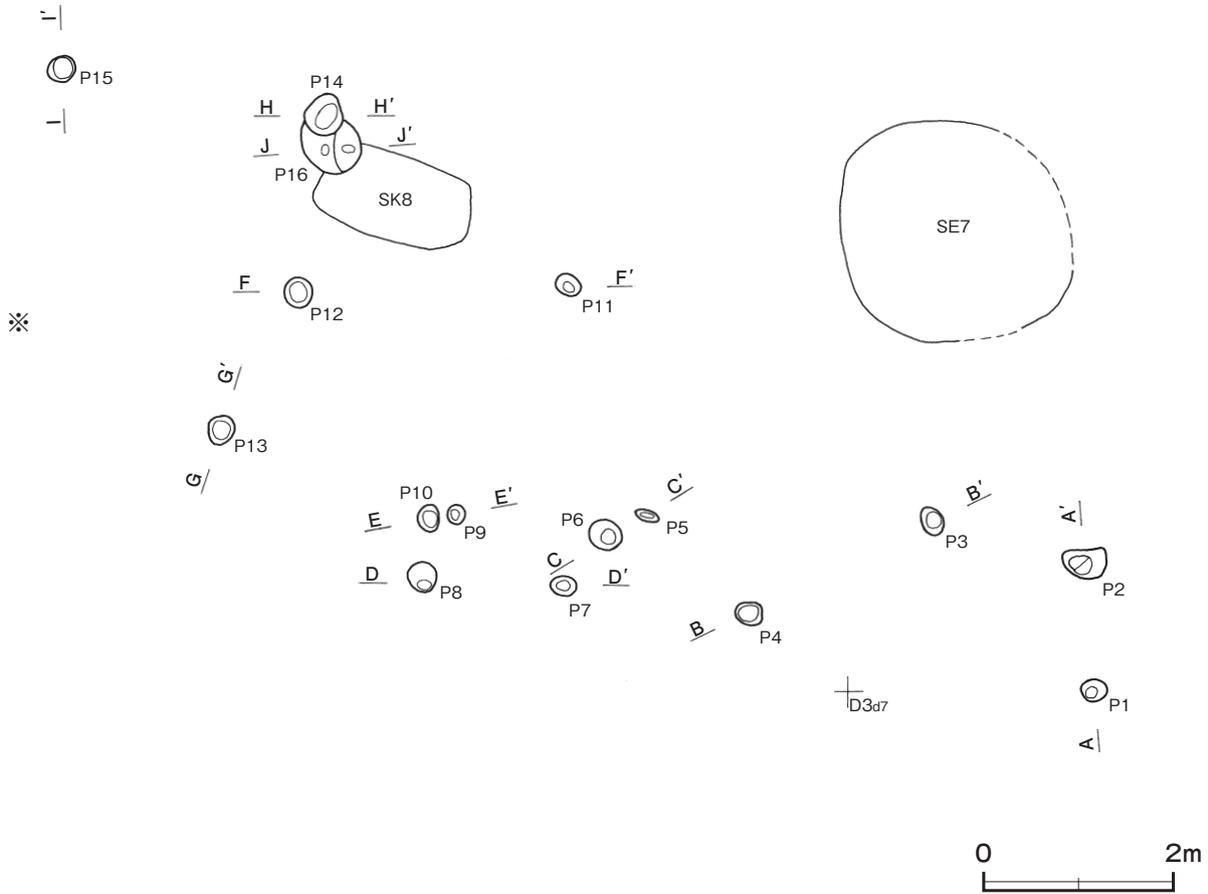


D3b2

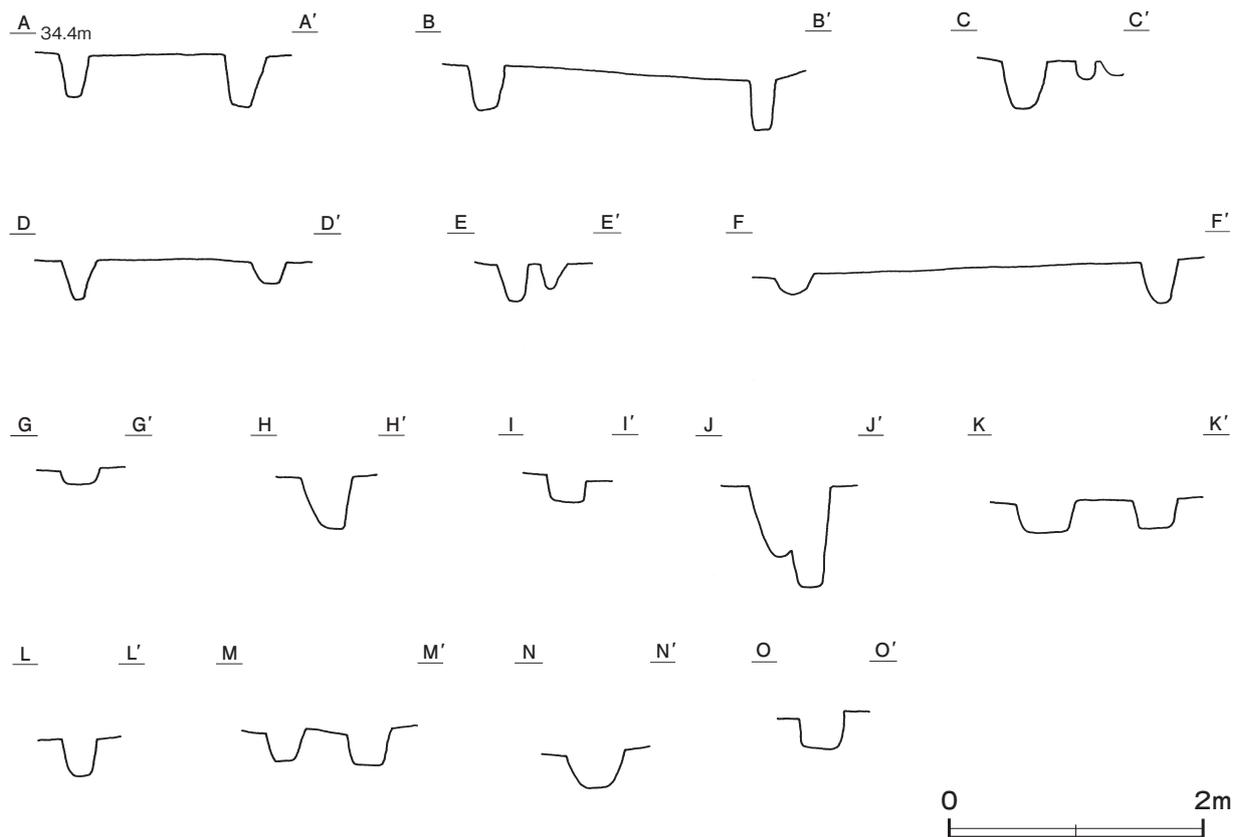
D3b4



D3b5



第 62 図 第 5 号ピット群実測図 (1)



第 63 図 第 5 号ピット群実測図 (2)

ピット計測表

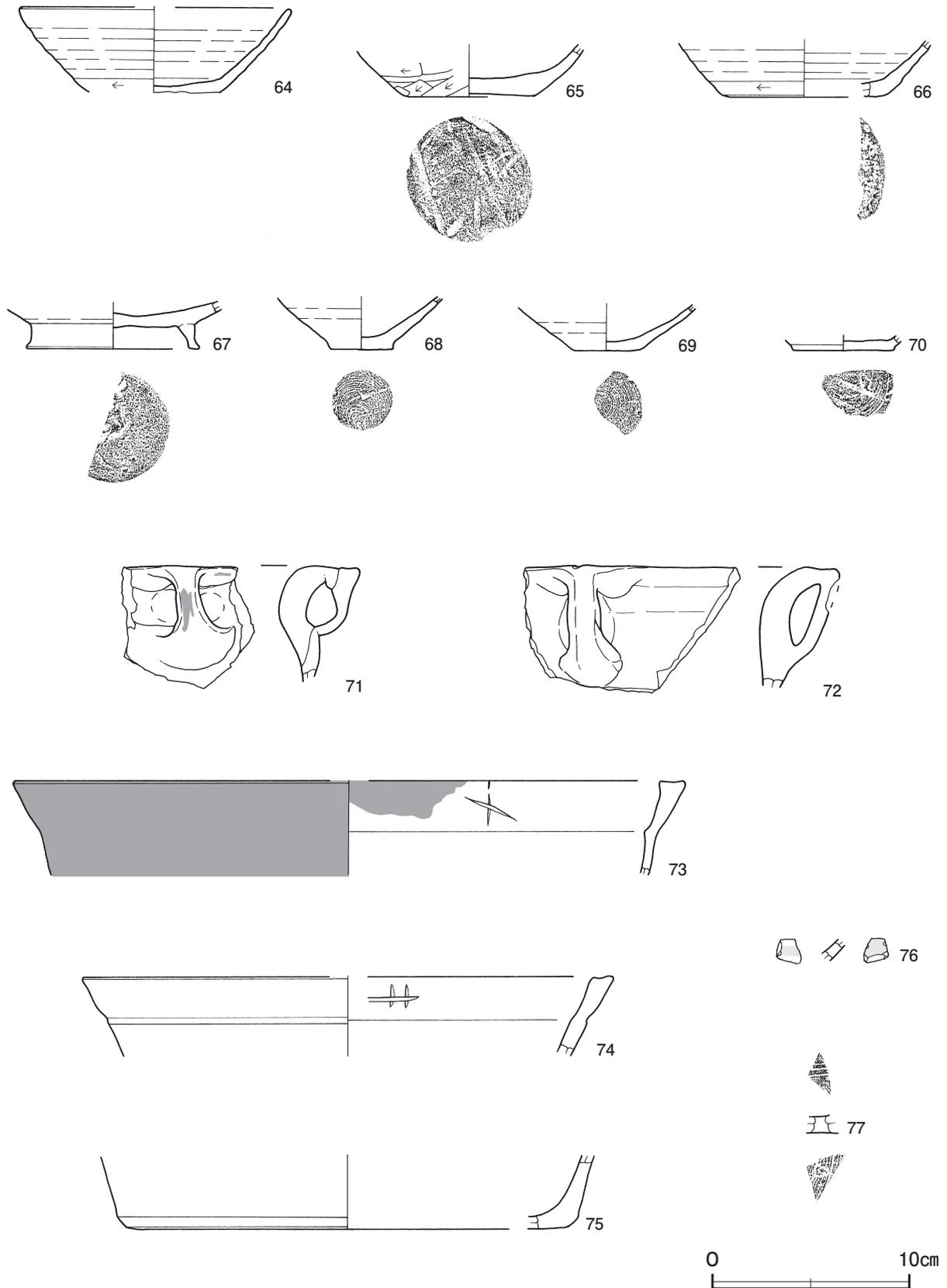
ピット 番号	規 模 (cm)			ピット 番号	規 模 (cm)			ピット 番号	規 模 (cm)		
	長径 (軸)	短径 (軸)	深さ		長径 (軸)	短径 (軸)	深さ		長径 (軸)	短径 (軸)	深さ
1	25	24	36	9	20	19	25	17	33	31	27
2	47	38	42	10	30	24	30	18	46	37	33
3	31	22	50	11	26	21	35	19	22	19	19
4	28	25	36	12	31	29	15	20	34	32	32
5	25	12	19	13	30	26	14	21	34	27	25
6	33	32	43	14	46	41	45	22	44	30	29
7	20	20	19	15	30	30	19	23	39	32	27
8	34	30	34	16	69	60	85				

表 9 ピット群一覧表

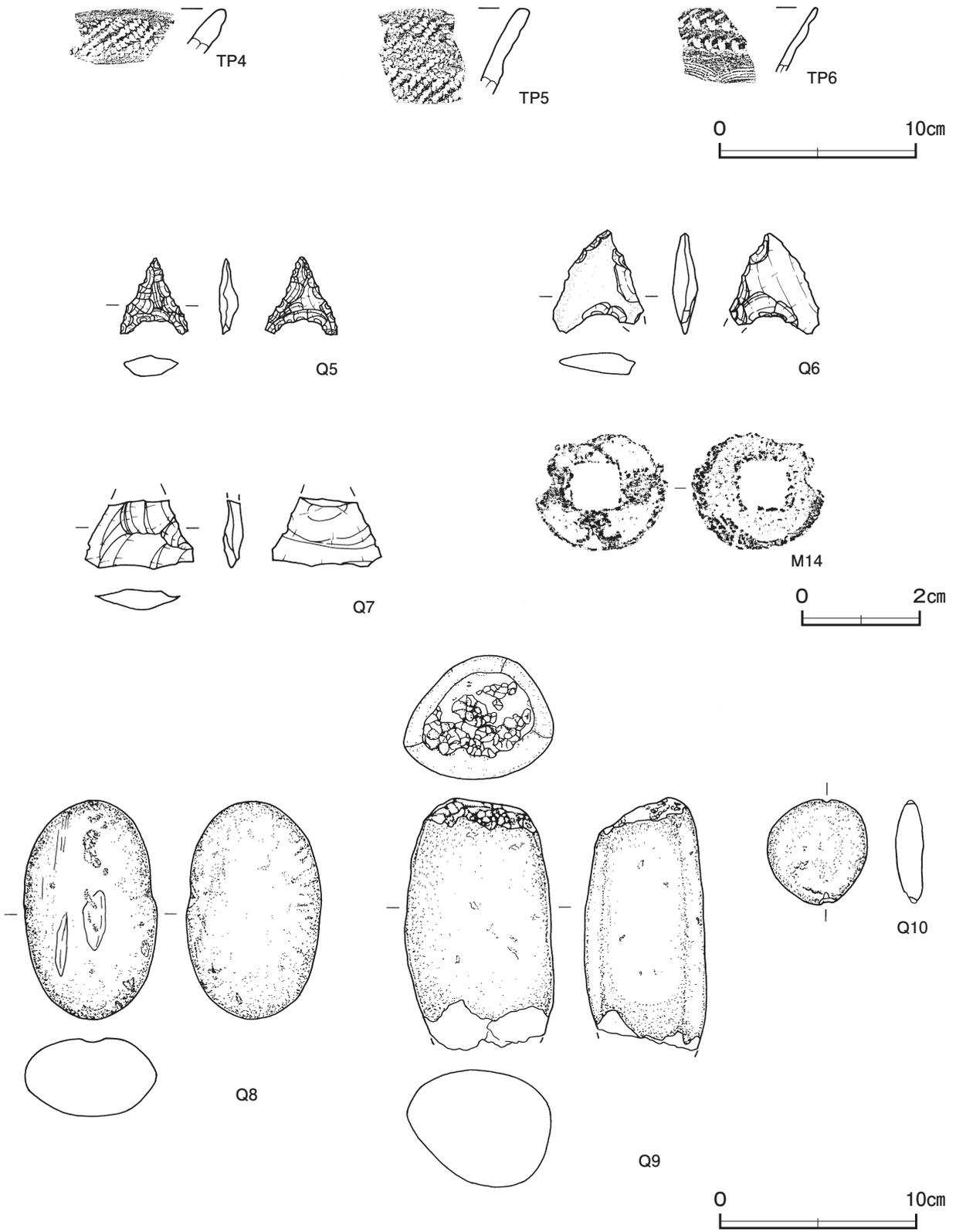
番号	位 置	柱 穴 (cm)					主な出土遺物	備 考 新旧関係(古→新)
		柱穴	平面形	長径 (軸)	短径 (軸)	深さ		
1	D6i3 ~ E6a5	7	円形・楕円形	23 ~ 35	20 ~ 34	17 ~ 58		
2	D5h6 ~ D6i1	30	円形・楕円形・不定形	24 ~ 70	18 ~ 51	20 ~ 71	SK37 → 本跡 P11	
3	D5f1 ~ D5h5	31	円形・楕円形・不定形	20 ~ 104	18 ~ 81	15 ~ 94	土師質土器 第 1 号 竪穴 遺構 → 本跡 P25	
4	D4e9 ~ D5f1	8	円形・楕円形・方形・長方形	27 ~ 50	21 ~ 48	19 ~ 52		
5	D3b1 ~ D3d7	23	円形・楕円形	20 ~ 69	12 ~ 60	14 ~ 85	SK8 → 本跡 P16	

(4) 遺構外出土遺物 (第 64・65 図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



第 64 図 遺構外出土遺物実測図 (1)



第 65 図 遺構外出土遺物実測図 (2)

遺構外出土遺物観察表 (第 64・65 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
64	須恵器	坏	[13.6]	(4.5)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部下端回転ヘラ削り	表土	30% PL 9
65	須恵器	坏	-	(2.7)	6.5	長石・石英・細礫	灰黄	普通	体部下端・底部手持ちヘラ削り	SD 1	20%
66	須恵器	坏	-	(2.9)	[8.1]	長石・石英	にぶい黄橙	不良	体部下端回転ヘラ削り 底部外面剥離	表土	5%
67	須恵器	高台付坏	-	(2.4)	8.7	長石	灰	良好	底部回転ヘラ切り	SE 4	20% PL 9
68	土師質土器	皿	-	(2.7)	3.2	長石・石英	浅黄橙	普通	外・内面口クロナデ 底部回転糸切り	表土	30% PL 9
69	土師質土器	皿	-	(2.4)	[3.6]	長石・石英	灰白	普通	外・内面口クロナデ 底部回転糸切り	表土	30% PL 9
70	土師質土器	皿	-	(0.8)	[5.2]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り 板目圧痕	表土	15%
71	土師質土器	内耳鍋	-	(6.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・細礫	にぶい黄橙	普通	内耳部指頭痕 内面煤付着	表土	5%
72	土師質土器	内耳鍋	-	(6.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	外・内面ナデ	表土	5%
73	土師質土器	内耳鍋	[34.0]	(4.9)	-	長石・石英・細礫	にぶい黄褐	普通	口縁部内面ヘラ書き「×」 外・内面煤付着	表土	5% PL 9
74	土師質土器	内耳鍋	[26.9]	(4.2)	-	長石・石英・細礫	にぶい橙	普通	口縁部内面ヘラ書き「キ」	表土	5% PL 9
75	土師質土器	内耳鍋	-	(3.8)	[22.4]	長石・石英	にぶい橙	普通	体部下端ヘラ削り	表土	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	焼成	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
76	陶器	皿	-	(1.2)	-	にぶい黄橙・オリープ	良好	灰釉	-	瀬戸・美濃系	表土	5%
77	陶器	播鉢	-	(0.9)	-	橙・にぶい赤褐	良好	錆釉	播目3条残存 底部回転糸切り	瀬戸・美濃系	表土	5%

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 4	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	LR 単節縄文を施文	表土	
TP 5	縄文土器	深鉢	長石	褐灰	LR 単節縄文を施文	表土	
TP 6	弥生土器	壺	長石・石英・細礫	橙	口縁部縄文施文後棒状工具による2列の刺突 5条1単位の櫛歯状工具による波状文	表土	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 5	石鏃	1.29	1.15	0.31	0.28	チャート	端部に細かな連続した調整	表土	PL 9
Q 6	石鏃	1.73	(1.48)	0.41	(0.78)	安山岩	端部3か所に調整を施す	第1号建物跡	PL 9
Q 7	石鏃	(1.14)	1.82	0.31	(0.66)	チャート	平基 破損した未成品	表土	PL 9
Q 8	磨石	11.3	6.9	4.0	429.6	安山岩	裏面中央部に磨痕	第1号竪穴遺構	PL 9
Q 9	敲石	(13.0)	7.6	6.3	(921.2)	安山岩	一方の端部に敲打痕	第1号竪穴遺構	PL 9
Q 10	石錘	5.4	5.1	1.4	(55.6)	安山岩	長径方向端部2か所を打ち欠いて調整	表土	

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
M 14	□□元寶	2.30	0.76	0.11	(1.31)	-	銅	真書 天聖元寶カ	表土	PL10

## 第4節 ま と め

### 1 はじめに

今回の報告では、建物跡2棟、竪穴遺構1基、井戸跡10基、炉跡2基、墓坑10基、墓坑の可能性のある土坑8基、火葬施設1基、溝跡2条、ピット群5か所等を記載し、当遺跡は中世の集落跡で、遺構や遺物から室町時代を中心とした時期に営まれていたことを述べた。ここでは、当遺跡の中世について、周辺遺跡の様相にもふれながら、若干の考察を加えまとめとしたい。

### 2 中世の結城の様子

結城の中世は、結城朝光によって礎が築かれ、鎌倉時代、南北朝時代、室町時代を経て、動乱の戦国時代、そして江戸時代へと連綿とその歴史を刻んでいる<sup>1)</sup>。そこで、当時の結城の様子について結城氏の動きを中心として概観することにする。

結城朝光は、源頼朝のもとで名声を挙げ、1223年には、將軍の近習番になるなど、鎌倉幕府からの評価も高かった。朝光の子重光が山河を名乗って、上山川に館（東持寺館跡）を建て、1260年には、重光が検非違使に任命される。1321年には、山河貞重が結城郡下方毛呂郷を金沢称名寺に寄進しており、結城氏、山河氏による結城支配はしばらく続いている。

南北朝時代になると、結城朝祐、直光がこの地を治めている。1335年、朝祐は足利尊氏に従い、戦功をあげ、常陸国関郡を与えられている。1353年、直光は尊氏の上洛の際に先陣を務め、その後、楠正儀の赤坂城を攻めたり、新田義宗・義治らを撃破したりしている。1392年には、南北朝が合一されている。

室町時代、当地域では1440年に結城合戦が勃発している。これは、結城氏朝が幕府軍の大軍を迎え討った戦いで、將軍に敵対する願文を書いた足利持氏の遺児安王と春王を氏朝が結城に迎え入れたことに端を発する。1年後の1441年に氏朝が討死し、結城氏は一時断絶するが、1447年には結城成朝が許しを受け、結城家を再興している。1467年には応仁の乱が始まり、結城氏広が亡くなる頃には下剋上の世となる<sup>2)</sup>。

戦国時代には、1527年に結城政勝が結城当主となり、結城晴朝まで結城氏の支配が続いていく。1556年、政勝は、北条氏康・足利義氏の援けを受け、小田氏治を撃破し、小田領を得ている。同年、新法度を制定し、1558年には称名寺への寺領の寄進も行っている。1565年には、山川氏重が綾戸城を築城し、山川新宿に結城寺を移建して、寺領を寄進している。1586年に豊臣秀吉が太政大臣になったあとは、結城晴朝、山川晴重ともに秀吉の命に応じている。また、徳川家康が登場し天下を統一したころには、晴朝は越前国丹生郡に移っている。

この時代の荘園農村の生活について『結城の歴史』<sup>3)</sup>では、以下のように記述してある。「朝光が結城に根を下ろしてから、城の内館や東持寺館跡、三蔵神社境内遺跡等の館跡に住んだ武士たちは、台地上に長く入り込んだ谷戸田を中心とした細長い耕地を農民に耕作させるとともに、開墾農場主のような形で、周辺の農民の労働を推し進めていったと考えられる。南北朝の頃になると、茂呂郷（毛呂郷）の年貢や雑公事が銭貨で称名寺に送られていることや、『庭訓往来』の諸国名産品の中に常陸紬として、結城紬の名が登場している。これらの記事から、農業の着実な発展が推測される。」このことから、当地域は結城氏や山河氏（後の山川氏）等の武士の支配のもと、農業を中心として庶民の生活が成り立っていたと考えられる。

### 3 集落の様相

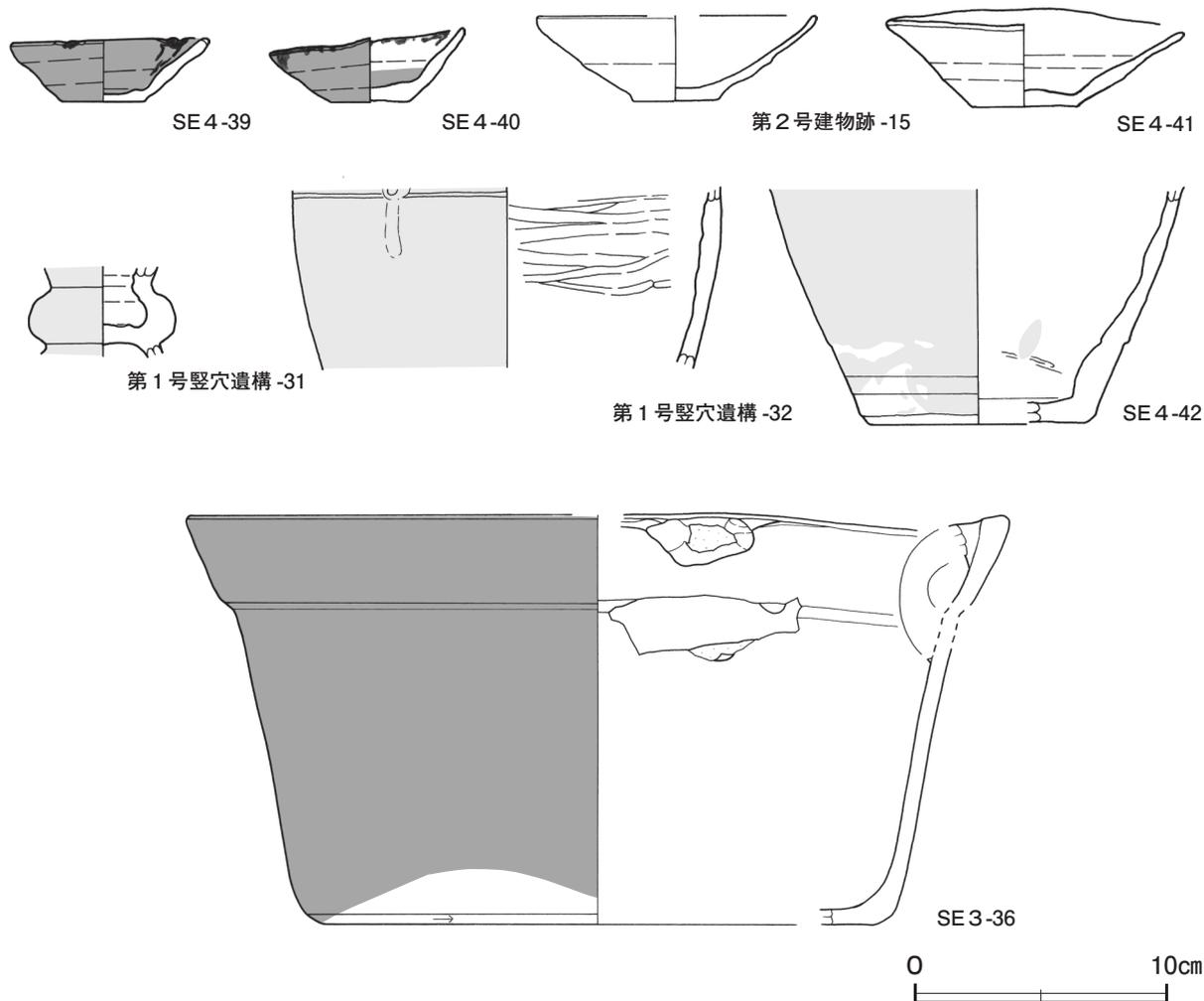
今回、建物跡や井戸跡、墓跡など生活や葬送に関わる遺構が確認され、日常生活雑器を中心とした出土遺物から生活の一端を垣間見ることができた。ここでは、遺構や遺物について振り返り、集落の様相に迫りたい。

#### (1) 出土遺物と遺構の時期（第66図）

出土遺物は、土師質土器の皿や内耳鍋をはじめとして、陶器の播鉢や甕などの日常雑器に加え瓶子や花瓶、また磁器の碗なども出土している。土師質土器は、第1・2号建物跡や第4号井戸跡等から出土しており、小皿や皿（15・39・40・41）は、薄手のつくりで体部から口縁部にかけてほぼ直線的な形状である。底部は径が小さく、回転糸切りや板目状の圧痕が認められるものもあり、室町時代から戦国時代の初めのころの特徴を持つとみられる<sup>4)</sup>。土師質土器の内耳鍋は、第1号建物跡や第3号井戸跡（36）等から出土しており、口縁部から2～3cmほど低い位置に稜が認められ、口縁部の上端に面取りが行われている。器高が測定できたものは2点ほどで、15世紀代にみられる深いタイプの内耳鍋の形態<sup>5)</sup>であり、その他の破片を観察しても16世紀代にみられる浅い逆台形の形状は見受けられない。陶器片には花瓶や瓶子、磁器片には青磁の碗類がみられ、当時の威信財が少ないながらも出土しており、富裕層の存在が想起される。陶器の花瓶や瓶子（31・32・42）は、古瀬戸後期の時期と捉えられ<sup>6)</sup>、第1号竪穴遺構や第4号井戸跡等から出土している。陶器片を観察すると、しっかりと釉薬が施され、鏡のように硬質で光沢があり、15世紀代の作品と考えられる。完形の土器が少ないためデータとしての裏付けは弱いだが、これらの観察内容から土器、陶器類の時期は、総じて15世紀の後半を中心としており、第1・2号建物跡、第1号竪穴遺構、第4号井戸跡やそれらと重複する遺構も含め、15世紀の範疇に14遺構（表10）が入ると考えられる。また、表土の出土遺物を含め、土師質土器の皿類や内耳鍋の形状と、瀬戸・美濃系で15世紀末ごろから生産が開始される大窯製品の出土が見られないことから、16世紀の様相は薄くなっている。さらに、近世の陶磁器や銭貨などの出土も見られない。以上のことから、各遺構は15世紀代から16世紀の前半にかけての時期と考えている。

表10 中世の遺構と主な出土土器

遺構	番号	主な出土土器		時期
		土師質土器・瓦質土器	陶器・磁器・その他	
建物跡	1	小皿 皿 内耳鍋 播鉢	—	15世紀後半
	2	小皿 皿 内耳鍋 香炉	常滑産甕 青磁碗	15世紀後半
竪穴遺構	1	小皿 皿 内耳鍋 播鉢	花瓶 瓶	15世紀後半
井戸跡	1	内耳鍋	—	中世
	2	小皿	—	中世
	3	皿 内耳鍋 播鉢	—	15世紀代
	4	小皿 皿	瓶子	15世紀後半
	5	内耳鍋	—	中世
	6	—	—	中世
	7	皿	石製鉢	15世紀代
	8	内耳鍋	—	中世
	9	—	—	中世
	10	小皿 皿 内耳鍋	—	15世紀代
炉跡	1	—	—	15世紀代
	2	—	—	15世紀代
墓坑	1	小皿	—	15世紀以降
	2	—	—	中世以降
	3	—	—	中世
	4	播鉢	—	15世紀後半以降
	5	—	—	中世
	6	—	—	15世紀後半以降
	7	—	—	15世紀後半以降
	8	—	—	中世
	9	—	—	中世
	10	小皿	—	15世紀後半以降
墓坑の可能性のある土坑	4	小皿	—	中世
	5	—	—	中世
	6	—	—	中世
	8	皿	—	中世
	9	—	—	中世以降
	10	—	—	中世以降
	12	—	—	中世以降
	23	小皿	—	中世
火葬施設	1	—	—	中世



第 66 図 出土土師質土器・陶器実測図

(2) 建物跡と集落の広がり

当遺跡で確認できた建物跡<sup>7)</sup>は、2棟である。第1号建物跡は、締まった床面に伴って配列が不揃いながらも柱穴が確認されている。床面からは、土師質土器や瓦質土器が出土しており、生活空間であったと考えられる。第2号建物跡も床面と柱穴が確認されている。その大半が調査区域外に延びているが、建物跡の範囲に近接して炉跡や井戸跡が確認されており、屋敷としての機能を果たしていたと推定できる。

また、ピット群は、各ピットの形状やピットの配列が調査区域外に延びる可能性があることや、近接して井戸跡があることなどから、ピット群も屋敷の一部であったと考えられる。

竖穴遺構は、1基だけ確認できた<sup>8)</sup>。茨城県西部において当財団が報告した竖穴遺構は、筑西市（旧明野町）の中根十三塚遺跡<sup>9)</sup>で10基、炭焼戸東遺跡<sup>10)</sup>で4基、常総市（旧水海道市）の三本松遺跡<sup>11)</sup>で6基等があげられる。三本松遺跡では土壙墓や火葬墓も確認されている。当遺跡の竖穴遺構は、スロープ状に張り出した部分があり、このような遺構は、『戦国時代の考古学』<sup>12)</sup>で竖穴建物跡として取り上げられている。今回、建物跡や竖穴遺構の確認数は少なかったが、井戸跡の数が10基に上ることから、建物跡や竖穴遺構は調査区域外にかけて数多く存在していたと考えられ、ピット群も含めた建物跡が面的に広がっていた可能性がある。

(3) 集落の広がりや区画溝について

遺跡の東部と西部には、南北に溝が走っている。東部の第1号溝跡は、幅約1.1m、深さ約60cmで断面形は逆台形である。この溝の東側には、遺構が少なく第1号ピット群が存在するだけである。西部の第2号溝跡は、幅約0.7m、深さ50cmで断面形はU字状で、第1号溝跡とほぼ同様の形状をしている。この溝の西側は、緩やかに傾斜し、沖積低地に接する位置で、急斜面となっており、遺構が確認されなかった。2条の溝の間には、これまで紹介してきた数々の遺構が存在しているのにも関わらず、溝の外側には遺構がほとんどないという状況である。このような遺構と溝の関係は、栃木県下野市の下古館遺跡<sup>13)</sup>でも見られる。下古館遺跡は、当遺跡から直線距離で、約13kmである。この遺跡からは、長方形に区画された溝の内側に中世の竪穴遺構や井戸跡が数多く確認されている。遺跡の中央を南北に縦断する「うしみち」と呼ばれる道が走っており、街道沿いに営まれた集落の様相を呈している。当遺跡は、調査区域が東西に長く、面的に遺構を確認することができなかったが、2条の溝とその間の遺構の状況が、下古館遺跡の遺構の状況と類似している。当遺跡を縦断する道路も古くからの街道と伝えられており、当遺跡が街道沿いの集落であったことを示唆している。

(4) 墓坑と井戸跡

墓坑は、調査区西部を中心として、中央部に広がるように10基確認でき、骨片や骨粉が出土し、副葬品とみられる銭貨も出土している。墓坑の出土遺物・覆土含有物（表11）を見ると、第2～9号墓坑からは骨片や骨粉が、第3・4・8号墓坑からは骨片や骨粉とともに焼土や炭化粒子が確認されている。出土遺物は、第1・4・7・10号墓坑が土師質土器の破片で、第1・5・7・10号墓坑には銭貨が副葬されていた。銭貨は、主に北宋銭で銭種の不明なものもある<sup>14)</sup>。墓坑の出土遺物・覆土含有物から、火葬骨を埋葬している可能性が考えられ、遺跡の東部にある第1号火葬施設<sup>15)</sup>との関連も考えられる。

中世の埋葬形態はさまざまである<sup>16)</sup>。集落と墓域が分かれている例は、炭焼戸東遺跡にみられ、火葬土坑とともに墓域が形成されていたことが報告されており、墓が集落とやや離れた場所にあることが述べられている。建物跡の範囲内または近接して埋葬を行っている例としては、東海村の村松白根遺跡<sup>17)</sup>があげられ、建物跡と墓域が重複している状況が報告されている。

第4号墓坑は、第1号建物跡の柱穴と重複しており、建物の廃絶後に埋葬した状況である。第6号墓坑は、第2号建物跡を掘り込んでおり、第7号墓坑は、第1号竪穴遺構を掘り込んでいる。重複関係から、第4・6・7号墓坑は建物跡や竪穴遺構の廃絶後の埋葬と捉えられる。また、第1・4・8・9・10号墓坑は、第1号建物跡に、第5・6号墓坑は、第2号建物跡に、第2・7号墓坑は第1号竪穴遺構に、それぞれ近接しており、建物跡や竪穴遺構と墓域が同じ区域に形成されていたとみられる。このようにそれぞれの遺構を掘り込んで埋葬していることと、建物跡や竪穴遺構と墓域を区別して埋葬している状況がみられないことから、集落と墓域が明確にわかれていない埋葬形態と捉えられる。笹生衛氏は、「東国における中世墓地の様相」<sup>18)</sup>で、14世紀末期から15世紀前半にかけての火葬土坑について述べ、斎藤

表11 墓坑出土遺物・覆土含有物

番号	出土遺物・覆土含有物					
	骨片	骨粉	焼土 粒子	炭化 粒子	銭貨	土器
1					1枚	土師質土器片
2		○				
3	○	○		○		
4	○	○	○	○		土師質土器片
5		○			1枚	
6	○	○				
7		○			1枚	土師質土器片
8		○		○		
9		○				
10					8枚	土師質土器片

弘氏は、「中世後期の墓地」<sup>19)</sup>で、屋敷に隣接して営まれる墓地について述べている。当遺跡の火葬施設や墓坑も同様の葬送形態であったと考えられる。

さらに、井戸跡が墓域に付随して確認される事例は、これまでも数多く報告されており、当遺跡の井戸跡のいくつかは、墓坑に伴っていると考えられる。茨城県西部の当財団の調査では、五霞町の桜井前遺跡<sup>20)</sup>、釈迦新田遺跡<sup>21)</sup>に例が見られ、桜井前遺跡には火葬施設も検出されている。また、栃木県小山市の田間東道北遺跡<sup>22)</sup>、横倉宮ノ内遺跡<sup>23)</sup>にも墓跡とともに井戸跡が報告されている。当遺跡から、田間東道北遺跡は直線で約2.1km、横倉宮ノ内遺跡は直線で約1.5kmの距離にあり、二つの遺跡は西仁連川を挟んで対岸の台地上にそれぞれ位置している。これらの遺跡にも方形あるいは長方形土坑が重複しながら点在し、その多くが墓跡とされている。田間東道北遺跡の墓跡は14～15世紀、横倉宮ノ内遺跡の墓跡は15～16世紀頃の時期と報告されており、当遺跡と時期や墓坑の状況が類似している。

#### 4 鎌倉街道と集落

結城朝光が頼朝に近習したり、手柄を立てたりするようになって、結城と鎌倉のつながりは強固になっていく。この頃には鎌倉街道が整備されはじめたと言われている。この近辺には、下野国に向かう上道と結城市の西側を通り奥州へ向かう中道が通っていたとされている<sup>24)</sup>。金沢文庫文書「山河貞重寄進状案」<sup>25)</sup>には、「鎌倉大道」の記載があり、当遺跡の南側約5kmに位置している当時の茂呂郷（毛呂郷）付近を鎌倉街道が通っていたことが、『結城市史』<sup>26)</sup>に記載されている。茂呂郷（毛呂郷）を通過して結城城に向かう街道沿いには、海道東という地名や屋敷尻、屋敷付といった建物が建っていたと分かる地名が残っており、調査区域の南側も、南北約400m、東西約300mにわたって屋敷付という字名である。また、「大道」という字名は、当遺跡から南へ3.2kmの武井地区にあり、位置的に茂呂郷（毛呂郷）と当遺跡の間である。このように文献や地域の字名から、この地を鎌倉街道が通っていたことが推定できる。調査区域の西部を南北に走る道路は、地域の住民が鎌倉街道と今に伝えており、調査区域南側の屋敷付地区を縦断し、北側約100mの地点に所在する稲荷神社の北東付近で二方向に分かれ、東方向は結城城方面に向かっている。現在の景観は当時の名残を残しているものとみられ、当遺跡は鎌倉街道沿いに営まれた宿場町であったと考えられる。

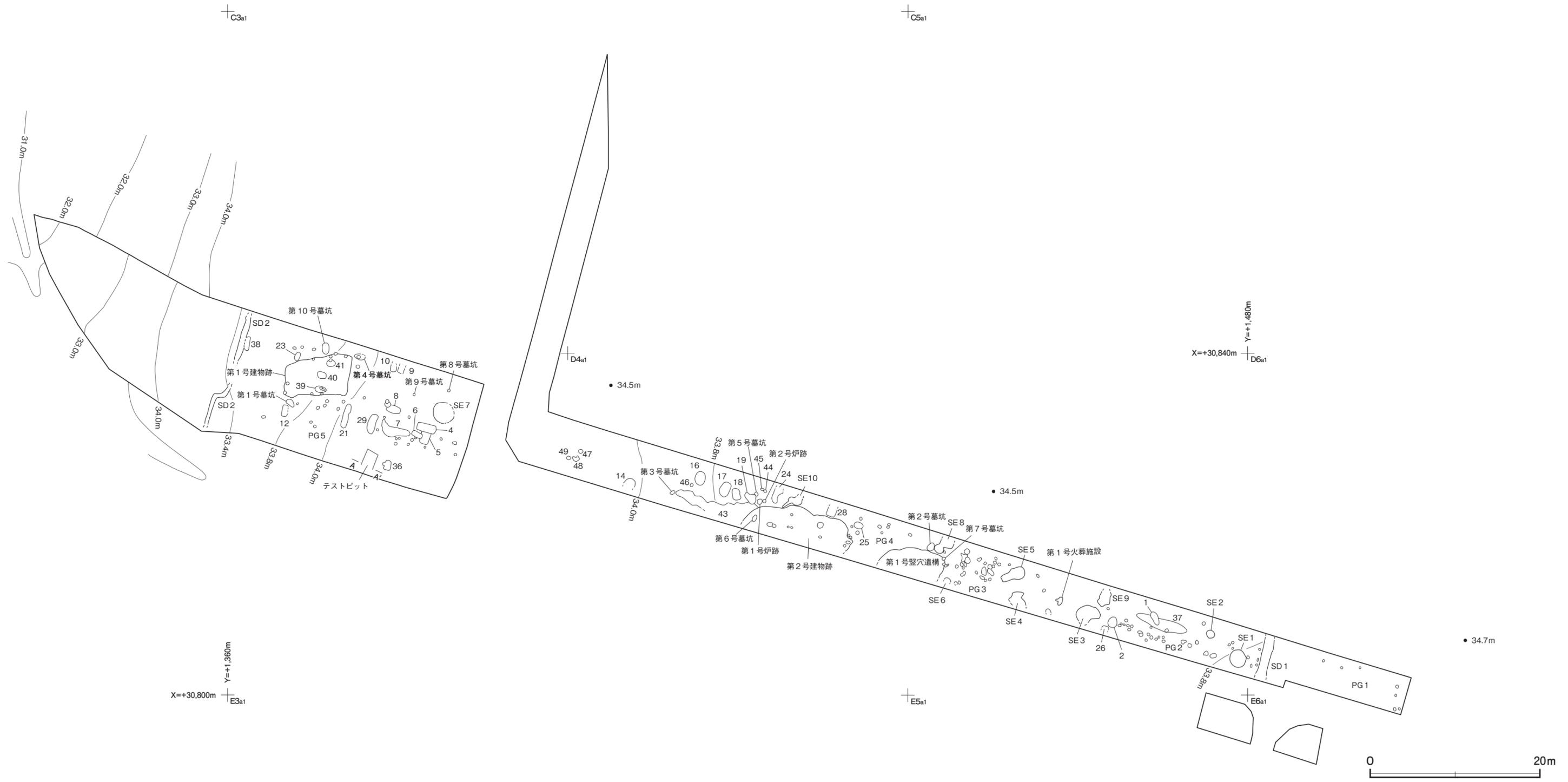
#### 5 おわりに

今回の調査では、現在の道路部分の発掘ができなかったため、鎌倉街道そのものを確認しているわけではない。今後の研究や発掘調査によって、鎌倉街道の道筋が明らかになった時、改めて当遺跡と鎌倉街道との関連を考察できる機会が訪れ、当遺跡のさらなる分析が行われることを期待したい。そして、今回の調査成果がわずかでも当地域における歴史解明の一助となれば幸いである。

#### 註

- 1) 結城市史編さん委員会『結城市史』第四巻 結城市 1977年3月
- 2) 結城の歴史編さん委員会『結城の歴史』結城市 1995年3月
- 3) 結城市史編さん委員会『結城の歴史』結城市 1974年10月1日
- 4) 茨城県考古学協会中世シンポジウム実行委員会編「茨城の中世考古学の最前線～編年と基準資料～」茨城県考古学協会 2011年1月

- 5) 柴垣勇夫編著 「関東、東海における中世土器（煮炊具）の最近の研究における研究成果」『中世土器・陶器編年研究会記録3』  
中世土器・陶器編年研究と流通様相の年代的解明班 2005年8月
- 6) 愛知県史編さん委員会『愛知県史』-別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系- 愛知県 2007年3月
- 7) 東北中世考古学会編「掘立と堅穴-中世遺構論の課題-」『東北中世考古学叢書2』 高志書院 2001年11月
- 8) 財団法人茨城県教育財団「中世の堅穴遺構について」『研究ノート』創刊号 1992年7月
- 9) 野田良直「主要地方道下館つくば線緊急地方道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書 中根十三塚遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第154集 1999年7月
- 10) 市村俊英「菰冠北遺跡 炭焼戸東遺跡 主要地方道筑西つくば線バイパス道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第295集 2008年3月
- 11) 大関武「一般国道354号(水海道バイパス)道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 前原遺跡 大門通遺跡 三本松遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第114集 1996年6月
- 12) 小野正敏 萩原光雄『戦国時代の考古学』高志書院 2003年6月
- 13) 田代隆 鈴木泰浩 山口耕一「下古館遺跡-住宅・都市整備公団小山・栃木都市計画事業自治医科大学周辺地区埋蔵文化財発掘調査-」『栃木県埋蔵文化財調査報告』第166集 1995年3月
- 14) 永井久美男『中世出土銭の分類図版』高志書院 2002年4月
- 15) 狭川真一著『中世墓の考古学』高志書院 2011年4月
- 16) 狭川真一編著『日本の中世墓』高志書院 2009年3月
- 17) 芳賀友博 寺内久永「村松白根遺跡1 大強度陽子加速器施設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書I」『茨城県教育財団文化財調査報告』第250集 2005年3月
- 18) 笹生衛「東国における中世墓地の様相」『研究紀要16』財団法人千葉県文化財センター 1995年1月
- 19) 斎藤弘「中世後期の墓地-下野を中心に-」『栃木県考古学会誌』第18集 栃木県考古学会 1996年11月
- 20) 桑村裕「桜井前遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第288集 2008年3月
- 21) 坂本勝彦「釈迦新田遺跡 首都圏氾濫区域堤防強化対策事業地内埋蔵文化財調査報告書1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第352集 2012年3月
- 22) 岩上照朗ほか「田間東道北遺跡 一般国道4号(新4号国道)改築に伴う埋蔵文化財発掘調査」『栃木県埋蔵文化財調査報告』第149集 1994年3月
- 23) 岩上照朗 亀田幸久 斎藤弘「横倉宮ノ内遺跡 一般国道4号(新4号国道)改築に伴う埋蔵文化財発掘調査」『栃木県埋蔵文化財調査報告』第161集 1995年3月
- 24) 浅野晴樹 斎藤慎一編『中世東国の世界1 北関東』高志書院 2003年12月
- 25) 結城市史編さん委員会『結城市史』第四巻 結城市 1977年3月
- 26) 註1に同じ



第 67 図 作野谷南遺跡遺構全体図

# 写 真 図 版



遺跡調査区全景（北西上空から）



第 1 号 建 物 跡  
掘 方 完 掘 状 況



第 2 号 建 物 跡  
遺 物 出 土 状 況



第 2 号 建 物 跡  
完 掘 状 況



PL2



第1号竖穴遺構  
遺物出土状況



第1号竖穴遺構  
完掘状況



第1号井戸跡  
完掘状況

第 2 号 井 戸 跡  
完 掘 状 況



第 3 号 井 戸 跡  
遺 物 出 土 状 況



第 4 号 井 戸 跡  
遺 物 出 土 状 況



PL4



第 4 号 井 戸 跡  
完 掘 状 況



第 7 号 井 戸 跡  
遺 物 出 土 状 況

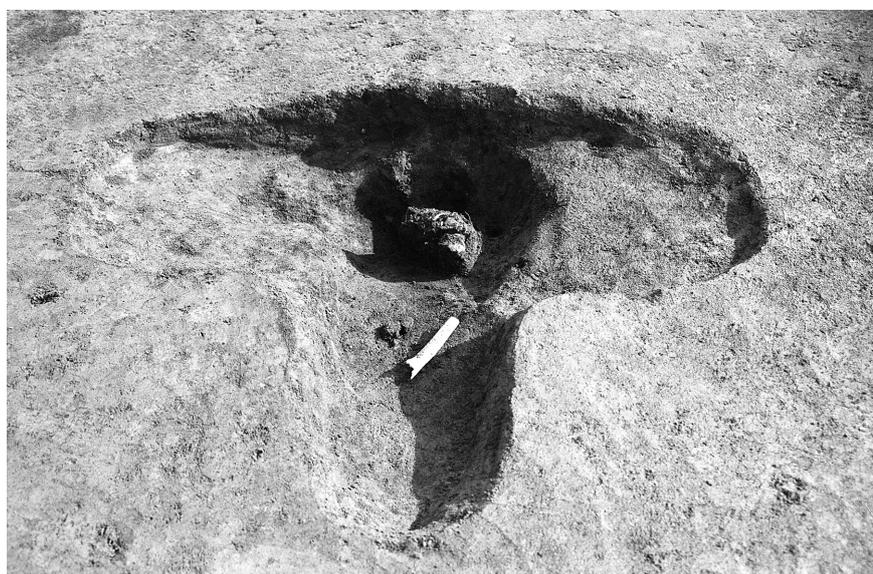


第 10 号 井 戸 跡  
完 掘 状 況

第 1・2 号 炉 跡  
完 掘 状 況



第 1 号 火 葬 施 設  
完 掘 状 況



第 1 号 溝 跡  
完 掘 状 況



PL6



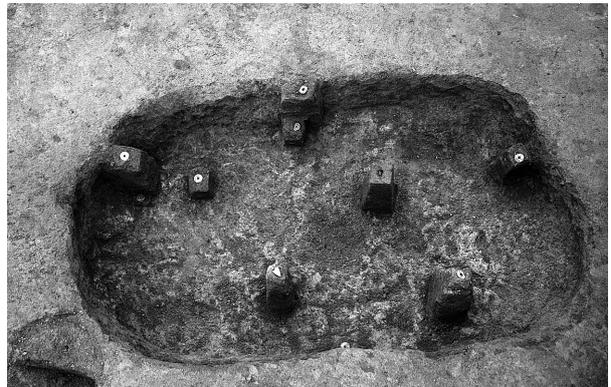
第1号墓坑 完掘状況



第5号墓坑 遺物出土状況



第6号墓坑 遺物出土状況



第10号墓坑 遺物出土状況



第18号土坑 完掘状況



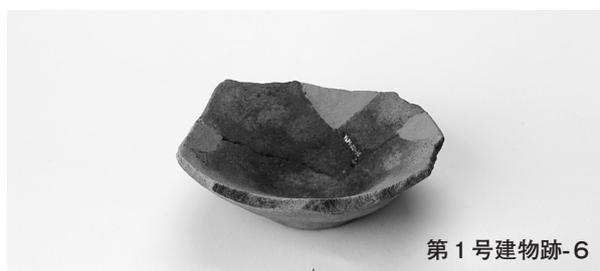
第2号ピット群 完掘状況



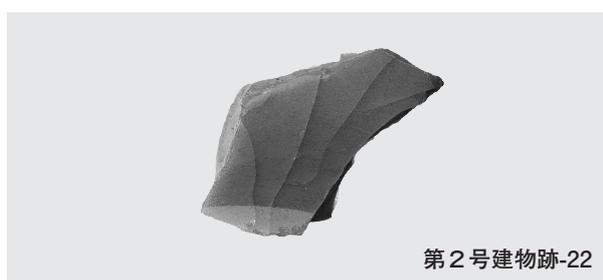
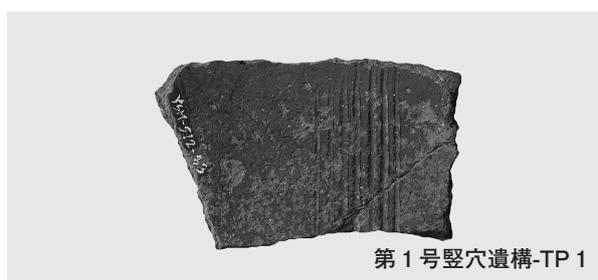
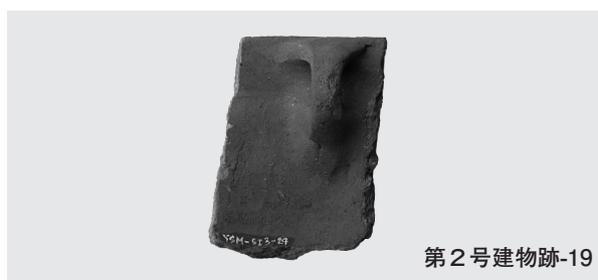
第3号ピット群 完掘状況



第5号ピット群 完掘状況



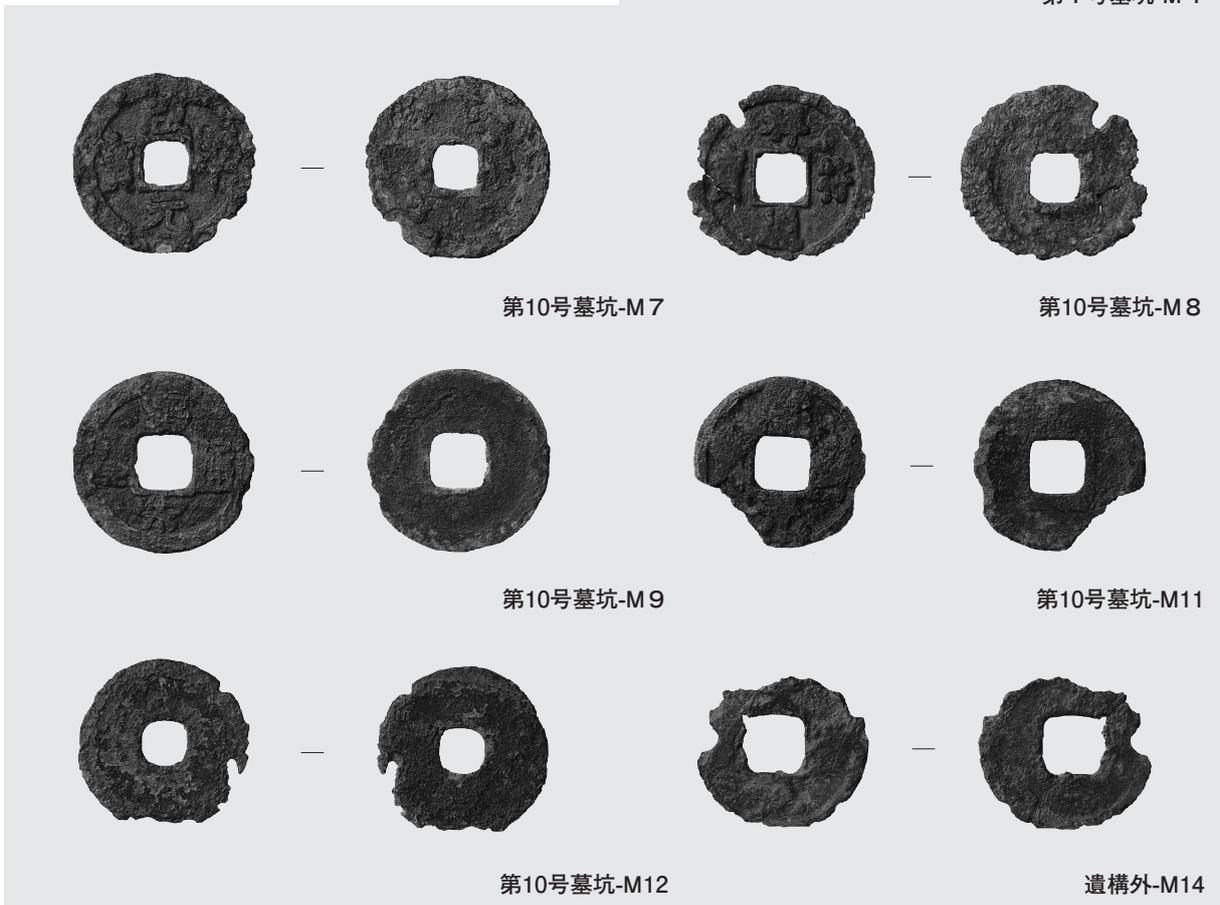
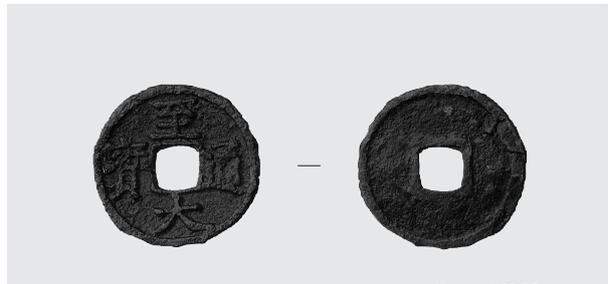
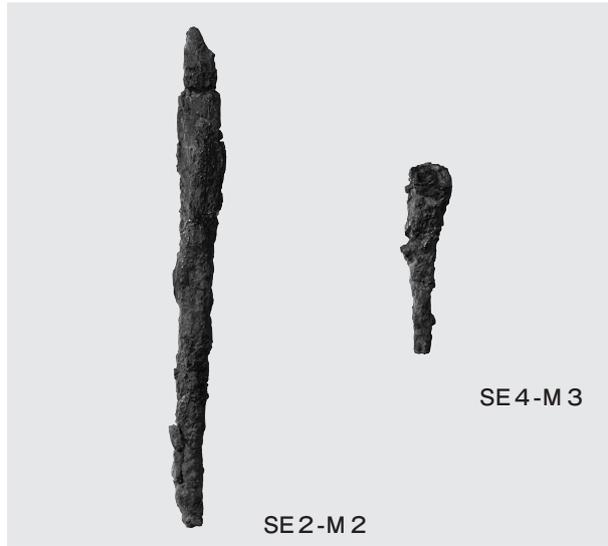
第 1・2号建物跡, 第 1号竖穴遺構, 第 3・4号井戸跡, 第 1号墓坑出土土器



第1・2号建物跡，第1号竖穴遺構，第1・4号井戸跡，第26号土坑出土土器



遺構外出土土器，第1号建物跡，第5号墓坑，遺構外出土石器



第7号井戸跡出土石器，第1号竖穴遺構，第2・4号井戸跡，第1・10号墓坑，遺構外出土金属製品

# 抄 録

ふりがな	さくのやみなみいせき							
書名	作野谷南遺跡							
副書名	一般県道矢畑横倉新田線道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第375集							
著者名	寺内久永							
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2013(平成25)年3月15日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
作野谷南遺跡	茨城県結城市結城字作野谷466番地ほか	08207 - 170	36度 16分 40秒	139度 50分 57秒	34 m	20111001 ~ 20111130	1,420 m <sup>2</sup>	一般県道矢畑横倉新田線道路整備事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
作野谷南遺跡	集落跡	室町時代	建物跡	2棟	土師質土器(小皿・皿・内耳鍋)			
			竪穴遺構	1基	瓦質土器(内耳鍋・播鉢・香炉)			
			井戸跡	10基	陶器(花瓶・播鉢・瓶子・甕)			
	墓跡	室町時代	炉跡	2基	磁器(碗)			
			墓坑	10基	石器(砥石・鉢)			
			墓坑の可能性のある土坑	8基	鉄製品(釘)			
			火葬施設	1基	銭貨			
	その他	時期不明	土坑	27基	縄文土器(深鉢)			
			溝跡	2条	弥生土器(壺)			
			ピット群	5か所	須恵器(坏・高台付坏)			
要約	室町時代の集落跡である。建物跡の近くに井戸跡や炉跡が確認でき、灯明皿や内耳鍋、常滑産大甕、石製鉢などが出土していることから、日常的な生活空間であったと考えられる。また、火葬施設や墓坑も確認でき、墓域も形成されていた。							

仕 様

編 集 O S Microsoft Windows 7  
Home Premium Service Pack 1  
レイアウト Adobe InDesign CS5  
図版作成 Adobe Illustrator CS4  
写真調整 Adobe Photoshop CS4  
Scanning 6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000ED  
組 版 OpenType13級リユウミンPro・L基本  
Adobe InDesign CS5  
印 刷 オフセット印刷  
写真製版 スクリーン線数 モノクロ175線  
・印刷所へは、Adobe InDesign CS5でレイアウトしたものを入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第375集

作 野 谷 南 遺 跡

一般県道矢畑横倉新田線道路整備  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成25（2013）年 3月12日 印刷

平成25（2013）年 3月15日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 八幡印刷株式会社

〒970-8026 福島県いわき市平字田町82-13

TEL 0246-23-1471